

関西学院大学 社会 学部

卒業論文

(研究演習指導 立木 茂雄 教授)

プロジェクト★ユース物語

2002 年 3 月 卒業

関西学院大学 社会 学部 番

8094	山本 聡司	8551	中村 佳史
8178	久保田 桂子	8568	中山 裕平
8379	澤山 佳世子		

目次

1 序論

- 1.1 研究課題（テーマ）の提示——新たな都市のコモンズづくり——
- 1.2 研究目的およびその意義の説明——ネットワーク強化の必要性について——
- 1.3 研究方法に関する説明——アクションリサーチについて——

2 本論

- 2.1 ストーリー——プロジェクトを通しての物語——
- 2.2 コレスポネンス分析の手順・説明
- 2.3 コレスポネンス分析の提示
- 2.4 ストーリー・コレスポネンス分析結果に対する考察

3 結論

- 3.1 プロジェクトを通じたメンバーそれぞれの振り返り
- 3.2 今後の研究への課題・問題点や提言

4 参考文献

5 添付資料

1 序論

1.1 研究課題（テーマ）の提示

地域ネットワーク強化が必要だと考え、そのための一つの手段として、〈コモンズの可能性〉について注目した。そして、〈新たな都市のコモンズ〉をつくることを研究課題とした。多辺田政弘（1990）によるとコモンズは『商品化という形で私的所有や、私的管理に分割されない、また同時に、国や都道府県といった広域行政の公的管理に包括されない、地域住民の「共」的管理（自治）による地域空間とその利用関係（社会関係）』と定義されている。つまり、そこに集うもの誰しものが、共の興味・関心を持ち、そしてそれぞれが責任を自覚したうえで管理することのできる空間が〈コモンズ〉であり、それら地域内のコモンズを拠点に既存のネットワークの再生・復興、また新しいネットワークの創出が活性化されると考える。

ネットワークづくりのゲートとしては、将来の社会を担っていく若者・青少年に焦点をあてた。彼らのエネルギーを地域の活性化・ネットワークづくりに生かしたいと考えた。青少年と地域を結ぶためには、彼らひとりひとりに街づくりの主役は自分たちだという意識〔自分たちのこと・自分たちのまち・自分たちの仲間〕をもってもらうことが大切である。実際に、1997年ナホトカ号原油流出事故が起こったとき、サーファーたちが連れ立ってボランティアに行ったという事実が報告されている（株式会社マリン企画、1997）。ここでは、海がコモンズとなり、それによって地域とサーファーのネットワークが形成された。

しかし、現在の神戸市にはこのようなコモンズがほとんどないと思われる。また、公園における年齢層を考えたとき、小学生またはそれ以前の子どもたち・高齢者が大半に思え、彼ら青少年の姿はあまり見うけられない。そこで、本研究では地域の公園など無料でスポーツに打ち込める場所を提供するところによって、地域とのつながりをもつきっかけになるのではないかと考えた。そして、手軽にでき、広大なスペースを必要としないストリートバスケットをコモンズとして提供することとした。また、〈彼らの地域での居場所の確保〉（彼らのエネルギーを打ち込ませること）を市民と行政とが協働で形成することが必要であると考えたため、本研究では、行政と協力し、新たな都市のコモンズをつくることをテーマとした。

1.2 研究目的およびその意義の説明

本研究は、防災に強い街をつくるためには、地域ネットワークを強化する必要があると考える。阪神・淡路大震災の経験から、災害が起こったときの地域の助け合い、共同作業というものは何より重要で、欠かせないものだとすることを体験した。つまり、災害に強い街をつくるために、地域のつながりは不可欠であるといえる。

また、阪神・淡路大震災をうけ神戸市では、多くの人たちが仮設住宅などに転居し住み

慣れた土地を離れることを余儀なくされた。震災から 7 年たった現在でも元の土地に戻ることができず地域との交流、つまり〈ネットワーク〉が減少したと感じられる。たしかに、震災復興は目に見える部分で推進しているが、住民の〈生活の充実〉〈こころの安心・ゆとり〉は今もまだ取り戻せていない部分が多くある。これらを解決するためには、住民ひとりひとりが互いに地域で一体となって支えあっていく必要がある。その中でも神戸市震災復興推進プログラムでも取り上げられている〈青少年の健全育成〉〈青少年の居場所づくり事業〉に協力し、子どもたちを地域ぐるみで育てていく環境をつくることも必要であると考えた。

地域の結びつきを強めることによって、市民ひとりひとりが地域に関心を持ち、地域活動が活性化する。さらに、生活再建を推進することにもつながると考える。つまり、災害に強い街をつくるためにも、震災復興のためにも〈地域ネットワーク強化〉が必要である。既存のネットワーク強化はもとより、今までになかった新たなネットワークの必要性が迫られている。

1.3 研究方法に関する説明

社会学にはアクションリサーチという研究方法がある。立木茂雄（1997）によるとアクションリサーチとは「何らかの問題解決の場面に実際に参与し、問題解決のアクションを起こす。そしてそこからどんなものが法則性として見えてくるのか、を仮説検証していく調査の方法である」。今回は事興しということで我々はバスケットリング設置チームを組み実際に事業に取り組んできた。このことから、本研究はアクションリサーチといえる。我々の 1 年間の行動をコレスポネンズ分析し、街中にバスケットリングを立てるためにはどのようなことをしていかななくてはならないかを検証する。

プロジェクトを実行する課程においてバスケットリングに関する調査を 2 回行った。これはバスケットリングのニーズ調査であり我々がプロジェクトを進める上での参考資料とした。

リングを設置した後、利用状況を知るため現地で聞き込みによる調査を行っている。この調査では調査日を決めておらずランダムに現地へ赴き、利用者と話をする形をとった。これは公園が様々な人々の憩いの場でありその利用者が特定されないという特徴と、リングが屋外であり無料であるため 24 時間いつでも使える状態にあるため、利用時間を特定できない、また我々も 24 時間待機することが不可能であったことから、調査時間及び日程を特定し、データとして数値化しても信用度が低いので、話を聞き参考にするという形をとった。

2 本論

第1章ではまず、我々がこのプロジェクトに取り組んできた過程を一つのストーリーとして述べていく。第1章のストーリー中には、〈a〉〈b〉〈α〉〈β〉などのアルファベットやギリシャ字が、上つけ文字で表記されている部分が多くある。これらは、第2章におけるコレスポネンス分析での〈カテゴリー〉と対応しているものである。以下、我々プロジェクト★ユース班の物語を述べていく。

2.1 ストーリー

2000年11月〈防災福祉〉を卒論のテーマにしようと、久保田桂子、澤山佳世子、中村佳史、中山裕平、山本聡司の5人が集まった。我々は「阪神・淡路大震災という出来事を受け、将来これと同じまたは別の災害が起こったときどのように被害を防げばよいのか災害に強い街とはいかなるものなのかを研究しよう」と集まったのだ。

そこで我々が最初に目をつけたのは、日本海で起こった原油流出事故の記事である。これはいわゆる自然災害ではないが、我々が注目したのは「事故が起こった後の地元の人々とこの海を利用しているサーファーたちが団結し流出した原油の回収をしたというところであった。このことは、阪神・淡路大震災のとき被災した人たちの一番の助けになったのは隣人であるということにつながり、また災害に強い街作りのヒントになりえないだろうか」と考えた。

ここで話は戻り、なぜ地元の人々とサーファーたちは団結することができたのかを考えたい。事故以前は地元の人々はサーファーたちのことを快く思っていなかったというのだ。しかしこのとき「彼らは確かに団結していたのだ。それは「海」というのは地元の人たちやサーファーたちにとって〈我が事と思えるもの〉だったのだ。これは我々の指導教授である立木が言っていた〈コモンズ〉に他ならなかった。このコモンズこそ我々が着目する防災福祉には不可欠だと考えついた。「災害に強い町を築くには、〈つながり＝地域ネットワーク〉が必要であり、そのつながりを形成する場所こそコモンズである」と考えた。そして、我々はコモンズを作ることを卒論のテーマに決めた。

12月この年最後のゼミの時間。どのようにそのコモンズを作ろうかと思案していた折、メンバーそれぞれにバスケ経験があったこともあり、指導教授の次のような声かけがあった。「コンビニの壁にバスケットリングをつくって、その前にたむろしている若い奴等にストバスをさせて、エネルギーを発散できる場所をつくったらどうだい？」

この言葉は的を射ていた。我々の頭の中で「サーファーと海の関係図がそのままコンビニまゝにたむろしている「若者とバスケットリングの関係図に当てはめられたからだ。そして街作りには若者の力が必要と考えていたこともあり、我々の考えは一致した。この瞬間青少年（ユース）を対象としたプロジェクト、プロジェクト★ユースが発足した。我々はグル

ープ活動であることから、メンバーの行動を把握するためネット上に掲示板を立ち上げた。

2001年1月我々はまず、**♫バスケット**について調べた。バスケットは日本では秋田県が主流であった。秋田県にはストリートバスケットもあるとのことだった。しかし、その他をみるとバスケットリングは施設にあるらしいのだがほとんどが有料であった。また、**♫リング**について調べたが結果は同じだった。ここから²²我々は無料で使えるバスケットリングを本格的に目指すことにした。

1月12日 **♫**指導教授の立木から掲示板に投稿がある。内容は、我々のプロジェクトを進める上で公共の場所にリングを立てるとなると、行政の協力が必要になってくるのではないかという話になっていたため立木の知り合いである神戸市役所の森田氏に立木が **♫**コンタクトをとってくれたことについてだった。この時に1月25日の市役所訪問が決定していた。それはその日までに我々のやりたいことや目的をある程度まとめた企画書を作成しなくてはならないことを意味していた。

早速我々は企画書作りにとりかかった。しかし、我々は **♫**企画書というものを書いたことがなかった。しかし、迷っている暇はなく我々の感じていることをそのまま書くことにした。そしてゼミの時間に意見を出し合いそれをまとめた。その文章はこの時の全員の意見が盛り込まれており、簡潔にまとまっているように思えた。しかし、その後掲示板への投稿より、キーワードで抜け落ちているものがあるとの投稿があった。そのキーワードは、少子化、核家族化による世代間コミュニケーション不足、**♫**世代間ネットワーク不足への対策、再生。また、**♫**世代間コミュニケーション不足による偏見、恐怖心。今回の活動を通して、それらの解消、ひいては **♫**地域コミュニティの発展、**♫**青少年の地域への参加。というものであった。大きな意味での **♫**地域ネットワークの中には世帯間だけでなく世代間のネットワークがあるのではないか。地域のネットワークは〈お隣さん同士〉が仲良くなることではなく、高齢者と若い世代の人がつながることだ。現在若者とそれ以外の世代のコミュニケーション不足が確実に生じている。だから、高齢者にとって若者はえたいの知れないものとなり、若者に対して偏見や恐怖心が生まれる。だから若者を見たときに「今時の若者は！」と一瞥をくれるのみになってしまう。それを解消するには若者の行動が目に見える形になればいい。そのために我々は **♫**バスケットを通じて世代間のコミュニケーションを強化したいというものだった。この意見から、もう一度企画書の内容を見直すことになった。

1月18日我々はミーティングを開いた。企画書の内容を煮詰めるためである。焦点となったのはこのプロジェクトと〈世代間コミュニケーション〉の欠如を埋めるにはどうすれば良いかということについてである。出た意見としては、

- ・ **♫**青少年、ストリートバスケットを基本に進めていくからいきなり〈世代間〉ということに結びつけるのは難しいのではないか。
- ・ ステップを踏んでゆくゆくは **♫**〈世代間コミュニケーション〉につなげていきたい。
- ・ おじさん、おばさん、おじいさん、おばあさんから **♫**若者に対する偏見をなくしたい。

・f 青少年の活動が見えるようになればいい。

そして、e 青少年より上または下の世代からの偏見がなくなれば世代間の溝がなくなっていくのではないかと、そしてそれは世代間コミュニケーションが生まれてくることを意味しているのではないだろうか。そうなれば新たなネットワークが形成される。f 我々は自分たちのプロジェクトの意義をかみしめていた。

しかしここである不安がよぎる。それはv 青少年の活動の場としてバスケットリングを作ったとしてもストバスをしたい人だけが集まり、しかもそれがただ遊ぶためだけで「はい、作りました。はい、遊びました」で終わりつながりが生まれなかったらどうしようかということだ。これではプロジェクトの意味がない。我々は遊び場作りが最終目標ではないのだ。我々はそうならないように、あくまで〈地域との結びつき〉〈新たなコモンズ作り〉を念頭に置き〈自分たちのこと〉、〈自分たちの街〉、〈自分たちの仲間〉という意識作りにつとめようということ意見が一致した。

そして企画書を煮詰めていった。f 目標は新たな都市のコモンズをつくること。そのステップとして青少年の健全育成を切り口にする。しかしh 地域のネットワークの強化、新たなネットワーク作りをどう伝えるかに悩んだ。自分たちの中にある理念や課題の関わりについて頭では言いたいことは分かっているが、企画書として文章にするのは難しかった。そしてこの日まとまったことは、

主張：f 地域のネットワーク強化のために新たな都市のコモンズを作る

- ・震災からネットワークの重要性を学び、ネットワーク強化の方法論としてコモンズ作りをあげる。コモンズ作りの切り口として青少年に焦点を当てる。(ゲートキーパー)
- ・既存のネットワーク強化はもとより、今までになかった新たなネットワークの必要性が迫られている。そのきっかけを作っていきたい。

ということである。またこの日話し合ったことの中に公園についてがある。h コモンズを考える上で公園はコモンズになりえないのだろうかということだ。公園利用者の年齢層を見てみると、小学生またはそれ以前の子どもたち・高齢者が大半を占めている。つまり中間層が抜けているのである。本当はこの層の人々が社会のエネルギーとなっていくはずなのだが、人々の交流の場である公園にこの層の人がいないのはなぜだろうということだった。しかしこの日はここでこの話は終わった。そして、この話し合いを元に市役所へ持って行く企画書は完成した。【添付資料1 参照】

1月25日我々はプロジェクト・イマジン、プロジェクト・パラリンピック(後の障害者レク班)らとともに市役所を訪れた。市役所の対応は意外だった。もっと否定的な反応が返ってくるのではないかと思っていた。しかし、p そこで得た情報は我々にとってq 大変有益なものであった。ニューヨークやブラジルではアーバンスポーツが行われている。それは街中で街の人が空いている土地、広場を使ってバスケやサッカーをしているのだ。それはまさしく我々がやろうとしていることそのものであった。しかし、さらに我々の関心を集めることがあった。それは日本において神戸製鋼の平尾氏は何年も前からこのアーバン

スポーツに注目し、スポーツ NPO-SCIX を発起しているというのだ。このことは⁴⁵我々の中にあるプロジェクトの成功に対する不安を和らげると同時に希望となった。

しかし、良いことばかりではなかった。それは以前に無料で利用できるバスケットリングが設置されたことがあったらしく、その時は地元の人から苦情があり閉鎖されたというのだった。つまり、^a実際の問題として設置するには地元の人々の協力が必要になってくるのだという。そして、^b設置すればそれなりに苦情も出てくるし、それに対する対応も考えておかななくてはならないとのことだった。また、^d我々が卒業した後、^eリングの管理は誰に引継ぐのかということも問題として挙げられた。このことは我々も考えてはいたが、^b現実をつきつけられた瞬間であった。

「我々はコモンズ作りを目標としている。実際のアクションリサーチをしていく上でも、市役所の方に指摘されたように作りっぱなしで、自分たちの要求押しつけるだけではいけない。引継ぎの問題、背景的な問題を考えていかなければならない。我々が実際に関わっていけるのは^d一年間という期限付きということをもっと念頭において考える必要がある。その短い期間に何が出来るかをもっと明確にしていけないといけない。具体的には、実際に街中の青少年に意見を求めるということは大切なことでリサーチをし、それをまとめるのも我々のできることの一つでありこの企画に関わる上で大切なことだと思う。それから、実際にそれにとりかかっている機関を訪ねることによってそこから出ている問題点や失敗談などもリサーチした方がよい。いろいろ考えるとまだまだ^d情報が足りていない。しかし、やるべきことが明らかになった。

我々は^eリングを街中に設置したいという希望を伝えたところ、地元の人から理解も得られ、実際にできそうなところで商店街はどうかということになった。商店街は人が集まる場所であり、地域のネットワークの中心であった。また、ローソンについての話ではオーナーのいるローソンならば、頼めばリングをおいてもらえるかもしれないとのことであった。^eローソンならば地域性も高く、若者も集まるのではないかということだった。

我々のプロジェクトとは直接関係はなかったが、イマジン班絡みで名谷にパティオがありその中に青少年施設があるということを知った。ここは青少年が自由に使える施設で若者がたくさん集まる場所であった。我々のプロジェクトを進めることに対しても利用できそうだったのでこの日見学に行くことになった。

パティオに行ったがこの日は雨であったので若者の姿は少なかった。立地条件は大変良くリングを設置するには良いように思えたが、^e場所が都市から離れていたため、我々の当時の街中に設置という目標からは外れていたためパティオは一旦保留となった。

1月31日その後市役所の森田氏と立木の間であるやりとりがあった。それは2月24日に行われる震災復興記念事業「届け希望の灯り全国へ・ターニングポイント 2.24——市民ランナーを囲んで——」（以下2.24）のイベントに立木ゼミの生徒も参加しないかということであった。これは^e森田氏が我々のプロジェクトを覚えてくださり、人が集まるこのイベントでアピールする^aチャンスを与えてくれたのだった。そのことを知らせるメールが

ゼミ生に一斉送信された。このメールをいち早くチェックしたのはイマジン班の岡田晋爾であった。そして岡田のところへファミリーサポートクラブ（ファミサポ）班の高次真美、及びユース班から山本が集まり、2.24 プロジェクトの幹事となった。しかし、我々にとってこの話は急なことであり、この時はにわかには乗り気ではなかった。他のゼミ生も同様であった。その時立木からメールが送信される。その内容は、

ゼミ生数人から言われたらするモードの問い合わせがありました。現時点では何も決まっていないのです。私が期待しているのは、「面白そうだから、積極的に企画を立ち上げよう（そして自分たちが主役意識で関わろう）」という意識をもってもらいたいということです。「言われなくても、何ができるか」を「企画立案から関わる気があるか、ないか」が問われている、と思ってください。3on3の企画まで森田氏が持ち出しているのに、なんで君たちは、もっと飛びつこうとしないのですか？

ということであった。そこで参加することが決まった。

しかし、v企画立案から関わろうにもどの程度踏み込んで良いのか我々は分からなかった。特に他のプロジェクト班は迷っていた。その時の様子を高次が端的に掲示板に残している。それは、「最初に先生からいただいたメールだけでは、正直なところ、イベントのイメージ、そのイベントが行われるに至る経緯・背景、雰囲気、自分はどうか関わっていいのか、ということがつかみにくいという点があるかと思います。たとえば、気になっていることの一つとして、3on3というブースだけに私たちが関わっていくのか、それともイベント全体を運営するところまで関わっていくのか分からないということです。」である。

そこで一度森田氏とコンタクトを取ろうと立木に森田氏とのコンタクトの取り方を聞いたところ、「森田さんの言っている3on3は、君たちのプロジェクトを想定してのことです。それ以上の企画は何も（現代階では）ありません。これをどのように西区の青少年センター企画につなげていくか、良いアイデアを出してください。森田さんへのコンタクトというよりは、企画案を作ってください。場所の下見なども踏まえて考えられると良いですね」との返答であった。vなぜ先にコンタクトをとらしてくれないかと不満が募った。

2月1日我々は早速ミーティングを開いた。中山は欠席だったので4人で話し合った。場所は西宮のフォルクスだった。フリースローの企画が最初にでた。以下ミーティングノートの抜粋

- ・フリースペースとしてリングを2個設置する。
- ・ボールを5個くらい用意しておく。
- ・時間を決めてフリースロー大会を2回くらい行う。（他のイベントとの関係を考えて決める。）
- ・景品は必要かどうか。
 - ：景品を出すならば他のイベントやスポーツ企画と連携させて、参加者に券を発行し券が集まったら1回くじが引ける。
 - ：ショップと連携して商品を出す。（フリースローの結果によって。）

: 景品をこちらで用意する。

宣伝方法

- ・ビラを作成して配る。
- ・ポスターを作成(ショップ・学校・パティオ・市民体育館・商店街 etc.に貼ってもらう。)

—以上、足でかせぐ—

ニーズ調査の内容

- ・そこに集まる人たちに、街中に気軽にバスケができるスペースがあったらどうか。(青少年のニーズと地域の人の意見を聞く。)

—もっと具体的に調査内容は煮詰める—

ニーズ調査の方法

- ・アンケート用紙を作成するのではなく、デジタルビデオカメラまたは音声録音などでニーズ調査を行う。(アンケート用紙記入は面倒に思うことが多く、気軽に頼みにくい。しかし音声録音などは率直な意見が簡単に得られる)

というような意見がでた。

この時我々は「イベントにユースが関わることについて大きなチャンスと考えた。また、イベントだけで終わるのではなく「今後のプロジェクトにつなげたい。」「バスケットリングを設置してすぐに撤去してしまうのではなく設置を継続させたい。我々は「リングがあるからバスケをしてみようかな」というような自然発生的なものを目指している。そこで、「このイベントを機会にリングがあるということが広まり人が集まれば新たなつながりが生まれるのではないだろうか。このような場所を一か所だけでなくいろいろなところに発生させたいので、試験的に「東遊園地でのリングの設置を継続させたい。またこの時、実際に東遊園地にも足を運んでおりその時この場所がスペース、周りの環境から考えても設置するのに最適であると確信した。バスケットリングの方は壊れにくく公園などに設置するのにふさわしいものを検討するため「バスケット用品店(パワーハウス)へ行き、話を伺う。その店員の話によると、リングは埋め込み式が良いらしいが、このタイプは工事が必要になり、価格も20万円程度かかることが分かった。また街中のリングのニーズが高いこともわかった。また、パワーハウスに2.24のビラを置いてもらうこととなった。

このようなこともふまえ森田氏と相談したいと思い、以上のようなことと森田氏とコンタクトを取りたいという趣旨を立木にメールを送る。その返答は、「企画案をざっと見ました。問題は、以下の企画が希望の灯りとどう関係するのか、という点です。復興記念事業そのものの趣旨、希望の灯りなどの前提の知識がないと、なぜ2.24にするのか説得力がありません」であった。

我々以外のゼミ生もこの企画について様々な意見を寄せていた。特に岡田・高次は全員の意見をまとめるなどして、ユース班に「多大な影響を与えてくれた。また、イマジン班もこのイベントにバスケ以外の方法に関わることが決定していた。その関係で、イマジン班から山口郁がユースに関連ある事項についての「情報を多く提供してくれた。

我々は先生からのメールを受け希望の灯りについて調べることにした。確かに最初の企画では自分たちのやりたいことを羅列しているだけであったのでもう一度イベントとの関わりを考えようとしたのだ。そこで、ユースあてに山口が掲示板に神戸市のホームページの情報を載せている。これらの情報から希望の灯りというイベントについての知識が確実に参加者に広まっていった。

そしてイベントとバスケットを関連づけるにはどうするかという話し合いが続いた。しかし、なかなか良い案がでず膠着状態が続いた。その膠着状態を打破したのは希望の灯りというイベントが震災復興記念事業の一環であることと、犠牲になった人たちに対する慰霊の意味も含まれていることから、震災で犠牲になった方の人数分のゴールを集めようという意見だった。この意見は当時の我々にとって大変素晴らしいものであった。しかし、この話を煮詰めていく段階である問題が浮上してくる。それは、犠牲者の数が6430人であることで、入る・入らないは関係なくシュートのみを集めるにしてもかなりの時間がかかってしまうことであった。しかし、この発案は捨てがたく我々は思案した。そして目標を6340本にして集められるだけ集めるのはどうかという案がでたのだが、数はごまかしたくないという思いからこの案は却下された。

これと同時期にイベントでやることについて話し合われていた。一つは景品についてである。しかし景品は単なる人集めの道具でしかないという意見から却下された。

次に募金活動である。このようなイベントのときに募金活動をすればたくさん集まって、イベント参加者として社会活動になるのではないかという意見から始まったのだが、何故我々がやるのかという理由と意図が不透明であるという意見が出た。これについては様々な意見が交わされた。一番議論の対象となったのはその使い道である。使い道のわからないお金を集めても無駄ではないか。ならば、シュートで6340本が難しいから募金をしてくれた人の数または金額とこの数字を絡めたらどうか、その際に署名してもらおう。これならば意味づけができていく。しかしそうすると、お金の管理はどうするのか。使い道の問題が解消されていない。ユースがこの先のプロジェクトで使う。しかし、そうするとお金が絡んだ引継ぎ問題が浮上してしまう。では、募金ではなく震災復興に役立てるための義援金として集めたらどうだろうか、しかしそれならなおのこと我々がやる意味がわからない。しかし、「震災復興に役立った」とイベントを訪れた人々に実感してもらうには良い手段だ。というような流れで話し合われた。

この話し合いの中で出た署名活動に関しては、みな一様に賛成の意思を示した。つまり、署名することにより震災復興に対する意思表示になるのではないかという思いがあったからだ。この署名案は後にシュート案に発展していく。

2月5日募金活動の答えが出ないまま、ミーティングを開いた。この日までにみんなから寄せられた意見を一度整理し、ユースとしての結論を出そうとした。そして話し合った結果、決定まではいかなかったが、大体の筋は決まった。それは、基金活動案はなくなる。理由は以下に述べる。

1. 被災者の方々の気持ち（どれほど苦しかったかなど）や背景を理解していないのに、安易に基金活動をすることに疑問。
2. そのお金が本当に必要な人のところに届くのが分からない。
3. 使われる先を理解しないまま、「お金を集めました。はい、誰か有意義に使ってください」というのはあまりに無責任。
4. 我々は〈街の復興〉も大切だけど〈心の復興〉を目指したい。
5. 本当にそのお金が、意図しようとしている復興事業などに使われているのかは分からない。そして責任が持てない。

署名活動はする。

方法は

1. シュートを打った人全員に書いていただく。
これは、何らかの形で（シュートを打つという形で）参加したという〈証〉。
2. これに加えて写真を取る。

ビデオという形で、街中のリングへのニーズ調査を実施する。

対象は、東遊園地周辺の町を歩いている人ではなく東遊園地を訪れた人。

しかしメインはシュートなので空いている時間にできるだけ多くの人に聞くようにする。

イベントの内容について

- ・〈フリースロー〉ではなく〈シュート〉という形にする。つまり線などは設けず、どこから打ってもらっても良いことにする。
- ・6430本にこだわらない。6430本にこだわるあまり、一本一本のシュートがめちゃくちゃになってはやっている意味がない。むしろシュート一本一本に思いを込めてもらう。入っても入らなくてもカウントし「結果〇本のシュートが打たれた」というようにする。
- ・打った人と6430人いる犠牲者の方とを照らし合わせたとき外してしまったらその人が罪悪感を覚えてしまいかねない。よって一人何本でも納得のいくまで打っていただく。その時のその人の気持ちを重視する。
- ・題して、「6430人の震災犠牲者の方々と神戸の復興に思いを込めて」

リングを埋め込むことの意義

- ・震災を知らない世代にもつながるものが、公園にある記念碑だけ出なく、彼ら（彼女ら）が使うバスケのリングであれば、語り伝えていける。
- ・バスケのリングが市街地に増えることは、街作りと同時に、震災以降かわりゆく街への忘れてはならない記念碑になるかもしれない。

以上のようにまとまった。その後立木から復興記念事業とは何かという森田氏が書いた文章がメールで送られてくる。

2月13日 2.24 企画の会議に出席する。この時、この会議はほぼ最終段階に入っており、

他の参画団体からはなぜ今ごろなのかといった非難がされた。しかし、立木は我々に対し言ったのだ。「企画立案から関わるように」と。それなのに我々が会議に出席した時にはすでに大方のことが決まっていたというのはどういうことだろう。これまでにこの企画がどの程度話し合いがなされていたのかを我々に伝えられなかったのはなぜなのか。企画立案から関与しようとゼミ生が動いていたのにそれまでの会議に呼ばれなかったのはなぜなのか。いまだに疑問である。

それはさておき会議において一応我々の意見は通った。しかしリングを埋め込むということは無理になった。なぜならば、東遊園地は公園の管轄が別に存在しリングを設置するにはそこの交渉が必要となってくるからだ。だからこの時にいきなり埋め込むということは不可能ということになった。結果リングは2.24では簡易のものが設置されることになった。

打ち合わせ会議の後バイエリアの田中氏から電話が入る。内容はリングについてであった。ボードの大きさなどの話でこの日使う分には全く問題がないことが分かった。

呼びかけに使うビラのデザインはメンバーの知り合いに頼むことにした。大変良いできとなった。このビラはフェニックスプラザで500枚刷られた。

我々はアンケートに使う質問用紙の作成に取り掛かった。聞きたいことを率直に聞けるよう質問は少なめに絞った。アンケート結果を見て考察をした。

2月24日 2.24当日イベントは成功した。というより意味があった。我々のブースは予想以上の反響を呼んだ。多くの人々がシュートを打ってくれた。また、シュートを打っていただいた全ての人の写真を貼ることでその人が何度もブースを訪れてくれた。それが人を呼びシュートを打ってくれる人が増えていく。結果200人以上の人がシュートを打ってくれた。もちろんあの笹山市長もだ。そして、アンケートにもたくさんの方が答えてくれた。すごく嬉しく思う。もちろん、この時点で我々は、最終的に街中にバスケットリングを設置させていただくことを目標にしていたが、今回のイベントがそれにつながる、つながらないは別にしたとしても、参加させていただけただけでも良かった。今まで漠然と地域活性化のためにバスケットリングを設置しようと思ってきたが、より具体的に将来の復興にかける地域のつながりについて考えることができた。また、いろいろな年齢層の方々にふれて、言葉を交わし、時にははしゃいだ。こういう相互の経験の積み重ねも、新たなネットワークづくり、コモンズにつながっていくのだなという考察を立てられた。ある意味、あの日参加してくださった人々の間には「2001年2月24日に東遊園地であった希望の灯りのイベント」とか、「2001年2月24日に東遊園地でバスケットリングにシュートを打ったんだ」という共通認識ができたといえる。プロジェクトを立ち上げたからこそ今までは考えられなかったような行政の方々、市民の方々とふれあいの機会が得られた。このプロジェクトを進めていく価値は十分にあると確信した。また、自分たちだけでは成しえないプロジェクトである実感した。

今回のアンケートをして市民の皆さんの意見として出てきた中には、リング設置を行う

にあたっての懸念すべき問題だった。・管理の問題・・タムロする問題・・ルールの問題・・ゴミの問題がでてきた。しかし、これらの意見は行政の意見としてあげられるものだと考えていたので、市民の意見として出てきたことは少し意外だった。しかし、これらの問題は我々の中でも懸念される問題であろうと認識していた。ただ、このように市民の声として表面化した今、さらにこの問題を掘り下げる必要性を改めて感じた。しかし、基本的に我々は「このバスケットリングを公園等と同じコモンズとして位置付けており、必要以上の管理、ルール化は望むものではなく『〈自然発生的なもの〉を目指している。そして、これらをコモンズとして位置付けている以上、これは利用する『青少年のみのものではなく、地域住民を含めて共有の財産なのだ。よって、問題解決においても利用するものだけに理解を求めるのではなく、双方が共に問題解決にあたることによって、^{fn}地域に根ざした青少年の居場所づくりができる」と我々は考えた。『遊び場がコモンズとなり、『新たな〈若者の〉〈同世代の〉さらには〈世代間の〉ネットワークが生まれてほしい。生まれるはずだ。今回の『アンケートによって得るものは大きかった。しかし我々が焦点を当てている中高校生の意識調査があまりできていないという問題点もある。これからも継続的にアンケートを実施し、さらに掘り下げた意識調査を行っていくことも必要であると感じた。2.24 のイベントは神戸新聞を主に各マスコミに取り上げられていた。

そんな折神戸市がマスコミに対して平成 13 年度の神戸市予算を発表した。【添付資料 2 参照】ここで我々は新規施策の中の NPO との連携の部分に目をつけた。我々のプロジェクトが神戸市役所に認められれば、この予算の内いくらかが我々に回ってくるのではないかと考えた。2.24 で波に乗っていたこともあり、神戸市に対しアスリートタウン構想の件でプレゼンすることにした。

4月2日我々はミーティングを開いた。そこで今後の行動について話し合った。主に決めたことは、市役所に対してプレゼンを行うため資料となりうる企画書を作る。以前作ったものではなくもっと内容の濃いものを作る。そのために企画書作成の手順を立木に聞く。そして2.24 の報告書【添付資料 3 参照】をまとめプレゼンで使用できるようにしておく。また、2.24 では肝心の青少年の意見が少なかつたため、近くの中学校に社会調査の協力を依頼する。予算関連のことを詳しく把握しておくため青少年課の吉田氏と連絡をとる。最後にリング設置の案を出せるよう候補地を考える。ということが決まった。

早速我々は作業に取りかかった。まず吉田氏の所へは4月12日午後1時に訪問することが決定した。この時イマジン班の方から市役所訪問に同行したいという願い出があったので同行することにした。次に社会調査の質問内容を決めていく作業をした。最初は簡単な内容にしていた。

4月9日我々が4年生になって初のゼミがあった。この時話し合われたのは、社会調査の質問内容をもっと増やすべきかどうかであった。質問内容が多いと中学生がめんどうくさがり、質問に対して適当に答えてしまったら調査の意味がなくなってしまうのではないかという恐れもあった。そこでここでは始めは簡単な内容から入り、どんどん内容の濃い質

問をしていこうということになった。次に話し合われたのは設置することによってどんな苦情が出てくるかを事前に調査するかということであった。話し合った結果、実際に置いてある場所へ行き現在出てきている苦情を調査し、次に候補地へ行きどんな苦情があるかをきく。その2つを比べたら興味深い結果が得られるかもしれない、となった。そこで設置する場所をそうするかを話し合った。これはもう一度検討する方向で落ち着いた。

4月12日「子供の居場所事業」についての説明を聞きに行くのは昼過ぎ。それまでの間で、以前から話聞いていたPHAT神戸のバスケットリングを視察に行く事となる。HAT神戸のリングはニュータウンにあり、海を目の前に臨む場所にあった。かなり広いスペースを使ってあり、ストリートバスケの大会を開催できる程の環境であった。ただ問題なのは位置的な問題から、利用者は主にニュータウンの住居者、もしくは車などの交通手段を持った人に限られると思われた。また、2.24のアンケートで指摘されていたゴミ問題については、このHAT神戸に限っては管理が行き届いており、ゴミ箱内にきちんと捨てられていた。これはこういった場所に限らず、道端でも同じことなのだが、「ゴミ箱がなけりや、その辺にポイ捨てしちゃうよ…」という印象を抱いてしまう。加えて、懸念される⁷³消耗品であるリングの紐の問題はここでもあり、実際にHAT神戸のリングにも紐はついていなかった。

午後になり、「子供の居場所作り事業」の詳細を説明して頂くために、市役所を訪れる。市役所では青少年課の⁷⁴吉田氏と戸野氏が⁷⁵忙しい時間を割いて、例の事業について解説してくれる。しかし、⁷⁶ここまで我々は大きな勘違いをしていたことを知らされる。例の事業内容にある「リングを10か所設置する事業」は我々のような⁷⁷即席の団体は対象に入らず、設置後の管理を考えると恐らく審査に通らない。吉田氏や指導教授が考えていたのは、調査に主眼がおかれている「NPO・NGOとの連携(予算は150万円)」事業の方であった。2.24以来、東遊園地への設置を考えていた我々の企画を説明すると、我々では不可能な継続的な管理を考えると建設局公園課との交渉も必要となってくる旨の説明を受ける。以上の話し合いから生まれた案として、⁷⁸東遊園地、もしくは⁷⁹フェニックスプラザなどで、簡易リングでもいいので、期間限定の試験設置(『NPO・NGOとの連携』事業の予算)をして調査を行う。そして、その結果を踏まえ、神戸市に対して、各地域でのコモンズづくりを推進するよう要望するというものが現実味を持ち、我々の企画の趣旨にも沿っているということとなる。そして、予算獲得のためのプレゼン準備と平行して、試験設置予定の東遊園地とフェニックスプラザとの交渉準備も行うことを確認する。また、東遊園地の管轄をしている建設局公園課については、吉田氏より⁸⁰探りを入れてもらえることとなる。

夜になって午前中に行ったPHAT神戸の夜の顔を視察に行く。明るさは何とかバスケができる程度といった感じである。床面がコンクリートと言うこともあり、ボールをつく音は結構響く。しかし、HAT神戸に関しては苦情を言ってくる近所が廻りにいないので、問題にはならなさそうである。この時は2グループが利用しており、かたや1人でバスケの練習をしており、かたや3人でサッカーに興じているようである。

また、以前から予定していた中学校での社会調査は、^a親交のある中学のバスケ部顧問の先生に依頼できそうな中学校リストを作成してもらうこととなる。ただし、回収方法を着払いにしまうと膨大な金額になってしまうであろう。回収方法はまだまだ検討の余地がある。

4月16日この日のミーティングにて、先日の市役所訪問時のことを踏まえての我々の企画を考える。現時点で、管轄の違う試験設置候補地が「東遊園地」と「フェニックスプラザ」の2か所ある。これを2.24のこともあり、東遊園地に絞った方がいいのではという意見もあった。また、^d継続的管理のできないプロジェクトなので、試験設置での調査を充実したものにして、最終的には調査結果を報告し、東遊園地を初めとする「地域のあらゆる場所にバスケットリングが常設される（きっかけづくり）」を目標と定めた。そして、指導教授の資料に基づく企画書の作成、バスケットリングのリース金額を調べる、常設の際の工事費を調べる、プレゼンの方法などを、目下の作業であることを確認する。

中学校の社会調査については、着払いの郵送費用を「NGO・NPOとの連携」事業の予算に組み込めないかという案もあるが、このことは本来のリング設置予算を削ることが懸念される。近々送られてくるリストを見つつ、近い所は自分たちで届けるというスタンスで進めることが決定する。

4月17日中学校の社会調査についての協力をして頂いている先生から連絡があり、1校につき20~30部位で、30校をリストアップして頂いたとのこと。回収方法についての意見を仰いだところ、返信用封筒をいれておけば、経費、手間ともに浮くのではとの話であった。しかし、調査項目の甘さを指摘され、再考を始める。

4月22日「プロジェクト内で、各人の積極性の表れについての葛藤が生じる。ミーティングの日程調整などを一人のメンバーにまかせきりになっている現状があり、各自で自らの関わりを見つめなおすこととなる。

4月23日この日、我々が「東遊園地」での試験設置を目指す際、なぜに東遊園地なのかについてまとめる。大まかにいうと、^e地理的な利便性に加え、2.24のニーズ調査での結果、騒音問題の心配が無いこと、震災のモニュメント的な意味、そして、何よりも2.24に参加したことを引き金に、我々の思い入れが非常に強いことが上げられている。

4月25日「バスケットリングのリースについて、2.24でお世話になったペイエリアの田中氏と^a電話で話す。リングのリース代は1日で3万円であり、運搬トラックの費用も高い。ゆえに3ヶ月のリースは膨大な金額になる。また、管理に関しても夜間の人目のない時の危険性を考えると、試験設置であっても工事をきちんとした形の常設が好ましいとのことであった。先日の市役所訪問時の吉田氏との話しより、東遊園地での常設には多くの問題がありそうなので、この時試験設置の候補地を「フェニックスプラザ」と「東遊園地」で揺れている。

4月30日中学校の社会調査【添付資料4 参照】について、協力してくれている先生と連絡を取る。印刷並びに、送付を中学校ですて頂けることとなる。

4月30日この日のミーティングにて、以前より我々の中での葛藤であった、各人の役割分担を明確にする。加えて、企画の目標の確認をする。あくまでも「都心部、街中へのリング常設である。つまり、東遊園地に絞り込む必要はない。田中氏の話によると。東遊園地での試験設置は難しそうであるが、吉田氏が建設局と交渉してくれた時の報告をまっぴらから最終決定を下すつもりであった。そして、「東遊園地が駄目な場合の残り、「フェニックスプラザ」に試験設置を考えた場合、誰と交渉をしたらいいのかを指導教授に紹介してもらうよう、メールを送る。

5月3日指導教授よりフェニックスプラザでの試験設置についての返事がある。5月15日に担当の人と話をする時間を設けてくれることになる。それまでに具体的な企画案をまとめる必要が生じてくる。ここから約10日間、企画書を大詰めする作業に入る。

5月7日この日のミーティングでは、「フェニックスプラザ」での具体的な企画の詳細を煮詰める。リングの形やボールが路上に飛び出るのを防ぐネットの必要性について、ボールの管理、苦情の処理方法を考える。この時点では、あわよくばボールの貸し借り業務までもやらせてもらおうという、今思えば甘い計算をしていた。企画書の詰め作業については、各担当を決める。なお、この時最終目標を確認している。それまでは絶対東遊園地に常設とこだわってきたが、それはあくまでも始まりである。最終的な目標はそのバスケリング（コモンズ）が地域の活性化に繋がることを一般化するのである。そして、ゆくゆくは多くの公園などの公共地に、リングを設置していただきたい。今はまさに、その〈きっかけづくり〉が試験設置である。

5月10日15日の詳細を指導教授と確認する。この日はプレゼンではなく企画書中心の根回しとなる予定。

5月12日企画書作成の中で、個人個人の思う企画書の形式が違う為、またもやプロジェクト内での葛藤が生じる。このことの延長で、分担して各自が行っている作業の進行具合を他のメンバーに知らせることの重要性を再認識するように促す発言も見られた。

また指導教授からのメールで詳しい企画書に加え、要点をかいつまんだエグゼクティブサマリーが必要と知る。ここからは企画書作成作業に加え、エグゼクティブサマリーづくりも行っていくこととなる。

5月15日この日はプレゼンの日程だけを決めると思っていたのだが、実際には指導教授に「フェニックスプラザ」の担当者である常松氏を紹介してもらい、完成した企画書【添付資料5参照】、並びにエグゼクティブサマリーを手渡し、その後、大まかに企画内容を説明し、簡単な質疑応答を踏まえたプレゼンをすることとなる。第一の反応としては難色。主にフェニックスプラザが懸念を示した点は、試験設置予定地としている駐車場の位置づけ、試験設置期間、苦情処理の問題であった。駐車場の位置づけは法律的な物が関わってくる可能性もあるのでここが壁になった時はかなり困難な交渉になってしまうだろう。期間については、建設局とどうようで、常設なのか期間限定なのか1日だけかによって大きく変わってくるのであるらしい。アクションリサーチの性質として苦情の質によって大き

く左右されるもののこの段階では 3 ヶ月の試験設置を予定している旨を伝えた。そして苦情。この界限はことさら商業ベースの店舗ばかりなので、損害に直結してしまうことへの不安が大きいように思えた。商店街ぐるみで地域活性している所もあるが、やはりセンター街は大都市過ぎて地域性が少ないと思える。後日、さらに詳しいプレゼンの日程を含め電話連絡を待つこととなる。

5月21日この日のミーティングまでに、フェニックスプラザからの電話連絡は一切ない。そして、そのプレゼンにそなえ、フェニックスプラザが懸念する問題、特に路上に飛び出すボールの対処法を具体的に考え、いくつかの案が生まれる。そして、指導教授にフェニックスプラザからの連絡が無いことを伝え、パティオを含めた次の候補地を探し始めることとなる。そのために再び市役所を訪れ、吉田氏、森田氏との相談の時間をつくってもらうこととなる。

5月23日指導教授がフェニックスプラザに対して刺激を与えてくれたようで、すぐに電話連絡が訪れる。連絡遅れについては企画書の内容にて理解できないことについての協議を我々に聞くこともなく行っていたそうである。電話口にて、歩行者又は近隣店舗への迷惑、設置期間について、リングの設置方法、駐車場占有についての意見、苦情の収集の方法、夜間管理の方法について説明する。そして、再度協議するという。

しかし、なぜわからない所があるというのに連絡をしていただけなかったのだろうか？前後の流れだけを見ると、「学生の企画を無視しようとしたが、日頃お世話になっている指導教授が聞いてきたので、しょうがなく電話した…」感が強いように思える。また、今日の話からすると、フェニックスプラザが試験設置を認めるには、近隣店舗並びに通行人から苦情が一切出ない状況（ハードとソフト両方）を作り、駐車場を利用していない時に限り、リングを設置し、我々が管理している時間のみ使えるという条件が整わねばならぬのである。これは、我々の調査方法にも合致しないし、我々の理念とも合致しない。

5月24日正式なプレゼンをすることもできず、この日正式にフェニックスプラザより、b 駐車場使用不許可の決定が電話連絡にてくださる。第一にフェニックスプラザの壁への設置は設計上無理である。次に、たとえ使われていないように見えても、フェニックスプラザが 5 台分の駐車スペースとして所有しており、その本来の目的が阻害される形での長期間での占使用は認めないとのことであった。

この時の対応は不許可ありきの結論であるように見えた。駐車場使用時の電話連絡さえも拒否するということが、そのことを如実に表している。恐らく、このままフェニックスプラザの気に入る企画をしたとしても、次から次へと難題が降りかかってきそうというのが、正直な感想であった。

5月25日フェニックスプラザからの不許可を受け、打つ手のなくなった我々はこの日、a 吉田氏と b 森田氏に新しい試験設置場所の候補地を a 紹介してもらいに市役所を訪れる。まず、企画書を手渡し両氏に目を通していただく。現在、進行中の中学校の社会調査の結果については次回提出することを約束する。

そして、フェニックスプラザの試験設置不許可に至るまでの経緯を説明する。森田氏より、フェニックスプラザのキーマンにゴリ押ししてみても？ と提案されるものの、指導教授の紹介という手前、指導教授の意見を仰ぐのは勿論、我々はこれを一つの失敗事例としてまとめるつもりである。

新しい試験設置場所の案として、サンバル、^α筒井八幡神社、ハーバーランドの倉庫の3か所提案していただく。その場で地図を広げ確認すると、ハーバーランドの倉庫は道路に面しているために没にする。残りの二つについては吉田氏を通じて交渉を進められるとのことである。サンバルはJR三宮に近く都会である。そして、筒井八幡神社は地域に密着している。両方で試験設置ができれば、[○]都会と[□]地域と[▽]という比較の視点で試験設置調査ができるかもしれないという期待が生まれる。その帰り道、^ρ早速サンバルの視察に向かう。何とか取り付けられそうな場所を発見するものの、近くに放置自転車が多々あったり、路上生活者の住処が近くにあったりと、[○]少し問題を抱えているようにも思えた。詳しくは管理者との交渉次第ではないだろうか。

また、既存のリングでの使用状況を調査する必要性やコミスタでのイベントへの参加についても話をし、我々はリングの取り付け工事の費用について調べることを確認する。

5月26日我々がメールをやりとりする時専用のアドレスを取得する。これにより、全員が送信メール、受信メールを確認することができるようになる。

5月31日吉田氏よりメールがある。新しい試験設置予定地の一つサンバルについて、近々サンバルを管理している部署に詳細を提案しに行くそうである。そのための、設置予定場所や大きさについての具体的な図面、もしくは資料が必要であるとのこと。その後の話し合いの後、6月4日に資料写真を撮りに行くこととなる。

6月4日早朝、フェニックスプラザにおけるバスケットリングの試験設置についての企画書の過程、不許可結果、及び我々の解釈をまとめた報告書を書き終える。電話でのやり取りが主であり、双方に誤解を生じていた可能性があったが、その時点での我々の解釈を盛り込む。それを早速常松氏にメールすると、午前中に折り返しの電話があった。報告書の内容については解釈の問題故に、必要以上に訂正を求めるつもりはないと前置きした上で、「フェニックスプラザに駐車場使用要請があった場合、その度にP★Yに対して連絡を入れるつもりはない」の表現に対して、「これはないんじゃないの？ 少しでも努力してくれた相手を敬う気持ちがあるんならば、こういう書き方にはならないんじゃないの？」といったクレームがつく。これについては我々も納得がいかなかった点であったので、その点について詳しい話し合いの場を設けることとなる。また、企画を受け入れられなかったことへの申し訳なさか、はたまた、「これしたるからもうええやろ？ うるさいこと言わんといてや！」(我々の解釈はこちら)という意味か、三宮センター街の理事長を紹介してもらうこととなる。

午前中に試験設置の候補地サンバルの^ρ写真撮影と視察をした。写真は、市役所青少年課の[○]吉田氏が、サンバルの方に試験設置場所の提供をお願いする際、具体的な場所のイメー

ジが必要になるため撮影した。視察しての感想はまず、サンパル内の小スペースとしてもうけてある広場のベンチに、多くの方々が座って話しをされており、リングを設置してここでバスケをする若者が増えるとなるとこの方々の邪魔になるのではないかということ。次にリング設置を考えている場所の下に、バイクや自転車などが駐車されていることである。基本的には、駐車禁止の場所ではあるが、現状からして撤去を申し出たからといって即座に解決しなさそうな状況である。しかも、レイアップをして着地をするにもこの状態では無理だし、ボールが駐車してあるものにあたって破損する恐れもある。いくら駐車禁止場所だからと言ってボールがあたって破損すれば置いている方が悪いでは済まされない気がする。加えて、リング設置を考えている場所を住まいにしておられる方がいらっしまった。そのことも考慮すべき問題となるだろう。また、広さ的にも難そうだった。取り付けリングについては、下がコンクリートと言うこともあって埋め込むには大工事が必要となる。歩道橋のようなものが広場の上を通っており、そこに吊り下げることも考えてみるが、そのようなリングのタイプがなく特注になる恐れがある。以上のような状況を考えてとサンパルでの試験設置は困難であると考えられた。

サンパルでの写真撮影・視察を終え、もう一つの候補地である Ⅲ 筒井八幡神社（春日野道）内にある公園を訪れた。ここでもⅡ写真撮影と視察を行った。ここは、三宮の都会にあったサンパル・勤労会館前と比べてⅢ（地域）を感じられる場所だった。早速、中学生が数人で学校帰りに戯れている様子を目の当たりにすることもできた。公園を散歩などで訪れていた方々に伺った話を交えながらこの公園について少し説明してみる。

まず、神社内の立地状況について。神社を正面にして立ってみると、神社の参道を挟んで左右に2つずつ計4つの公園ないし広場があるかなり広い場所だった。率直な感想としては、4つもあればどこかにはリングはつけられそうだった。神社を正面に立って、右上にある広場には地域福祉センターがあり、ここには碁や将棋を楽しむ高齢者の方が結構いらっしやるとのことだった。また、その前の広場ではゲートボールやグランドゴルフを楽しむこともあるそうだ。ベンチがたくさんあり、たばこをすったりお話をしたりと高齢の方々のくつろぎの場となっているようだった。右下にある公園には滑り台やアスレチックのような遊具があった。遊具の分、何もないスペースはあまりないが、リングを置いてストリートバスケを楽しむくらいのスペースは確保できそうであった。また、ここには震災復興を祈願して、ある団体から寄贈された桜の木が2本植えられていた。このことを考えると私たちが目指すリングも同じように寄贈して生めていただけないだろうか。という考えが浮かんだりもした。左上の場所はリングを置いてストリートバスケをするには少々スペースが少ない印象を受けた。左下の場所には、ブランコがあり、小さい子用の遊具があったため、スペース的には問題はなくとも小さい子にボールが当たる恐れがあると考えられた。

4つの広場・公園のうちリングをつけていただくとすれば右上にある地域福祉センター前の広場が有効であるように感じられた。神社と公園・神社とバスケのミスマッチにとても

良さを感じこの場所がとても気に入った。今後、ここでのアプローチの方法を考えていかなければならないと思った。

2つの試験設置場所の視察を終え、フェニックスプラザへ移動した。フェニックスプラザに着くと、まずはセンター街の理事長と話をすることとなる。我々は主に商店街とスケボー族との関わりについての一事例として話を聞きたかったのだが、理事長は我々に実際に行動を起こすこと（スケボー族と商店街の間に入るなど）を暗に持ちかけていた。我々はフェニックスプラザが不許可になった時点でサンパル、筒井八幡神社と次に進んでいるのであって、センター街で我々がスケボー族を相手にし、新しい〈事興し〉をすることに興味をそそられなかった。

そして、フェニックスプラザとの報告書についての詰めの作業が始まる。まず、電話連絡をするか否かについては、フェニックスプラザとしてはするつもりはないとは言っていないそうだ。言った、言っていないの水掛け論をしても意味がないので、そこは訂正に応じることとする。では、不許可の理由の詳細はというと以下の2点である。①フェニックスプラザの壁面はバスケットリングの加重には耐えられない（物理的要因）。②駐車場は使っても駐車場（根本的要因）。つまり、我々の理念や企画の内容では、フェニックスプラザの所有している（ほとんど使用されていないであろう）駐車場の有効（であると我々は信じている）利用としての意味づけの変化は生まれなかったのだ。

この時の話し合いを更に報告書（改訂版）として、作成する。【添付資料6 参照】

6月5日 市民サミット in 神戸・第一回世話人会に参加した。これは、9月29日～30日に行われる市民サミットについての会議であった。色々な方が参加を交わっていたのでかなりおもしろく、勉強になった。

6月6日市役所青少年課より吉田氏よりメールが届いた。内容は、以前からお願いしていた東遊園地リング設置の件で建設局の公園を管理している部署に話を聞きに行ってくださいことについてと、現在候補地として掲げているサンパル、勤労会館前にリング設置交渉をしに行くことについてだった。管理をしている中部建設局に行く折、数人一緒に行けないかのお誘いのメールだった。まず、東遊園地については、土地を私有しているのが国（大蔵省）で、色々な許可をいただく手続きがややこしく、時間もかかるそうで難しいを思われるとのことだった。ユース内でも、当初2.24をしたこともあり東遊園地にリング設置を請願していたが、東遊園地にこだわる必要性がないと考えが変わってきていたので、やはり駄目かと納得し、この時点で東遊園地は試験設置候補地からはずれた。次に、サンパル、勤労会館前へのリング設置交渉について、管理をしている建設局中部建設事務所に日程をあわせて交渉しに行きましょうということであった。中部建設局に出向く日は、その後のメールのやり取りなどで6月12日と決定した。

6月7日神戸市内の中学校に発送しておいた社会調査を回収しに、神陵台中学校の西窪先生を訪ねた。25校に20部ずつ発送したうち、18校・341名の回答を手にすることができた。発送のときに同封した返信用封筒に、中学校名を記載していなかったため、どこ

の中学校からの返送かがわからなかったが、回答の中の情報を元に何校かは割り当てられた。回答の自由記述の中には、^{*}実際に既存のリングが公園などにあり、利用しているという回答が多くあった。また、どのような遊具をおいてほしいかの質問に対し、サッカーゴールやテニスコートという意見もいくらかあったが、バスケットリングが一番多かった。今回の社会調査の目的はリング設置を目指しているが、青少年にそのニーズがあるかどうかを大まかに知ることの意味があったため、その点では有力な情報がえられたように思う。既存のリングの使用状況なども参考にするため、意見を聞きに行くことも考えることとなった。

6月11日日程や今後やることのミーティングをしてゼミに参加した。本日のゼミでは、私たちに関連するキーワードがいくつかでてきた。まず、神木さんの論文で使用されているマーケティングやターゲティングにより得た〈デメリット・メリット〉の話。この〈デメリット・メリット〉をユースの活動に当てはめると、リング設置場所の提供者の〈デメリット・メリット〉と青少年の〈デメリット・メリット〉を考えていくことが必要で、それが今後リング設置場所提供者との交渉の際に考慮すべき内容だと感じた。次に、他班が読んだ本の内容にユースと通ずるところが多くあった。この本の中では、公園をひとつの〈commons〉にとらえ、利用者みんなで守っていこう、管理していこうとの考え方がされていた。管理責任において事故の100%すべてが管理者の責任ではない。使用する側にも責任を持ってもらう必要がある。そうでない限り、ハード面のみならずソフト面においても管理・被管理の構図を生み出す。これはcommonsにはなりえない。と記されていた。この考え方こそ、まさに^{*}ユースが目指す公園のイメージどおりだと感動を覚えた。それと同時に、^{*}自分たちの進むべき道が絞られてきたようにも思った。

6月12日市役所青少年課の^{*}吉田氏を尋ね、^{*}事前に打ち合わせをした後、建設局中部建設事務所向かった。^{*}吉田氏が電話で建設局中部建設事務所に問い合わせたときの感触では、あまりよくなかったとのことだった。

事前に撮影した写真をもとに視察で感じたことの報告を兼ねて打ち合わせを行った。サンパル、勤労会館前については、市役所青少年課の吉田氏と戸野氏も^{*}実際に視察に行き、写真撮影を行ってくださっており、双方の考えはほぼ一致していた。まず、具体的につけるとすればどこになるかについては話した。次に、懸念される問題について話しあった。具体的には、^{*}通行量の問題、^{*}リングの工事の問題、^{*}駐車自転車、^{*}バイクの問題、^{*}あの場に定住している人の問題、^{*}スペースの問題などがあつた。これらを考え合わせると、^{*}サンパルは厳しいという認識にならざるを得なかった。また、吉田氏が事前にアポをとってくださったときの感触ではむしろかしそだったということであった。可能性としては、神社の方があつたし、吉田氏もユース同様、神社に興味を示されている様子だった。^{*}既存のリング設置場所のリストをいただき、建設局中部建設事務所へ向かった。

まず、^{*}サンパルへの試験設置は、かなり難色だった。問題点は、騒音について、通行人の邪魔になる点について、スペースについて、自転車やバイク、定住者についてだった。

これらは、すべて事前にユース・吉田氏とも懸念していた問題で解決策を見出せていなかったため、反論の余地がなかった。騒音については、周辺の勤労会館やサンパルの了解が得られれば何とかなるかもしれないが、それ以外は思いつかなかった。

神社の周辺にある公園については、^ア交渉価値があることが確認できた。まわりにある公園は ^イ宮本公園といい、土地の管理は建設局中部建設事務所がしているとのことだった。サンパルで懸念された通行量の問題はなさそうだが、^ウ遊具がある場所では、小さい子供がいる可能性があり、ボールが当たる心配がでてくるとのことだった。それ以外に絶対にクリアしないとイケないのが ^エ地域の方々の同意ということだった。^オ住民の同意（住民、自治会、公園管理会）が一番大きなハードルになるということだった。やはり、これがないとなかなかオッケーサインは出せないとのこと。しかし言い換えれば、^カこれを得ることができれば大きく前進できるということだ。

ここで懸念される問題について話し合った。まず、^キ騒音問題・^ク夜間使用の問題については、公園の北・東は神社の境内と小学校ということでそれほどではないが、西・南には住宅地と商店が並ぶということで、騒音や夜間使用の問題に対する意見や考え方がネックになりそうだ。ちょっとした街灯もあるため、夜間使用もできるかもしれない。夜間に使用すると騒音の問題が出てくるかもしれないし、バイク集団などが乗りつけてきて、そこにたまってしまうと ^ケ治安の面で大問題になってしまう。過去に中部建設事務所の近くにある荒田公園という今回の宮本公園より広いスペースのあるところでサッカーができる状態にしてほしいという請願があったようだが、^コ騒音問題、夜間使用の間などで地域住民の同意が得られず消えていったという例もあるようだ。しかし、これについては、^カ地域住民の同意を得るために、青少年課の吉田氏が近々宮本公園にかかわるふれあい協議会の方とお会いされるということで、そのときにいろいろと地域住民のこと、どういった方々に同意が必要になるかなどを ^キお伺いしてくださることとなった。

次に、安全面（リングの転倒、ボールの道路への飛び出しなどはないか）について。どこへ行ってもでてくる問題で、^ク〈責任〉の問題であると考えられる。しかし、以前にゼミの中ででてきた本の話の思い出すと、何かがおこった時の責任が行政のみにいってしまうのでは、私たちの目指す〈コモンズ〉にはならないし、この問題を考慮して引き下がるのは納得のいかないところだと思った。リングの安全性という面では、私たちが当初考えていた底に砂を入れて置く簡易リングでは不安定であるため、置くとなれば埋め込み式でもかまわないとのことだった。これは、^ケかなりうれしい話だった。もちろん、試験設置が終われば掘った穴は元通りに埋め込むことが前提だ。

以上、問題はいろいろあるが、通して中部建設事務所の方がおっしゃっていたのは、^ク地域住民の同意が前提に必要であり、さらにそれが一番大きな問題・課題になりうるということだった。また、最近ますます明らかになってきた ^ク責任、立場の問題というようなことが根底にあって、それはなかなか揺らぐことはなく、それが最大の問題なのだということだ。それを改めて実感した。^ク試験設置を許可してもらうことは非常に難しいということだ。まだま

だ、交渉が下手なのかもしれないが、たとえ一週間でも、三ヶ月でも、完全に設置してしまいうにしても、でてくる条件は同じで、三ヶ月のアクションリサーチだからリスクは承知の上やらせてくださいという希望にはなかなか応じてもらえない。そこでけがが起これば行政の責任になることを強く言われた。「それでも、お願いします」という自分たちの思いだけではなく、やはり実際にリングがある公園の話などをまとめてそれをもって、試験設置したい場所の近隣住民の同意をもらいに行くくらいの準備が必要なかもしれない。しかし、アクションリサーチなのだからという思いもある。諦めずにトライしていこうと決心を固めた。

本日、市役所青少年課の吉田氏より既にリング設置してある公園のリストをいただいた。社会調査の中にこの中の公園を上げてくれていた子もいた。神戸市内で16か所は確実にあるとのことだった。

6月19日以前コミスタの世話人会に参加した際、市内の商店街の方がユースの企画をおもしろそうだと興味を示してくださっていたので、お話を伺いに行った。三宮のダイエー内にある人形の内田の社長さんで商店街を盛り上げようと取り組んでおられる連合の方だった。ユースの企画を説明しアドバイスをいただいた。「一番の問題は、管理の問題であり、それを解決するには地元を巻き込むことが大切である。そのためには自治会や老人会、婦人会の方々と接することがとても重要である。場所の紹介はいろいろな方々からうけて交渉はあくまでも自分たちですること。自分たちでお願い文などを書いて交渉するところが肝心である。成功例を一つでも作れば信用を得られるので、まずは成功例を早くつくることだ。また、企画に賛成してくれる方に推薦状を書いてもらうなどしてみるのも一つの手かもしれないよ」とのアドバイスをいただいた。確かに、今までの交渉は、自分たちで思いを伝える前に、役所の方が電話なりで聞いた時点で終わりになっていた例があり、それでは進歩に繋がらない。改めて「地域を巻き込むことの大切さ」というか重要さを認識した。我々は、こうやって多くの方に、ご協力をいただいているし、少なくとも我々の企画のためにいろいろな方が時間をさいてくださっているからがんばろう。少しずつ楽しくなってきた。

これを機にお願い文の作成をはじめた。企画書とは違ってぶっちゃけた風に文章をまとめる。その中に、試験設置なので何か問題が起こればいつでもすぐに撤去しますとの約束をいれることと。あらかじめ想定した問題の解決策を載せることが必要となってきた。社会調査をした中学校の中から選びワークショップなり話を聞きに行き、そこから起こりうる問題と解決策案をだそうということになった。

6月22日、宮本公園の試験設置の件で市役所青少年課の吉田氏よりメールをいただいた。葺合地区青少年問題協議会の会長後藤氏に話をしたところ、ご理解いただき、公園管理会の代表の方にも話をしてくださるとのこと。また、地域の中学生は公園のベンチを壊したり、かなり悪いことをしているようで、それからするとゴールは移動式ではなく埋め込み式がいいと、子どもたちと一緒に遊んでもらえるといいなとも言っておられたようだ。

また、公園管理会で会合をもたれる機会に、説明をする時間を設けてくださることとなり、具体的な説明ができるように準備をしておくようにとのメールをいただいた。いいかんじになってきた。しかし、ベンチを壊したりする子どもがいるなんて少しショックをうけた。「子どもたちと一緒に遊んで欲しい」とのお言葉には、一緒にバスケットかできたらいいな。そうなるようにがんばろうと張り合いがでてきた。埋め込み式のリングはコストの面でどのくらいかかるのかも考えていくこととなった。

また、この時並行して社会調査にご協力いただいた中学校へのお礼文の作成と社会調査の集計をおこなっていた。【添付資料7 参照】

7月4日社会調査のお礼文発想完了。お礼文の中に集計結果と行政の政策の関連部分のぬきだしを同封した。これが、つくところを見計らって社会調査回答の中で適確な意見を書いてくれていた本多聞中学校へ電話をしてみる事となった。電話でアポをとってワークショップなり意見を聞きにいかせてもらうこととなる。

7月5日宮本公園の公園管理会の方、地域の方々に地域福祉センターにお集まりいただき企画内容の説明と試験設置場所の提供をお願いしに訪れた。市役所青少年課の吉田氏も同席してくださった。約12名ほどの方々が我々の説明を聞いてくださった。地域の方々に前に自分たちの企画を説明するのは初めてで緊張したが、思いを伝えることができた。お願い文【添付資料8 参照】を配りそれに沿って話しをしていった。そして「質問はありませんか」との投げかけに、男性の方が一名いくつかの質問を上げられた。「現在、この公園の周りでは、タバコを吸ったりする中学生の様子が見受けられるが、そういうのに対する対策はあるのか？ リングを置いて、他の地域、例えば隣の地域から違う中学生がきて、喧嘩などが起きたらどう対処するのか？ リングがあることの公報活動はどうするのか？ 勝手においただけで利用する人はいるのか？」などとだった。これについて我々は、「リングを置く置かないに関わらず、現在、タバコ・喧嘩などの問題が起きたときどうされているのですか？」と逆に質問をし、「その問題を少しでも解決するためにも一緒に考えていきます。問題が起きて私たちは知りませんなんて無責任なことはいけません。私たちが青少年と地域の方々の間に入って一緒に解決策を考えてきます」ということを主張した。また、広報活動については、近くの小中学校の学生さんに呼びかけることを考えていると伝えた。

青少年問題協議会の後藤氏が前もって皆さんに設置するからという方向でお話をしてくださっていたので話はスムーズに進んだ。私たちにも、「設置する前提で話をしてくれていいよ」と会合前にもいっていただいたし、全体的に今までにない反応で、こうまでいっていただいて自分たちもがんばろうという気持ちが強くなった。さらに、周辺の小中学校の先生方やPTAの方にも既に設置の方向で話をしてくださっていて、ご協力をいただけることとなっていた。質問を投げ抱えてくださっていた方もはじめから協力してあげようと思っていたが、一応私たちの反応をみるために質問してみたといったかんじだった。「一緒にがんばっていこう」とはじめてのGOサインをいただいた。建設局中部建設事

務所の方には本日の報告を市役所青少年課の吉田氏がしてくださるのでその返事を待つこととなった。この「協力的な地域、後藤氏との出会いは」本当に劇的なものだった。興奮さめやらぬ状態となった一日だった。

7月9日宮本公園にリングを設置する際、ホリングを〈自分たちのもの〉と思ってもらえるように、大切に使ってほしいと言うことを伝えるために、看板を作成しリングの横につけようということになった。まず、各自が思いついたキーワードを掲示板にアップしていきそこから煮詰めることとなった。また、設置するリングのタイプや費用についても調べていくこととなる。この日より宮本公園試験設置に向け準備を開始した。それから、「お世話になった市役所市民活動支援課森田氏、人形の内田氏に今回の件を報告することとなった。

7月12日プリングの見積もりをした。カタログなどを見て、埋め込み式でよさそうなものを問い合わせたが、海外のものらしく取り寄せで時間的にすごく時間がかかるし、工事はセットではなく自分たちで別の業者を探さないといけないということが分かった。その他、製造会社に電話をすると「個人販売はやってない」と言われた。設置場所は見つかったのに、ここにきてリングと工事が手配できない。そこで、リング工事に関しては、市や公園が、リングを実際につけているところがあるはずなので、それをつけたときに工事を請け負ったところ。市の後用達の工事業者があるかもしれないので市役所青少年課の吉田氏に聞いてみることにした。

市役所青少年課の吉田氏よりメールをいただいた。建設局中部建設事務所に試験設置についての「説明をおこなったところ、内部で検討してみるとのことであった。ある程度許可がいただけそうになった段階で、既存リングの工事業者について訪ねてみるとのお返事だった。しかしその後吉田氏より再びメールが届いた。最近、リング設置をおこなった東緑地公園の東部建設事務所に「訪ねてみたところ、紹介いただいた。建設局にどのようなタイプのリングをつけ、いくら費用がかかるのかの資料を提出する必要があるので連絡をとって調べてみるようにとのことだった。」「早速、連絡をとってパンフレットを取り寄せ、電話で詳細を確認する作業を開始した。

7月25日以前おこなった社会調査の回答を参考にリングがある公園について詳しく書いてくれていたプ垂水区の本多聞中学校を訪問した。事前に社会調査のときに「ご協力いただいたバスケットボール部顧問の先生にお願いしていたので、練習時間を少しいただいて、男子バスケットボール部20人くらいに話をうかがうことができた。生徒たちは一言で言うとても良い子といったかんじの子たちばかりで、話を聞いていても「(地域性)の良さというものを感じた。この中学校のすぐ近くにある本多聞公園のバスケットリングについての質問をいくつかした。利用のきっかけや、既に利用者がいたらどうするかなど聞いたが、「どの回答にも過去に問題が起こったと言う話はでてこなかった。住宅地とは少し距離があり、騒音問題もなかった。既に使っている人がいたらどうしているか聞いたところ、遠慮すると言う子がほとんどだったが、中には先にやっていた高校生のお兄ちゃんたちが一緒

にやるかと誘ってくれて一緒にやったと言う子もいた。また話の中には、ネットがちぎれてないことが多く、知り合いのお兄ちゃんが買ってきてつけていたという話を聞いたことがあるとの話もあった。雨が降ると、水はけが悪く水溜り状態が3日くらい続いているのを、自分たちで他から砂を持ってきてかぶせて使うと言っていたし、知らない子と声をかけあってしていたことがある子もいた。更に、中学生が高校生としたとか、小学生のこと一緒にしたと言う中学生もいた。「まさにいいかんじだ。こんなかんじで利用できるようなリングが増えたらいいなと思った。ここでは、a(コモンズ)が自然にできているような気がする。その後、生徒さんに案内してもらいb公園の視察もした。スペース的にはすごく狭く、リングの横にはブランコがあった。小さい子が遊ぶ遊具の近くというのは設置の際、懸念される理由の一つなので少し驚いた。しかし、今回うかがった子どもたちの話ではそれで問題になったことがないとのことだった。全てがこのようにうまくいっている場合のみでないと思うので、c問題が起こる起こらないは地域性が大きく関係しているように思えた。しかし、e.hリングのある場所をコモンズとしていい地域にいい関係が生まれるそんなリングをつくりたいと思った。

7月26日市役所青少年課のi吉田氏、戸野氏を訪ねた。リングのタイプや費用について調べたことを報告し、看板作成についての話もした。看板については、上等なものではなく壊されたら作り直すぐらいの勢いで自分たちなりのものをつくってみてはどのjアドバイスをいただいた。またリング取り扱い業者の新しいリストをkいただいたので、リング費用を工事費いれて20万程度にできるように交渉を再度していくこととなった。市役所青少年課の吉田氏、戸野氏を訪問させていただくとlユースにとっても協力的でユースの意見を尊重しつつ後押ししてくださり、m会うたびにがんばろうと思えた。

n再び、リングの見積もりを開始した。(566)4社のうち、1社は連絡つかずだった。残りの3社で聞いてみたところ、どの業者も神戸市内の公園などにリングを取り付けたことのある業者なので、市役所との関係ならと安く見積もってくれた。リングのタイプも公園などにあるタイプは少々小さめのミニバス用がほとんどだとのことだった。青少年をターゲットに考えていたため、正式用の大きさのものを考えていたが、ミニ用の同じタイプのもので3社に見積もりをかけることにした。その結果、かなりのコストをさげてくれた業者もでてきて、我々の中ではこのこと決めたところを一押しに吉田氏への報告メールを送ることにした。

8月3日リングの見積もりを4社にかけてみた結果を市役所青少年課の吉田氏に報告メールをした。その結果、市役所が設置するという形で建設局がオッケーしてくださったので、最終的な見積もり相談をし、リングを発注し、工事をお願いするという作業をユースの代わりにo吉田氏がpやったださるということになった。我々のグループでは、qきちんと組織化されておらず、あまりにもr即席でしかも継続性がないものなので、申請をうけるのに困難である。またリングの額が大きいこともあるので青少年課からの助成金を誰宛の口座に振り込むかということも問題となってくるのでお任せした。勿論、全て自分たちがする

ことも考えたが、今後、「この一か所での試験設置を得て、神戸市内のあちこちに設置してほしい。その際、手続きを行うのは市役所にしていただくことになるのでお任せしても良いだろうと判断した。」とうとう試験設置が本格的に動き始めた。ここから看板も本格的に作成していくこととなった。

8月4日 ニュースメンバー内での葛藤が起こった。最近、掲示板で話し合いを進めることが多くなっていたのも原因だったのかもしれないが、関係が薄くなってきていた。掲示板に投稿しても見ている人と見ていない人が決まってきており、反応の薄さに少々、イライラが生じた。しかしこのことが、*試験設置を目の前に全員がもう一度がんばろうという雰囲気を取り戻すきっかけとなった。

8月10日 久しぶりのミーティングだった。看板に記す言葉の最終決定。*宮本公園の盆踊り参加について。試験設置の調査方法について。苦情処理について。リング見積りの報告をおこなった。掲示板で進めるのは効率が良いかもしれないが、ミーティングで顔を見ながらそれぞれが意見を言い合うことも必要だと改めて感じた。*試験設置に向けてこれからは本番となるので気を抜かずやっつけようと思った。

8月19日 ワークショップ前にミーティングを行った。試験設置が本格的に申請されていることもあり、ニュースも看板作製・調査用紙作成などの仕上げに入った。市役所青少年課の吉田氏より、試験設置の日が8月末か9月の頭になりそうだとメールが届いた。

8月22日 試験設置をさせていただく*宮本公園での*盆踊り大会に参加した。19日に用意の櫓組み立てがあり、そこからお手伝いをさせていただいた。*少しずつ自分たちがこの地域に足を運び行事に参加することによって地域の方々との関係がうまれてきたように思った。参加者はお年寄りから小さな子どもまで幅広い年齢層でたくさん参加していた。しかし、我々のような大学生の姿はほとんど見受けられなかった。神社の参道には屋台も並びなつかしいお祭りの雰囲気を味わった。*後藤氏が神社の宮司さん、公園の横にある宮本小学校の先生に我々を*紹介してくださった。皆さんが我々のことをとても*好意的に受け止めてくださって、*良い調査ができるようにがんばろうと改めて感じた。また、この*地域の良さをともに体験することができたように思った。見回りと、小学生へのお菓子配りを手伝った。お菓子配りでは、ちょっとしたハプニングもあつが、メンバーの一人が箱からお菓子を数個。子どもたちに配るためにとっていたら、地域のおじさんらしき方に、「お兄ちゃんいい加減にしてや」と注意をされた。まだまだ、顔がうれてない方々もたくさんいるみたいだ。*もっともっと地域に足を運んで地域の中に入り込んでいかないといけないと思った。

8月23日 *試験設置日が決定した。市役所青少年課の*吉田氏の*はからいでスポーツ店に無理言ってできるだけ早い設置ができることとなった。これからは本番だ。わくわくしてきた。

8月24日 以前使用していた掲示板が閉鎖されたため、新たに掲示板を立ち上げた。以前のログを新しい掲示板に移せなかったため、以前のログはフロッピーに保存することとな

った。今までのログが保存できているかが皆の不安材料だった。

8月25日この日は「宮本公園のどこに実際にリングを設置するかを決定するために、中部土木建設局の方、シマダスポーツの店長、青少年課の吉田氏、戸野氏、宮本地区の後藤氏、そして我々、というメンバーで宮本公園を訪れた。当初、付けようと考えていた場所では、ボールが飛び出して歩行者に当たってしまう恐れがあることが予測されたため、少し場所をずらして設置しようということになった。しかし、ずらすにもそのリング設置予定の広場を使用するグランドゴルフなどとの「共生を考えると限度があったことは言うまでもない。また、「リング・公園の利用に関する注意書き看板（仮）」はリングの後ろの柵に取り付けることが決定した。その際、取り付けるための道具や材料は後藤氏が協力してくださるとのことだった。後藤氏は我々が頼まずとも、「もし看板を付けるなら道具・材料はあるから。また設置するときに連絡くれたらなににするから」と声をかけてくださったのである。「なんともうれしい限りであったし、何か、現代に姿を消しつつある「地域」の何でもできるおじさん」を彷彿させるものを感じた。同時に、「自分たちのプロジェクトだから自分たちでそういった作業はすべきなのに、協力をお願いするのは何か申し訳ない」という気持ちもよぎった。しかし、次の瞬間には、「これもつながりのひとつ。地域とつながっていく、いいきっかけかな」という思いが勝っていたのは事実である。

この日、後藤氏の「はからいで、リング設置当日（9月5日）に宮本公園周辺の小中学校を訪問させていただき、リングのPR、つまりビラ配りやポスター貼りをさせていただける手はずが整っていることがわかった。これを知った時は、後藤氏に感謝するというよりは、なんでこんなに協力してくださるのだろうと、「うれしい混じりの一種の驚きを覚えたものである。また、そのビラに関しては、「原案さえ我々が作成すればカラー紙印刷は市の方で引き受けるわ」との「声かけを吉田氏からいただいた。本当にいろいろな方々が力添えをして下さっていることを改めて感じ、プロジェクトに対するモチベーションがさらに高まった瞬間であった。

ビラには「2.24」の時使用したイラストを盛り込むことになり、ポスターに関してはメンバーの手作りにしようということになった。さっそくビラ案を煮詰めていくこととなった。そして、完成したビラ案を吉田氏にメールで送り、印刷をお願いした。

9月3日 吉田氏からのホットメールが来ていた。内容は「試験設置日が9月4日に変更になった」というものだった。しかし、当初予定していた通り、宮本公園周辺の小中学校へのリングPRは9月5日に行われる。また、看板・ビラには連絡先としてユースメンバーの一人の番号を載せておくことが決まった。

9月4日 ユースメンバー・青少年課の吉田氏、戸野氏、宮本地区の「おじさんである後藤氏立会いの下、シマダスポーツ店長の工事によって、埋め込み式のリングが宮本公園の地域福祉センター前広場に設置された。ここに念願のリング設置が実現したのである。なんともいえない喜びがあった。そして、今までの自分たちの交渉や取り組みをふりかえり、「けっこういろいろがんばってきたかいがあった。また、「いろいろな方の協力があっ

てこそリング設置が実現したのだ」と噛み締めた。リングは埋め込まれたが、“リングの接着”を考慮に入れ、実際に利用できるのは9月8日(土)からとなったことを付け加えておきたい。

9月5日 この日は設置したリングの確認と、リングを設置した宮本公園周辺の小中学校へのPRを、吉田氏、戸野氏と一緒にいった。

リングを改めて見ると、ミニバス用のリングなので小学生にも使えるというメリットと、中高生がダンクなどをしてぶら下がったりして破損する恐れがあるというデメリットが頭をよぎった。しかし、我々がしているのは〈アクションリサーチ〉。あまり想像ばかりめぐらしてもしかたないので、やはり実際に足を運んで観察し、事実を受け止めるしかないのだとすぐに思い直した。

学校へのPRは比較的スムーズに行えた。というのも、後藤氏が事前に学校の先生方に我々の話を通してくださっていたからだ。後藤氏は本当に顔の効く〈地域のおじさん〉なんだと改めて認識させられた瞬間であった。学校側は思っていたより協力的だったのでうれしく、また安心した。しかし、宮本公園が校区外にあたる小学校があり、そこでは保護者同伴でないと生徒さんは校区外に出ることができないという決まりがあるとのことで、この小学生のリング利用は難しいかなと正直感じた。加えて、宮本公園が校区内である小学校においても(ここは宮本公園と隣接する小学校なのですが)、いったん帰宅してからでないと外出はできないということで、下校時にそのまま公園を、しいてはリングを利用してもらうことは難しいという印象をもった。

9月9日 8日からリング利用が可能になり、本日9日から我々の調査が実際に始まった。調査とは、あらかじめ、利用者の居住地や宮本公園への印象、またリングへの感想・意見などを聴き取れるようにした調査用紙【添付資料9 参照】を用い、それに沿って利用者の声を聴いていくというものだった。加えて、口頭でも質問なりコミュニケーションを図り、利用者とのつながりを深めていこうというものだった。ここで注意しておきたいのは、この調査は定期的に行われたものではなく非常にランダムに行われらものであるということだ。この日はリング設置後、初の調査になったがあいにく利用者とは会えることはできなかった。しかし、設置の次の日だし、まだリングのことは皆に広まってないから仕方ないと納得できた。

9月11日 14時ごろに公園を訪れた。小中学生はまだ授業の時間であることもあってか、利用者には会えなかった。しかし、リングのボードにボール跡がついているのを発見。確かに利用した人がいることが確信できホッとしたのと同時に、早く利用者に出会いたいという気持ちが強く沸いたものだった。また、この日後藤氏にお会いすることができた。後藤氏によると「けっこう夜中に利用しているよ。中学生がボールを持ってきてやってるわ。苦情とかに関しては問題ない。ボールのつく音もほとんど響かないから騒音問題もないから」とのこと。これを受けて、今後の調査はできるだけ夜の時間帯をねらって行くことになった。また、「苦情の問題がなさそう」という意外なお話にも、少しびっくりしながらも、「

ホッした気持ち」「苦情に悩まされることはないかもしれないという希望」「まだまだこれから苦情が出てくるかもしれないという緊張」が同時に走ったものであった。

9月12日 初めてリング利用者に出会ったのはこの日だった。17時半ごろ公園を訪れるとすでに3人がバスケをしていた。今日で既に3回目の利用ということ。これには驚いた。²うれしい驚きである。そんなに頻繁に利用してくれる人はまずいないだろうと考えていたからだ。3人は知り合いで、夕方もしくは21時くらいから利用しているとのこと。やはり夜の利用がメインであるようだった。「電灯がそれなりに明るいので夜でもバスケができる」とのこと。これを聴いて、幅広い時間帯で利用できるという面ではいいことだと思った。ただ、夜の利用というイメージが、地域の方々に与える印象を懸念したのも事実である。つまり、悪い印象を与えたり、夜の利用が原因となる苦情が出てきたりするのではないかと不安に思ったのだ。しかし、この不安・懸念は地域の方々のお話（リングや利用者への思い）をうかがう中で払拭されていったのである。利用者を観察をする中で、リングにぶら下がる行為が見られたが、遊びの範囲に見受けられたので問題はなさそうだった。また、“彼らがシュートしたボールが柵を超えて出てしまった時、そのボールを犬の散歩に来ていた女性がとってあげる”という微笑ましい光景を目の当たりにした。³地域性の良さのよなものを感じた。

この日は20～22時ごろも調査を行った。この時には利用者には出会えなかったが、リングを設置している広場で空手教室が開催されていた。ちょうど後藤氏も居合わせており、⁴後藤氏の「計らいでその空手教室の指導者の方からお話を伺うことができた。その方によると、騒音も含めてバスケが空手教室の邪魔になっていることはまったくなく、リング利用者のマナーもよいから問題はないということ。⁵これを聞いてホッと胸をなでおろしたのだった。

以上を受けて、現時点での進行状況などを吉田氏にメールで報告しておいた。これは当然の行為として行ったまでだった。この報告メールに対する吉田氏の返信から、⁶吉田氏は常に我々のことを気にかけて下さっているということが感じられた。「⁷吉田氏にもっともっと吉報を伝えていきたい！」と思った。リングを設置したことに満足するのではなく、調査などをがんばって、⁸ぜひいい結果を残したいという前向きな気持ちでいっぱいになっていた。

9月17日 20時ごろ公園を訪れた。犬の散歩をされているかたにお話をうかがうと、「中学生が2・3人利用しているのを見た」とのこと。先日出会った利用者以外にも確実に利用者があることがわかり、⁹うれしかったものだ。その後、学校開放を取り仕切っておられる方にお話を伺う。その方も中学生の利用者を目撃されていた。また、家族ずれの利用者も見かけたとのことだった。家族で利用しているとは、なんと微笑ましくいい感じではないかと思った。利用者の目撃談以外に、学校開放についてもお話を伺った。リング設置によって学校開放利用者がリングのほうに流れてしまうことを少し懸念されている観があった。加えて、神戸市（特に、青少年の居場所づくり事業）に対し、「神戸市が学校開放を推進し、

みんなに使ってもらえる場を提供しているのに、あえて他でリングを設置していくことがいまいち理解できない。学校をもっと利用してほしい」という不信感という不満も話されていた。しかし、いろいろ話された最後には「いろいろ懸念されることがあり学校開放の意味を考え直すことも必要かもしれないが、まあ、学校開放は利用時間が限られているのでそれ以外の時間を公園のリングで遊んでもらうとか、公園（リング）を有効に使ってもらえればいいものになると思いますよ」と、⁹学校開放と宮本公園のリングとの共存に前向きであることを示してくださった。加えて、我々のプロジェクトに理解を示す言葉もかけて下さった。そして何より、「がんばってくださいね」と笑顔で声をかけてくださったことが印象的だった。ここにも理解者・協力者がいたと実感できた。

9月18日 天候は晴れだった。15時半ごろ公園を訪れたが、あいにく利用者と出会うことはできなかった。しかし、ちょうど公園に散歩に来ておられたおじいさまに色々お話を伺うことはできた。まず、我々が神戸市の「青少年の居場所づくり事業」に参画をし、今回のような³¹プロジェクトを進めていることを説明すると理解を示していただいた様子だった。しかし、次の瞬間から市への不満話が延々30分くらい続いた。もちろん、我々が市と協働でしていることを考えるとそういった不満も聞いていくべきなのであろうけれども、さすがにヘビーだった。公園に寄贈された桜の木の管理問題から阪神淡路大震災当時の市の対応問題に至るまで、様々な不満や疑問点を我々にぶつけておられたのを覚えている。しかし、我々は行政の人間ではないのでその不満を改善していく当事者にはなれないのである。そこがつかかった。また、そのおじいさまの中に市、行政という一くくりのイメージがまだまだ存在することを少し悲しく思った。少なくとも、我々に協力して下さっている市の方々は、いわゆる行政のお役人ではないからである。このことをわかっていたただくためにも*このプロジェクトを絶対成功させたいという思いが込み上げたものだった。不満話が終わると今度は、そのご老人が願うことを話して下さった。それは、地域とみんなが共生していけることであった。そういった意味で、我々には、「リングを媒介につなげたこどもたちに“ダメなものダメ。良いことは良い。”という分別をつけてくれるように“声かけ”などをして働きかけてほしい」ということであった。

ちなみに、この日の公園全体の利用状況としては、小学生が多数、自転車に乗ったり缶けりをしたりして遊んでいた。^v小学生はボールを使ってどうこうするより、自転車に乗ったり走り回ったりの方が楽しいのだろうという考えが浮かんだ。同時に、^o小学生にリング利用者になってもらうことは少し難しいのではないかという洞察も沸いてきた。

9月19日 この日は18時半ごろから21時半ごろまでメンバー引継ぎで調査を行った。そして、^w19歳の男性利用者に出逢う。彼は3ヶ月前に川西からこの宮本地区に引っ越してきたが、こっちに来てからずっとリングを探していたとのことだった。そしてここで発見したので以来利用しているとのこと。日ごろからスポーツ好きだという。こういう熱心な人もいるものだと感心した。利用頻度は週1~2回程度で昼夜を問わず利用するとのことだった。また、「自分以外の利用者が居たり後から来たりした時は、声をかけるなりして一緒

にやる」という、¹⁹うれしい話もしてくれた。この日も我々と彼で、lon1 をするなど一緒に遊んだ。²⁰これは紛れもなく〈つながり形成〉である。彼にとっては、他の利用者となつたり、そして今日、我々とつながったのだ。我々にとっては今日、彼という人物とのつながりを得たのである。²¹本当にすばらしいことだと思った。彼のような人物に出会えて本当に嬉しく、そして頼もしく思ったものだった。なぜなら、彼はこのリングをコモンズとし、ステーキホルダー（我がこと、我がものと思える人）となり、²²そしてリングを通じて多くの〈つながり〉を作っていく可能性を秘めていると直感したからだ。そして、後々、本当にこの〈リングを通じたつながり〉が我々や彼によってできていくことになったのである。この日、彼はこんな話もしていた。「学校開放は便利だしいと思うが、児童殺傷などいろいろ事件があって、小学校には入りにくいのが現実。やっぱり周りの視線がきつかったり冷たかったりするから。やっぱり公園に行くのとはわけが違う」と。このことから、やはり学校開放を勧めていくことに慎重になる必要があるし、また、周りの視線ということも視野に入れて考えていかなければならないと感じた。そういった意味でも、「このリング設置プロジェクトが、周りからの偏見みたいなものの払拭にも一躍買えることを、自分たちながらも期待している。

9月20日 利用者には出会えず。静かな公園だった。ゴミ・空き缶・ペットの糞の掃除をして帰った。それにしても、この空き缶やペットの糞など、誰がポイ捨てるのか。このようなことをする人たちはまだまだ〈自分（たち）の公園〉として、コモンズとしてこの宮本公園を意識できていないはずである。これは非常に残念なことだ。しかし、我々が公園をキレイにしようとして最近強く思えてきたことは、裏を返せば、²³我々が宮本公園を〈自分たちのもの〉と思えるようになったということであろう。これは、非常に重要なことだと思う。

9月21日 久しぶりに緊急ミーティングたるものを行った。来る9月29～30日にコミスタ神戸で行われる「市民サミット in 神戸」（以下、このイベントはコミスタと呼ぶことにする）に関して早急に取り決めるべきことがあったからだ。我々も含め我々のゼミは、ボランティアとしてこのコミスタでの市民サミットに参加させていただくことになっていた。そして、その際、ゼミとしてブースを開き、ゼミ内の各プロジェクトの中間発表を、市民やこのコミスタの参加者を対象に行うことにしていた。その中間発表の方法として、ポスターや模造紙を用いて視覚的に行うことが検討されていたのだが、このポスター・模造紙案について早急に煮詰める必要があったために緊急ミーティングがもたれたという訳である。

我々ユース班としては、自分たちの大きな目的、その目的に近づくための方法、成果目標という3つの観点から模造紙作成をすることを決定した。まず目的として、〈スポーツを通じて地域のつながりを深める〉ということを挙げた。次に方法として、今まで我々が行ってきた(2.24)や〈フェニックスプラザへのリング試験設置請願〉、〈神戸市内中学校への、地域の遊び場についての意識調査〉などを挙げていった。成果目標は、²⁴様々な地域にみんな

が気軽に使えるバスケットリングをつくり、交流とつながりを深める〈きっかけ〉をつくるということを示した。これらを決定し、模造紙を作成したところで今回のミーティングは終了した。

この緊急ミーティングを通して、自分たちの目指すものがもう一度確認できた気がする。遠い目標、近い目標、今までしてきたこと、これからすべきことなど、客観的にそして冷静に見つめなおせる機会になった。この意味で、このミーティングは良い機会であったし、非常に大切なことであったと感じる。一度立ち止まって自分たちを顧みる、ということをしなければ、間違いに気づかなかつたり非常に狭い視野で物事を捉えていってしまったりする危険性があるからである。このミーティングを行うことにより、これから自分たちが歩んで行くべき道のりが大まかに把握でき、その歩みへのモチベーションも高まった気がする。そして、自分たちが「地域」というものを非常に意識し、様々なことに取り組んできたことが再確認できた。また、あくまで自分たちは、×〈きっかけ〉をつくることに邁進していくのだという、大きな信念を確認できた。

そして、意識調査も行うことが決定した。コミスタでの市民サミットにおいて、ブースでの中間発表以外に、我々ユース班は意識調査たるものを行うことにした。その内容については、数日間に渡る掲示板上やミーティングでの意見交換を通じて決定した。ここで注目すべきは、掲示板というものの有効性であると思う。今までも、この掲示板はかなり重要な役割を果たしてきたのだが、今回は特に、その有用性・有効性を発揮したように思える。気持ちの部分や含みの多いことを議論したり意見交換をしたりする際には、やはり直接のコミュニケーションが必要であろう。しかし、今回のような、質問紙の内容を煮詰める的な場面では、掲示板上で十分意見交換ができるのだ。それぞれが自分の貴重な時間を割いて集合しなくてもいい。これは、非常に有益であったと思う。なぜなら、時間という面で非常にロスが少なかったからである。浮いた時間を宮本公園の調査などに当てることができたのだ。

さて、意識調査について煮詰まった内容はこうである。調査対象としては〈大人・親の世代〉を挙げた。これは「おそらく市民サミットの参加者の多くは、いわゆる大人の人だろう」という推論によるところが大きい。質問内容については、「スポーツと世代間、地域交流の間の関係性の有無」や「ストリートバスケットの認知度」、そして「広場などで遊ぶ青少年への好感度」などを調べるものをチョイスした。我々のプロジェクトの根本やその目的に関わるもの、そして、いわゆる偏見を探るものを中心的な質問内容にしたわけである。市民サミットで行う意識調査は、以上のような内容で質問紙を用いて行うことにした。ただし、質問紙だけではやはり迫りきれない部分が多いだろうということで、市民サミット当日は、インタビューも交えて回答者の本音を聴こうという姿勢で臨んだ。質問内容を決定していく過程をふりかえると、我々は、いわゆる⁴⁰親の世代やそれより上の世代の人々が抱いているであろう若い世代への偏見を強く意識している。そして、その²²偏見を取り除きたいと強く願っているようである。まずそうすることが、世代間交流やつながりを築

いていく第一歩なのだと確信しているのかもしれない。

9月23日 21時ごろから調査で宮本公園を訪れていた。21時半ごろのことである。利用者が2名、公園に現れた。二人とも女性だった。彼女たちを前にして、どう見ても自分はおっさんだった。「もう若くない…」、そうしみじみ思った瞬間であった。そういう思いを胸に秘めながらではあったが、自分のことを不信に思われないよう細心の注意を払い、彼女たちに話し掛けた。「こんばんわあ。ちょっといいですか?」。今思えば、そこらへんのホストとなんら変わらない声かけである…。しかし、彼女たちは笑顔で応答してくれた。話を聞くと年齢は18歳と22歳で、どちらもフリーターをしており、バイト先の同僚だという。今までもこの公園で「二人で語ることがあった」ということで、リングを知ったのも、話をしに公園に来た時だったそう。だいたい仕事が終わってから利用しに来るらしく、真剣にバスケをしに来るといよりは、バスケをしながらいろいろ話をする為に来るということだった。これを聞いた時、「ハッ!」とした。なぜなら、このリングは何も、バスケをしてもらう為だけのものではないということに気づかされたからだ。今までは²³ストリートバスケットを通じて〈つながり形成〉していくという考え方だった。しかし、今、目の前で起きていることは、²⁴リングを通じての〈つながり形成〉なのだ。つまり、リングさえあれば、²⁵バスケットボールを知らない人・できない人にも、つながり形成の可能性は十二分にあるのだ。ストリートバスケットよりもっと根本的に、リング自体が媒介となっていたのである(このことは意識下では気づいていたが、表現としてはいつもストリートバスケットを通じてという言い方になっていた気がするので、あえてここで述べた)。「バスケットボールをするためだけのリングではない」と思えた瞬間であった。“金のなる木”ならぬ“つながりのなるリング”である。

話を元に戻すが、彼女たちいわく「リングに関してのトラブルはまったくありません。むしろ、このリングを利用するようになって、²⁶他の利用者と知り合えたそのことがすごくうれしい」と。これは、²⁷我々にとってもうれしい事実であった。「我々が目指す〈つながり形成〉が実際に、そして〈自然発生的に〉起こっているのである。また、彼女たちは「自分らの使う場所やから、ゴミとかあったら拾って捨てるし、自分らのゴミは当たり前やけどちゃんと処分して帰る」と話してくれた。²⁸この話の“自分らの使う場所”という表現から、彼女たちの中にいわゆる〈コモンズ〉が意識されていることが伺える。この²⁹リングがコモンズとなっていける可能性が見えた瞬間であった。同時に、³⁰すでに我々にとって、この公園とリングはコモンズになっているのだということも実感できた。最後に、³¹彼女たちは我々のプロジェクトに賛同してくれるということ話を話してくれ、そして「絶対リングをはずさないでほしい!がんばって下さい!」とエールを贈ってくれた。³²なんともうれしく、そして「³³がんばろう!」と思えた瞬間だった。今日という日は、少しずつではあるが新たなつながりが生まれ、そしてリングが〈コモンズ〉となりつつあることを³⁴実感できた日であった。

9月24日公園を訪れると、家族連れらしき人たちがリングを利用し、戯れていた。すこ

く微笑ましい光景だった。

9月28日 この日、青少年課の吉田氏からメールが届いていた。宮本公園のことでお世話になっている後藤氏のお話によると、「バスケットリングができてからマナーの悪い子たちが宮本公園に来なくなり、大変助かっているとのことで、喜んでおられたので、ほっとした」という内容のものだった。このメールを見た時、リングが地域にいい影響を与えていることは本当にすばらしく、うれしいことだと素直に思えた。また、後藤氏が喜んで下さっていることを知って、ある意味、リング設置許可をいただいたことへのお返しができている気がした。そして、吉田氏が「ほっとした」という表現をされていることから、吉田氏もリングのことや我々のことを〈我関せず〉ではなく、自分のこととして考えてくださっていることが改めて感じられ、うれしく、また心強く思えたものだ。

9月29日 コミスタでの市民サミットの日、我々の指導教授が卒論の参考文献として数冊の文献を提示し、早急に各自読み込むことが要求された。この時、「どうして今になって急に膨大な量の文献をおっしゃるのだろう？ もっと前から計画的に読み込んでいくことはできなかったのか…。もう少し我々の予定というものを考慮してほしいものである」という指導教授に対する憤りが起こっていた。こういった気持ちを抱きつつ、この必読参考文献の話をお聴いた翌日から、さっそく、購入できるものは購入し、コピーできるものはコピーして読み込もうと努力したものであった。文献のコピーを率先してやってくれるゼミ生がいて本当に助かった。感謝している。購入やコピーをして手元に文献はそろったものの、結果的には完全読破にはいたらなかった。あまりに膨大な量であったこと、また、文献の読み込み以外にもすべきことがあり、それだけに集中できなかったことが原因だと思われる。ただ、ゼミの時間を使って各プロジェクトがレジュメを作成し、皆に文献説明を行う機会があり、ある程度理解を深めることができたことが唯一の救いであったと言っても過言ではない。この時期、文献の量や読破期限などを考えると嫌になりそうであり、そのことがストレスになっていたことは事実である。

10月3日公園に到着。すると、以前にも会ったことがある19歳の彼がいた。彼はこのところ腰を痛めてあまり公園には来ていなかったが、今までの利用時間帯は20~22時の間くらいということだった。彼が言うには、これまでに、高校生4人組みの利用者と2回ほど遭遇し、彼らがボールを持っていなかったのを、ボールを貸してあげ、一緒にバスケットをしたり話をしたりしたということだった。また、先述したフリーターの2人の女性とも出会ったことがあり、一緒に遊んだ。「彼はすごい!」。純粹にそう思えた。我々がやろうとしていることを、既に実践していたのである。それは“つながり形成”である。リングを通じてつながりが生まれる。そして、次からはもうバスケット仲間として気軽に話をしたり遊んだりできる。なんとすばらしいことではないか。感動である。また、この日、ある考えが我々の頭をよぎった。我々が当初ターゲットと考えていたのは中高生である。しかし、今の時点でほとんど中高生と出会ってはいない。確かに中学生がリングを利用しているのを見たという目撃情報はある。が、我々は出会っていない。そして、事実として、高校生

以上の利用者に多く出会った。また、彼ら、彼女らはつながりを形成ができているのである。そう考えると、なにも中高生に固執する必要はないのではないかと思えてくる。²²いわゆる〈若者〉であればいいのではないかと。高校生以上の〈若者〉でも十分地域の活性化に役立つのではないかとこの考えが浮かんでいた。

10月4日 調査時間は18時半～19時の30分間であったが、運よく利用者に出会えた。おばあさんとお孫さんという、なんとも微笑ましい光景であった。おばあさんにお話を伺うと、「子どもたち（特に、中高生）が健康的に外で遊ぶ姿を最近見ない気がしていたので、この公園で遊ぶ若者の姿を見かけることはすごくいいことだと思う」とおっしゃっていた。また、我々のプロジェクトについて、そしてリングが試験的設置であることを話すと、「リングをなくさないでほしいから、毎日この子（お孫さん）に使わせようかなあ。『あなたたちもがんばってね』と笑顔でおっしゃってくれた。なんだかうれしかった。こういう世代の方の理解が得られ、かつ、応援していただけることが本当にうれしかったのだ。これからも、このような光景（孫を連れておばあさん）が増えればいいなと純粋に思う。

10月5日 それを目の当たりにしたのはこの日であった。なんと、小学生の男の子が一人黙々とゴミ拾いをしているのではないか。これを目にした瞬間、なんともいえない感じだった。³⁰ 純粋に感動していたのである。その子が、公園やリングをコモンズと考えているかどうかや、その子がステークホルダーになっているかどうかなどは二の次だと思えた。単純に感動した。すばらしい光景であった。そして同時に、「この子にゴミ拾いの真意を問うてみたい」という気持ちが湧き上がってきた。実際にはそうしなかったのであるが…。

10月7日 この日は午前中に後藤氏の協力を得て、リング横の注意書き看板の修理を行い、午後から宮本公園の秋祭りにお手伝いとして参加させていただいた。9月末ごろの調査で、我々手作りの“注意書きたて看板”にヒビが入っているのを発見していた。しかし、どう修理していいかわからぬまま、ずるずる日が経ち、結局後藤氏の助けを請うことにしたのである。後藤氏は我々の要請にこころよく応じて下さり、「修理に要る道具はうちに揃っているから」と、修理道具も全て用意して下さいました。こうなると、もう「申し訳ない」を通り越して「お願いします！ありがとうございます！」状態になっていた。しかしながら、我々も、「おんぶに抱っこ状態ではいけない」と意識はしていた。このことは後藤氏にも伝わっていた様子で、看板修理の際には、後藤氏は「自分らの手でやった方がいいやろ」と、我々の手で修理を行えるようサポートして下さいましたのである。本当に助かった。また、後藤氏の思いやりも感じさせていただいた。看板は、この時に修理して以後破損などはなく、今も丈夫に公園に建っている。

午後からの秋祭りは、宮本公園の筒井八幡神社から神輿とサルタヒコが発発。そして、街道や商店街を練り歩き演舞を行い、春日野道駅あたりまで向かう。そして、また神社に戻ってくるといって進行していった。我々は主に、サルタヒコが演舞する際のスペース確保の意味も込めて、まわりにロープを張るという係りをさせていただいた。しかし、祭りが終わった時、何かあまり役に立てなかったという罪悪感のようなものがこみ上げて

いたのを覚えている。もちろん、後藤氏たちは「ありがとう。助かった」と笑顔で接してくれたのではあるが…。こういった罪悪感もありながら、しかし、久しぶりのお祭りに何か新鮮さを感じられた気がしてならない。また、祭りの後の打ち上げにも参加させていただき、⁷地域みなさんの暖かさや人懐っこさを肌で感じたものである。それにしても、後藤氏のサルタヒコ演舞はかっこよかった。本当に後藤氏は、〈何でもできるあこがれの地域のおじさん〉であると思い知らされた。

このお祭りを通じて再確認したことがある。それは⁸この宮本地区の地域のつながりが強いということだ。なぜなら、神輿を担いだり裏方にまわったりということを率先してする人が、非常にたくさんいたからだ。しかも、無理やり祭りに借り出された様子はまったくなく、自然と集まってきた風だったからである。これは、地域の強固な〈つながり〉なくしては起こりえないことだと我々は考える。

さて、ここで、このつながりというものを我々のプロジェクトに返してみよう。我々のプロジェクト、とりわけ宮本公園におけるリング試験設置の場面においては、⁹既に、公園に対する〈ステークホルダー〉“我がこと、我がもの考えるひと”は生まれているように思える。このステークホルダーを生むにはまず、¹⁰主催者（ここでは我々メンバー一人一人）が一番の参加者にならなければならないということ、宮本地区の様々な活動に参加させていただく中で感じとった。このことは、リングについても言えるはずである。よって、これからは今まで以上に、傍観者の立場にならないよう意識し、自分たちもリング利用者になっていくことが必要なのだと思うのだ。

話は元に戻るが、祭りを通しての反省というか残念であったことを述べていこう。それは、既に面識のある方々（後藤氏やお友達の方）以外の地域の人と交流を持つ機会をほとんど見つけられなかったということである。もちろん挨拶程度はできた。しかし、自分たちが何もので何を狙っているのかを詳しく説明したり、地域の方に顔を覚えていただいたりするまでには至らなかった。これは悔しい点でもあった。今日のことを反省に、今後は気をつけていきたいものだ。とは言うものの、この反省点も裏を返せば収穫にもなる。つまり、他の地域の方々にはあまり絡むことができなかつた分、後藤氏や友人、神主さんとは今まで以上に話ができたかもしれないし、自分たちのことをもっと知っていただけたかもしれないからだ。¹¹親交・つながりを深めることができたのである。今日のこのお祭りに参加したということは、我々の今後につながると考える。あまりいい表現ではないが、¹²顔を売ることは重要である。自分たちのことを知ってもらうことが重要な意味を持つと考える。今後、地域で何かあるような時にはぜひとも顔を出させていただきたいものだ。

実際にお祭りを楽しんだということは懐かしい経験であったし、打ち上げで年上の地域の方々とは接する機会をもてたことはすばらしいことであった。¹³〈地域のおじさん〉を肌で感じさせていただいた。そして何より、この宮本地区・宮本公園が自分にとって第二の地域のような、そんな感覚が湧いてきそうなのである。これは、¹⁴我々が〈わがこと〉と思える人に一歩前進したことの裏づけになるであろう。

11月1日 本日宮本公園地域福祉センターにおいて、「宮本公園におけるバスケットリング利用の調査報告」【添付資料 10 参照】と題して、いわゆる中間報告会を開催させていただいた。我々の他に、青少年課の吉田氏、戸野氏、我々が地域の敏腕おじさん・後藤氏、そして宮本公園公園管理会の方々が出席くださった。まず、中間報告会たるものについて簡単に説明しておこう。中間報告会というのは、宮本公園のリングについて、現状やこれからの課題などを含めた様々なことを、宮本地区の方々とお話させていただく機会であると考えてもらえればわかりやすい。この中間報告会は、我々が当初から、リング設置後の活動計画に盛り込んでいたものであった。しかし、計画に盛り込んでいたからといって簡単に実現するわけではない。この報告会が実現するにいたったのはやはり、青少年課の吉田氏・宮本地区の後藤氏の「お力添えによるところが大きいのである。中間報告会を開催したいという申し出を我々から吉田氏に行い、吉田氏から後藤氏に声かけをしていただいた。そして、後藤氏はそれを受けて地域の方々に声をかけ、みなさんを招集して下さることになったのだ。このような経緯で、中間報告会は実現するに至ったのである。

さて、それでは、中間報告会の内容に入っていこう。報告会はあらかじめ作成しておいたレジュメを配布し、それに目を通していただきながら、そこに我々が口頭で補足説明を加えるというかたちで進めた。そして、最後に、集まっていた方々からの質問や意見をお伺いするという形式をとった。レジュメには、我々がおこなってきた調査結果から、〈利用の多い時間帯や年齢層〉〈利用者の意見〉〈公園を利用されている地域の方々の声〉〈我々ユース班の意見〉といった内容を盛り込んだ。これをもとに報告会を進めていった。皆様本当に真剣なまなざしで我々の話を傾聴してくださっていたため、こちらとしても話を進めやすかった。報告内容もほぼ理解いただけた様子であった。地域の方からの質問や意見としては「リングを置く前に懸念された諸問題がまったく起きていないのですばらしい」ということや、「リングをめぐるいろいろな活動の中で、地域の方々とユース班の間に少しではあるがつながりができたことはすばらしいことだ」という意見をいただいたのを覚えている。本当にありがたいと感じた。我々からは、「利用者同士や我々と利用者との間につながりが生まれていること」や、「我々や利用者の中に、公園への意識や地域への意識が芽生えてそれが強くなっていること」すなわち、「リングをコモンズとして意識し、我々や利用者がステークホルダーになっていること」を熱く語らせていただいた。また、「みなさんと同じように、このリングを通じて生まれた地域の方々とのつながりをうれしく思う。これを大切にしていきたい。また、盆踊りやお祭りに参加させていただいて、さらに交流が深まったと思う。今後、何か地域の行事があればまた参加させていただきたい。そして何より、リング設置を受け入れてくださったことに感謝している」という内容のことを話した。

報告会の最後に、かねてから願っていること、すなわち、「リングを、試験設置と言わずにもう少し置いておいてほしい」という請願を皆様に投げかけた。すると、思いのほかこ

ころよくそれを認めてくださったのだ。また、この日、建設局の方が中間報告会後に遅れていらっしやっただので、リング設置延長をお願いしてみた。すると…、「地域の方々の了解があるならオッケーですよ」という返事。意外とあっさりという感じであった。ただ、やはりリング設置延長となった場合は、事務的手続きが必要になってくるらしいのである。これは我々ではどうにもならないので、青少年課の吉田氏が引き受けていただけることとなった。

そして後日、我々と吉田氏は中部建設事務所を訪問し、リング設置延長に関して必要な手続きなど、必要なことならについて話をうかがった。建設事務所の方は「リングのことがうまくいってすばらしいと思いますよ。このまま問題がないならずっと置いておいてもいいと思います。ただ、その際にはやはり、本庁の建設局の許可が必要になるので、あとはそちらとの交渉になります」と語った。これも、「〈リングの管理〉という問題が根底にあることが原因であると思われた。すなわち、いくら地域の方々が「管理に協力する」とおっしゃって下さっても、「何かあったときに責任を負うのはどこか？」という問題が明確にならない限り許可はおらないというわけだ。宮本公園の場合、試験設置期間は、リングの管理責任は青少年課が負って下さっている。ただ、このリング設置を延長する場合、この時点では、青少年課がずっと責任を負っていくことは難しいということであった。中部建設事務所も管理責任は負えないと言うことであった。これらを聞いた時、「やっぱりな」と思ってしまった。なぜなら、これまでもこの管理責任で悩まされてきたことを思い出していたからである。我々がこのプロジェクトを卒論の一環として行うかぎり、そしてこのプロジェクトが一年という限られた期間で行われるかぎり、我々がリングの管理責任を負うことはできない。いや、むしろ学生の我々が管理責任を負うことは不可能なのである。こうなると、やはりどこかに責任を委ねるしかないのだ。しかし、どこも〈責任〉ということには敏感である。とりわけ、いわゆる行政は、触らぬ神に祟りなし的で、〈責任〉というものを負いたがらないように感じる。もちろん、我々に協力して下さっている青少年課の吉田氏、戸野氏、市民活動支援課の森田氏らは、そういう人間ではいらっしやらないのであるが。とにかく、管理責任を負ってくれるところがない限りリング設置の延長はありえないのだ。ここ、中部建設事務所の許可だけではリングを今後も置いておくことはできないのである。なぜなら、中部建設事務所はリングの管理責任を負えないからである。正直、どうしようという気持ちがこみ上げていた。しかしである。なんと、青少年課の吉田氏が、「本庁の建設局上層部の方とかけあってみるわ」とおっしゃってくださったのである。まさに、救いであった。我々は願うしかなかった。

そして数日後…。ホットメールに吉田氏からメールが届いた。そこには、「先日はお疲れ様でした。本日、建設局の公園管理課と話をしてきました。結論としては、とりあえず来年の3月末までは青少年課の方で設置許可の延長の申請をさせてもらい、その間の様子も見て、その後の管理主体については、来年3月にまた協議することになりました」と書かれていたのである。これを目にした時、思わずよろこびの雄叫びをあげてしまったもの

だ。なぜなら、心の中では「もしかしたらリングを撤去しなければならないかもしれない」と思っていたからである。吉田氏のメールを読んだ時、⁸自分たちのやってきたことが報われた気持ちでいっぱいだった。同時に、⁹吉田氏への感謝の気持ちがあふれた。もちろん今回は常設許可ではなく、延長許可である。しかし、これでも十分うれしいし、成果なのである。そして、忘れてはならないこと。それは、この結果は我々だけの力ではなく、青少年課の吉田氏始め、戸野氏、宮本地区の後藤氏や地域の方々など、¹⁰様々な人の協力があったからこそのものであるということだ。本当に、お世話になった方々への感謝の気持ちで一杯だった。同時に、なにか達成感のようなもので満ち溢れていた。

11月18日 この日は宮本公園リング調査の集大成とも言うべきことを行った。我々はこれを〈ユースの日〉と呼んだ。事前に、リングの脇に手作りのポスターをつつて、リング利用者に、「11月18日、一緒にバスケしませんか？みなさんのリングに対する意見を聞かせてください」と呼びかけた。【添付資料 11 参照】呼びかけとは言っても、「絶対来てください！」という強制ではなく、あくまで、「来てくれる人は来てくれればいいな」という気持ちで、¹¹自然発生的なものをイメージしていた。¹²リング利用者同士を結び付けたいという意図、我々と利用者との交流・つながりを深めたいという思い、利用者の本音を語っていただきたいという願いを込めて計画された小さな催し物であった。13:30~15:30と18:00~21:00という時間帯で二部にわけて行った。

13:30に公園に到着すると、既に自転車にバスケットボールをつんだ男性が一人来ていた。¹³うれしかった。¹⁴「下手したら誰も来ないかもしれない」と思っていたからである。彼は以前に出会ったことがある利用者であった。ちなみに年齢は21歳である。早くバスケがしたいという様子であったが、なんと、リングが置いてある広場ではグランドゴルフが行われていたのだ。我々も驚いた。なぜなら「グランドゴルフをされている」という噂は聞いたことがあったものの、これまで実際にされているのを目撃したことがなかったからである。とにかく、少し様子を見ることにし、その間彼に最近のリング利用について話を聞いた。彼によると、この日の前日(11月17日)に、¹⁵自然と知らないものどうしが集まって声を掛け合い、ゲーム形式でバスケをして遊んだとのことであった。メンバーは、彼・小学生・中学生・19歳の男性(彼もお馴染みのリング利用者)だったと言う。年齢は様々だったということだ。まず、彼のところに小学生が寄ってきて、続いて中学生が「よしてえ」という感じで入ってきた。そして、19歳の利用者も一緒になっていったと。彼と19歳の利用者との間には既にバスケ仲間としての面識はあったとのことである。これらを聴いて、¹⁶我々は感動を覚えた。我々がしなくとも、¹⁷利用者だけで〈つながり〉形成がなされていたのだ。しかも、年齢層が様々なことから、ある意味、〈世代間交流〉とも呼べることが起こっていたのである。¹⁸本当にうれしく思った。自分たちが目指していることが起こっている。そして、¹⁹自分たちは〈きっかけづくり〉をおこなえたという実感が湧いた。

さて、彼との話も一段落ついたところで、我々はグランドゴルフをされている方に「リング周辺を、グランドゴルフで使っていない時だけでいいので、使わせていただけません

か？」と尋ねてみた。すると、快く「いいですよ」とおっしゃって下さった。³⁰ 本当に温かさを感じ、また、これが²〈共生〉への一歩だと感じた。こうして、リングが使えるようになり、ぼちぼちバスケをし始めると、今度は小学生3人が遊びにきてくれた。我々と小学生が戯れる姿を、グラウンドゴルフをしている方々は微笑ましいといった感じで見守って下さっていた。13:30~15:30の第一部では、先ほどの彼とその友人、小学生3人、そして我々と最も面識のある¹⁹歳の利用者というメンバーで、バスケをするというよりは小学生と戯れるということをして過ごした。小学生と遊ぶことなどは最近ほとんどなかったもので、新鮮であり、また、本当に楽しかった。²⁰ リングがあることによって、別にそれを使ってバスケをしなくとも〈つながり〉ができ、一緒に楽しむことができることを改めて実感した。それにしても、あの¹⁹小学生たちは人懐っこく、宮本地域の中ですごいネットワークを持っていることを感じさせられた。それを象徴する出来事が多くあった。全く面識のなかった我々に対して人見知りもせず「遊ぼう！」と声をかけてくれたこと。公園に散歩にくる犬の名前をほとんど知っていたこと。近くのローソンの店員とも面識があるようで「ひさしぶり〜！」なんていう会話をしていたこと。公園にバドミントンをしに来ていた見知らぬ男性たちと一緒に遊んでいたことなどである。本当に「すごい…」というしかなかった。そこで思ったことは、¹この宮本地区は安全なのだろうということ。安全でない¹とあんなに人懐っこくはなれないはずであろう。

16:30からは第二部であった。公園に行ってみると、なんと、小学生以外のメンバーはそのまま公園にいたのである。つまり、お昼一番に来ていた彼とその友人、そして我々と最も面識のある19歳の彼である。第二部では第一部とは打って変わって、彼らとの3on3に熱中した。かなり寒かったが、その寒さを忘れるくらい熱中して楽しんでた。約二時間ほどしていたように思われる。これにより、⁹彼らとの交流を深めることができた。やはり、何かに熱中して一緒に遊ぶことが大切だし、¹それが素晴らしいことであるということを実感した。⁹言葉では言い表せない何か、お互いの中に生まれるのである。

この日一日を通して、人数的には6人くらいしか集まらなかったが、これまでにない形で利用者と接することができ、⁹ほんとうに良い機会になった。これで、また次に会った時にはお互いもっと自然に会話を始められたり、遊べたりしていけるのであろう。⁹〈新たなつながり〉が生まれ、また、¹〈昔からのつながり〉も深められた一日であったように思う。⁶本当にすっきりした気持ちであった。

この〈ユースの日〉の出来事をさっそく吉田氏にメールで報告した。そして、返信があった。「交流会、お疲れ様でした。地域で小学生から青年までのネットワークができつつあるようで、感心しました。私たちも、青少年のための色々な事業をやっていますが、今回のような心温まる話はとても嬉しく、皆さんのがんばりと地域の方々のご理解によって、このように地域での青少年の交流が深まっていることを、機会があれば是非広く知らせたいと思っています。現在は、内部の事務作業に追われている毎日ですが、宮本公園でのリング設置の取り組みの成功を心の支えにして、がんばりたいと思っています」と。こ

の返信メールの中で、「リング設置の取り組みの成功を心の支えにしてがんばりたい」という表現を目にした時、⁷⁷なんとも言えない感情が湧いた。本当に他人事ではなく思ったださっていることがすごく伝わってきたし、リング設置が成功していることのよろこびも改めて沸いたものだった。

ふりかえれば、今までいろいろと取り組んできた。時には挫折しかけたこともあった。焦りもあった。しかし、この宮本公園の成功により、すべて良い思い出に変わった気がする。我々が考えていた⁷⁸〈つながり形成のきっかけづくり〉は⁷⁹「確実にカタチになったのである。これはまぎれもない事実だ。そして、⁸⁰「アクションリサーチの賜物なのである。

2.2 コレスポネンス分析の手順・説明

1) 第1段階

我々の一年間の行動をストーリーにまとめた。

2) 第2段階

ラインマーカーを用いてストーリーからプロジェクトにおけるキーワードを抽出した。

3) 第3段階

KJ法を用いて抽出したキーワードをカテゴリー化する。

4) 第4段階

もう一度ストーリーに戻り、カテゴリーにあてはまる言葉が何回でてきたかを集計した。

5) 第5段階

ストーリーを我々がプロジェクト進行における転換期または重要と判断した時期を基準として第1期から第17期までわけた。

第1期：プロジェクト★ユース発足まで

第2期：第一回市役所訪問前後

第3期：市民の集い 2.24 へ参加

第4期：市民の集い 2.24 の振り返り

第5期：第二回市役所訪問前後

第6期：試験設置にむけての事前調査

第7期：フェニックスプラザとの交渉

第8期：第三回市役所訪問とフェニックスプラザ以外の試験設置候補地探し

第9期：宮本公園との出会い・試験設置請願

第10期：第四回市役所訪問および試験設置に対する準備

第11期：試験設置前ミーティング

第12期：試験設置が正式に決まる・宮本地区との交流・盆踊り大会への参加

第13期：宮本公園周辺の小中学校への広報活動・調査開始

第14期：初めて利用者に会う

第15期：調査および緊急ミーティング

第16期：調査

第17期：中間報告会およびユースの日

6) 第6段階

カテゴリーを時期ごとに集計し、分割表（クロス集計）をつくった。

2.3 コレスポネンス分析の提示

表1 内容分析結果

カテゴリーと時期のクロス集計

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
ストーリー①	a 事例または既にあるコモンズ	2									1						1	
	b プロジェクトの行き結まり		2	2				2	1									1
	c 街中・都市部を視野に入れる		2					2										
	d ユースの弱点		3		1	2			1		2							1
	e プロジェクトで目指すつながり		4	1	1						1		1	1			1	1
	f プロジェクト全体の目標または原点	3	10	1	3	1						1				5	1	3
ストーリー②	g 森田氏				1				1									
	h 理想的なコモンズ	1	1		2						2						1	
	i メンバー間の不満・葛藤						1	1				1						
	j 東遊園地			1		2	3		1									
	k 指導教授	1	1						2									
	l フェニックスプラザ					2	2	3										
ストーリー③	m 宮本公園								3	2				3				
	n 地域を視野に入れる・巻き込む		1		2				4		1	1	2			1		3
	o 困難・難色		1					1	3	5					1	1		2
	p 情報収集		3	3	1	2	1			5		5						5
	q ユースへの協力		2	5		3	1		1	6	3	6		3	2	1		
	r 期待・希望をふくらませる		2	3						7		1		2	2		2	1
	s リング設置に付きまとう問題		3	1	4	1			4	21								
	t 後藤氏									2				3	2	1		2
ストーリー④	u 不安からの解消・ホッとした気持ち		2							1				3	1			2
	v プロジェクトの進行に対する不安		2	2		1			2					3	2			2
	w 19歳男性利用者															1	1	1
	x プロジェクトに対する意気込み								2	2	1		2	2		2	3	
	y プロジェクトの進行に対する喜び				2				1	3	1			3		2	5	3
ストーリー⑤	z 確信				1	3				1			1			5		5
	α 事例またはすでにあるつながり	2																3
	β 地域からの理解							2	1				1	1	2	1	1	3
	γ 地域性のよさを感じる							1	1			2		1			2	4
	δ 達成感				1								1					5
	ε 新たにできたコモンズ															2		5
	ζ 吉田氏						1			5	2	3		5	1	1	1	6
	η 協力者への感謝				3					1		2		3		1	2	7
	θ 新たにできたつながり					1										2	2	10

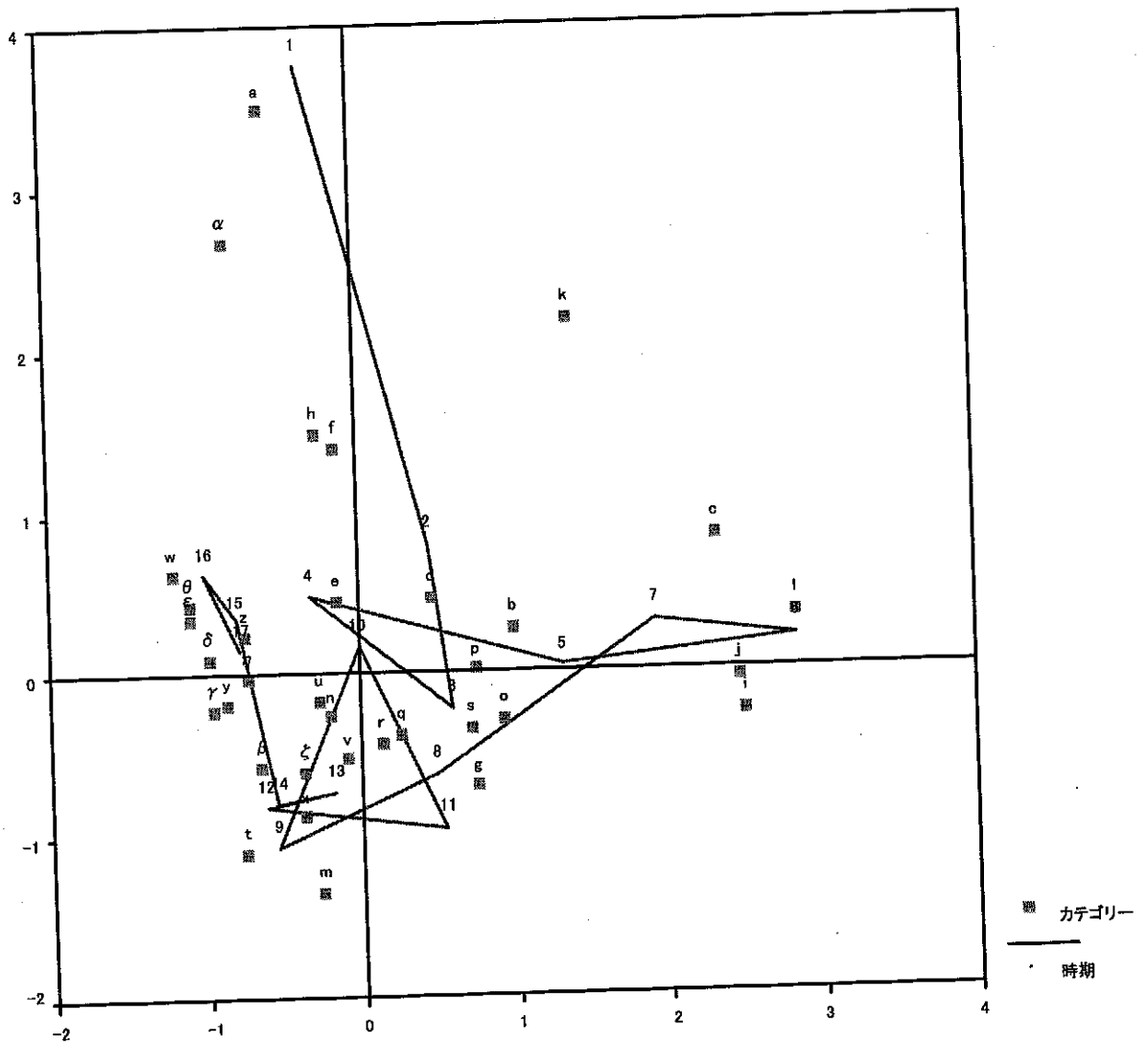


図1 コレスポネンス分析結果

2.4 ストーリー・コレスポネンス分析結果に対する考察

ストーリー①——第1期から第3期——

ストーリー①では主に、卒業研究のプロジェクトの具体的内容を煮詰めることに集中している。

プロジェクト★ユースが発足してすぐに、市役所訪問用の企画書を作成する。そしてその過程で、〈事例または既にあるコモンズ〉の資料を集め、〈プロジェクトの目標または原点〉や〈プロジェクトで目指すつながり〉をグループの共通認識にしていく作業を行っている。このときはまだ、〈街中・都市部を視野に入れる〉という大前提があった。しかし、第一回市役所訪問によって、短期間で研究成果を出そうとしている〈プロジェクト★ユースの弱点〉を指摘され、〈プロジェクトの行き詰まり〉を感じている。しかし、その後すぐに待ち受けていた2.24イベントに、企画段階からのかかわりを決断するものの、〈プロジェクトの行き詰まり〉に関しては曖昧にしたまま、プロジェクトのアピールの機会と市民のニーズ調査に重点をおく参加となる。

ストーリー②——第3期から第9期——

ストーリー②では試験設置の候補地さがしを中心的に行っている。

2.24にプロジェクト★ユースの企画を盛り込もうとしてくれたのは〈森田氏〉であった。そして、2.24後、ニーズ調査を集計し、報告書作成作業の中で、〈理想的なコモンズ〉についてのプロジェクト★ユースとしての考え方が再確認される。その後、平成13年度神戸市予算発表を受け、詳細を確認する為に市役所の〈吉田氏〉を訪問する。2.24の経験も影響して〈東遊園地〉での試験設置を切望する。その時点で試験設置場所は確定しなかったが、並行する形で予算獲得プレゼンテーションの企画書を作成する作業になる。そのさなか〈メンバー間の不満・葛藤〉が生じる。また、〈東遊園地〉での試験設置を目指す一方で〈指導教授〉より新たな試験設置候補地案として〈フェニックスプラザ〉を紹介される。しかし、何度かのフェニックスプラザとの交渉の末、断念を余儀なくされる。そのうち、新たな試験設置候補地を探すために市役所を訪問する。そこで〈森田氏〉、〈吉田氏〉兩名にサンパルと〈宮本公園〉を紹介される。この時期に、予算獲得プレゼンテーションの資料になる神戸市内中学校のバスケットボール部員への社会調査を実施している。そして、サンパルと〈宮本公園〉での試験設置を実現させるために、管轄の中部建設事務所を訪問する。

ストーリー③——第7期から第12期——

ストーリー③では、試験設置場所の模索から、宮本公園での試験設置を現実のものとしていく過程である。

フェニックスプラザでの試験設置を断念し、サンパルと〈宮本公園〉での試験設置実現のために中部建設局を訪問する。その際、〈リング設置に付きまとう問題〉を思い知らされ

〈困難・難色〉を実感する。ただし、〈地域からの理解〉があれば実現可能であるという事実に〈期待・希望をふくらませる〉こととなる。この時までは〈街中・都市部を視野に入れる〉という前提があったが、実現の難しさから方向転換をはかることとなる。それは〈地域を視野に入れる・巻き込む〉ことである。そして、このことが、宮本地域での〈後藤氏〉というキーパーソンとの出会いにつながり、その出会いこそが試験設置を実現させた大きな要因であった。

ストーリー④——第 11 期から第 16 期——

ストーリー④では宮本公園での試験設置がはじまり、不安と期待を持ちながら現地へ足を運び、実地調査を行っている。

試験設置が完了して実地調査の段階に入るものの、設置前に懸念されていた問題や〈プロジェクトの進行に対する不安〉を抱えている。しかし、地域の人々や〈後藤氏〉の話から、それらが発生していないと知らされ、〈不安からの解消・ホッとした気持ち〉が生じている。そして、後のステークホルダーになる〈19 歳男性利用者〉と出会う。彼をはじめとする利用者への聞き取りや地域の人々の感想から、本プロジェクトの意義を確認し、〈プロジェクトに対する意気込み〉や〈プロジェクトの進行に対する喜び〉を感じている。

ストーリー⑤——第 15 期から第 17 期——

ストーリー⑤では試験設置調査の総括をしている。地域住民への中間報告会を開き、ユースの日という利用者の交流会を催している。それらを通して、プロジェクトの成功を実感することとなる。

実地調査が進むにつれ、このプロジェクトの成果の一端を〈確信〉すると同時に、もとも宮本地域にあった〈事例またはすでにあるつながり〉を実感することとなる。それは、〈街中・都市部を視野に入れる〉という前提のときには感じられなかったものである。再び宮本地域での祭りに参加したときには、前回の盆踊りよりも、〈地域からの理解〉を実感し〈地域性のよさを感じる〉こととなる。そして、試験設置の集大成ともいえる地域住民への中間報告会やユースの日の反応から、バスケットリングのある宮本公園は〈新たにできた commons〉だと確信する。このときには、〈達成感〉をえるとともに、いままでにプロジェクト★ユースに携わってくれた〈協力者への感謝〉で胸を一杯にしている。そして地域の人々と青少年のつながりは勿論、そこにプロジェクト★ユースも加えての〈新たにできたつながり〉を実感している。

ストーリーの補足

ストーリー全般を通して、様々な〈情報収集〉を行っている。また、〈ユースへの協力〉も試験設置に至るまでは随所に見受けられる。キーパーソンとしての〈森田氏〉については、出てくる回数こそ少ないが、2.24 への参加を打診してもらい、試験設置候補地案が白

紙になったときにアドバイスをもらう。プロジェクトの転換期には必ず〈森田氏〉の力添えがあった。そして、〈吉田氏〉については当初関わりがほとんどなかったが、第8期あたりから〈吉田氏〉と連携してプロジェクトが進行していくこととなる。今回は行政側の〈吉田氏〉による全面的協力がなければ、本プロジェクトは決して成功しなかったといえる。

3 結論

3.1 プロジェクトを通じたメンバーそれぞれの振り返り

まず、主観的にふりかえる。私がたずさわってきたこのプロジェクトは、一年という非常に短い期間ではあったものの、とてつもなく内容の濃いものであった。多くの人々との出会いがあった。しかもそれはこのプロジェクトがなければ決して出会うことのなかった人々。神戸市役所の方々、宮本地区の地域住民の方々を始め、本当に多くの人々と出会った。この事実は、私にとって財産であると言わずにはいられない。そして、〈出会った〉ことにより、〈つながり〉ができた。この〈つながり〉こそ、私が、いや、我々が目指していたものであった。それを現実のものとしたことは感動に値する。

次に、客観的にふりかえろう。我々は一つの成功例を作ったわけだが、ここにたどり着くまでには様々な〈カベ〉があり、それを乗り越える手助けをしてくださったキーパーソンが介在していた。

プロジェクトの最大の〈カベ〉、それは〈責任問題〉であった。これは、リングの管理も含め、リング設置から発生してくる諸問題への対応を含めた上での〈責任〉を、誰が負うかということであった。もちろん、我々のような学生にこの〈責任〉を負えるはずがなかったことは言うまでもない。今回の場合は、神戸市青少年課がそれを快く請け負って下さったことで乗り越えることができたのである。ここでは、この青少年課の方がキーパーソンなのである。このほかにも、それぞれの段階でキーになる人物と出会うことができた。これが成功のポイントだと言えよう。

要するに、たとえ誰かが今回のようなプロジェクトを発案しても、〈行政〉のような確固たる機関が最終的な〈責任〉を負わない限り、プロジェクトが現実となることはありえないのである。また、それぞれの過程でキーになる人物に出会えるかどうかが鍵になってくるわけだ。私はプロジェクトを通して、このような結論にたどりついた。やはり、当初我々の頭にあった〈公私協働参画〉なくしては今回のようなプロジェクトは成功し得ないという仮説が、立証されたのである。今後も、〈行政〉が、“さわらぬ神にたたりなし”ではなく、“何事もやってみてそこから学ぶべきだ”というような発想の転換を進め、今まで以上に市民の意見に耳を傾け、〈やってみようの精神〉で何事も取り組んでいってくれることを願うものである。(中村佳史)

私がこのプロジェクトを通じて学んだことは、人々のつながりが薄れてしまったように思える現代社会においても何か人々の間で共通の理念が生まれればそこから人々のつながりは無限に広まっていくということだ。我々は最終的に宮本公園にリングを設置することができた。しかし、大事なのはリングを設置したことよりもその過程であると私は考える。

我々は始め〈防災〉という抽象的な理念から5人集まった。そして5人の中でその理念

は〈コモンズ作り〉から〈ストリートバスケのリングを作る〉というように具体的な形を持ち始めた。そこから、指導教授の助けもあり市役所へその理念を伝えたところ、我々の思いは通じた。ここで我々と行政との間に〈つながり〉が生まれた。そして、さらに 2.24 というイベントに参加することにより、そのイベントの参加者やその時会場であった東遊園地を訪れた人々との間にこのイベントに参加したという共通の思いによってつながりが生まれた。このイベントを経て我々の中にプロジェクトを成功させたいという思いが沸いた。この思いは行政に伝わった。

次に我々がリングを試験的に設置しようと候補地を探す過程の中でも様々な出会いがあった。もちろん我々の思いが通じなかった時もあった。しかし、我々が出会った人々は皆真剣にこのプロジェクトについて考えそして答えを出し、我々を導いてくれた。この宮本公園のある素晴らしい地域と巡り合えたのは、このプロジェクトに関わった全ての人々の力なくしてはありえなかった。そしてここまで来るあいだ常に我々の側には市役所の方がいた。最後にこのプロジェクトは我々と行政、そして地域の〈協働企画〉になった。

“リングを立てたい”という思いが我々を動かし、行政を動かし、そして地域を動かし、またこの思いは我々をつなげた。そして今この時も、宮本公園でストリートバスケを通じて〈新たなつながり〉が生まれている。これこそが我々の求めていた〈コモンズ〉である。(中山裕平)

本プロジェクトを通して、得たいちばん大きなものは〈新たなつながり〉だと思う。またそれによって得られたことも多くある。

まずは、市役所青少年課の方々と一年間協働で事業をさせて頂くことによって、行政の方とのつながりができた。これによって、少なくとも我々と事業を共にしてくださった行政の方は若者に対するイメージがかわったと思う。また、私も行政・お役所といったら市民に耳をあまり傾けないというイメージがあったが、すべてがそうではないと実感できた。

次に、本プロジェクトで最終的にお世話になった宮本地区の方々とのつながりである。ここは、自分がこんな地域に住みたいと思える理想の地域であった。地域住民の方が皆さんで地域のことを考えておられ、それを共に体験することができた。そして、我々をとても温かく受け入れ、支援してくださった。

そして、最後にこのプロジェクトの目標でもあった〈新たなつながり形成〉である。予想以上に、目に見える形で青少年同士のつながり、青少年と小学生の戯れる姿を見ることができた。さらに、我々も〈リングを介してできるつながり〉に参加することができた。

これ以外にも、ご支援してくださった方々がたくさんいる。このプロジェクトを通して目標においていた〈新たなネットワークづくり〉ができる喜びと、その過程を自分自身が体験することができた。そしてこれは、〈きっかけづくり〉のみならず、自分たちが当事者になっていったからこそ得られたものだと思う。(澤山佳世子)

このプロジェクトを振り返って、はじめは大きな企画でどうなることかと思っただけ、バ

スケットリングの設置もでき、非常に達成感があるものに仕上がった。この企画を進めるにあたりはじめのうちは理想ばかりが大きくなり、壁にぶち当たるとそれだけ打撃も大きかった。プロジェクトが進むにつれ、遠くを見ているだけでなく目の前の一步を着実にしていくことが大切と分かり、目の前の小さな目標を達成していくとともに当初の企画の達成につながった。遠くから見ると大きな企画だが一年間かけて進んだその一步一步の過程、つまり記録が我々の卒業研究のなかで何よりも大切である。

プロジェクトの当初は街中に誰もが気軽に使えるバスケットリングを増やそうと、いわば NY のアーバンスポーツを目指し、理想に燃えていた。しかし、バスケットリングを設置するだけで急に街が NY になるわけでもなく、バスケットリングを一つ設置するだけでも時間と手間がかかった。バスケットリングを設置するためにはさまざまなハードルをクリアしていかなければならない。はじめは設置場所、設置費を出してくれる神戸市との交渉が目標となっていたが、進むにつれ、設置場所の地域の人々やリング利用者など、取り巻く環境が変化していき、その時々感じたことも変化した。大切なのはただ単にリングを設置したという事実だけではなく、そこで我々がどうリングを設置するために、またその後に関わってきたかということである。(久保田桂子)

本プロジェクト成功の鍵は、〈試験的〉にバスケットリングを設置したところにあると思われる。当初はリング常設を目標としていたのだが、管理責任を考えるとそれは断念せざるをえなかった。そこで、苦しまぎれに考えついた方法が〈試験設置〉というものである。候補地近隣の地域住民や管理主体にたいして、短期間の設置で、問題が発生すればいつでも撤去可能という条件を提示することで、まず何とかバスケットリング設置を実現してしまう。そして、地域の納得できる結果がえられたならば、そのまま管理を引き継ぎ、常設にしてしまおうという考えであった。そういった、いわば地域の不安を解消するための条件が、思わぬところで効果を発揮することとなる。

「……このリングは試験的に設置しています。以上のことが守れない場合は即座に撤去します。誰かがやったから自分には関係ないというのは通用しません。みんなでこのリングを守ろう!!」これはリング設置のさい、取りつけた看板の文面の一部である。この〈試験的〉という単語から、バスケットリングの利用者は地域からの信頼を感じ、また同時に、自分の行動が常に見られていると意識することとなる。結果として、公園のゴミ拾いをする利用者が出現するなどして、利用マナーについて地域の人々からよい評価を受けることができた。こういった評価があつてこそ、本プロジェクトを成功と位置づけることができたのである。

現在もバスケットリングは宮本公園に期間を延長され〈試験的〉に設置されている。これが常設になるかどうかは、管理の問題もあるのでわからない。ここからは宮本地域と青少年との〈つながり〉や〈信頼関係〉次第ではないだろうか。そのきっかけを本プロジェクトでつくることができたのである。(山本聡司)

3.2 今後の研究への課題・問題点や提言

本プロジェクトは様々な問題がついてまわった。その代表は、このプロジェクトを実行する我々が学生であるということだった。つまりこのプロジェクトは一年という期限付きだった。ここから我々が悩んだ問題が生まれてきたと言っても過言ではなかった。まず、最初にでてくるのは我々が卒業した後誰がリングを引き続き管理するのかという〈引継ぎの問題〉である。引継ぎには当然責任がついて回ってくる。この〈責任〉という言葉が我々を悩ませた。ただリングを管理するだけならば誰も文句は言わなかった。しかし、現代の社会においてはそれだけではリングの管理の責任を果たしたことにはならないのだ。リング使用の際に利用者同士の喧嘩または事故による傷害、リングにつけてあるネットの補充、夜間使用時の騒音に対する近隣住民の苦情の対処、一般的に言われる不良の溜まり場になってしまった時の治安の維持、リング使用者がゴミをポイ捨てすることによってでるゴミの処理と挙げればきりがなくらいに出てくる。これらの問題は、数年前までは考えられないようなことばかりであるが、〈責任〉を果たすということはこの諸問題の解決・防止に努めることだ。そうすることにより初めて地域の信頼を得ることができバスケットリングを設置するための第一歩となるのである。

だが今回でてきたこれらの問題は我々が学生であり期限付きという条件の中でプロジェクトを進めていたからこそでてきたとも言えなくはない。なぜなら、設置をお願いした地域からすれば、この期限付きということほど危うい条件はない。何か問題が起こってしまったとき責任を取らず逃げられてしまう可能性があるからだ。だからこそ細かに起こりうる問題を挙げその対処法を求めてきたと考えられる。このことから、期限付きではなくしっかりと組織の中で同じような企画を進めていけば問題は変わってくると予測される。よってこのプロジェクトは我々学生だけの力では到底なしえるものではなかったが、市役所の方の協力が加わることにより、我々が信頼できる団体であるということ宮本地区に認識してもらうことができたので、安心感を与えることができたことが大きいと考えられる。つまり、プロジェクトを成功させるには実行する団体が地域に与える安心感が重要になってくる。

またこのプロジェクトにおいては、宮本地区の地域性に助けられたことが大きい。それは、本来ならば上記の問題の解決法を提示しなくてはならないところを、我々が出会った宮本地区はこれらの問題の対処法を我々と一緒に考えていこうではないかと持ちかけてくれたからだ。市役所の方の話によれば本来ならばありえないような対応であった。宮本地区はそれほどまでに素晴らしい地域だった。さらに、現段階ではリングを設置することによって懸念された問題は起こっていない。

しかし、上記に挙げた問題に対する対処法や防止法を細かく明記できなかった。つまり、今回は確かに成功例なのだが全ての地域に当てはめることができない。よって、上記の問題を克服しない限りこれ以上このプロジェクトが発展していくのは難しいと考えられる。

重要なのは地域に対して安心感を与え、地域から信頼されるようになるかであるが、上記の問題を克服していないと同様のプロジェクトを達成させるのは宮本地区のような地域に出会わない限り難しいだろう。

4 参考文献リスト

- * Boissevain, Jeremy, 1974, *Friends of friends: networks, manipulators, and coalitions*, New York: St.martin. (=1986, 岩上真珠・池岡義孝訳『友達の友達——ネットワーク, 操作者、コアリション』未来社.)
- * Francis, Fukuyama, 1995, *Trust: the social virtues and the creation of prosperity*, New York: Free Press. (=1996, 加藤寛訳『「信」無くば立たず』三笠書房.)
- * 羽根木プレーパークの会, 1987, 『冒険遊び場がやってきた!——羽根木プレーパークの記録』晶文社.
- * 株式会社アド・ハート, 2002, 「HUFF SPORTS NBA 公認バスケットゴール」(<http://web.orange.ne.jp/~adheart/basketsa.html>, 2001.5.31)
- * 神戸市, 2000, 「第三章 重点行動プログラム」『神戸市復興計画推進プログラム——新生・神戸をめざして』
- * 神戸市役所, 2001, 「ひと・まち・みらい KOBE2001」(http://www.kobe2001.or.jp/f_top.html, 2001.2.10)
- * 日都産業株式会社, 2001, 「標準健康器具 ボール器具」『ニット総合カタログ 近畿版』:116.
- * 能代山本広域市町村圏組合, 1996, 「アリナスホームページ」(<http://www.shirakami.or.jp/~kouiki/arinasu/>, 2001.1.9)
- * NPO Shirakami net, 2001, 「バスケの街のしろ」(<http://www.shirakami.or.jp/%7Enoshiro/basket/basket.html>, 2001.1.9)
- * ———, 2001, 「能代市バスケの街づくり事業」(<http://www.shirakami.or.jp/%7Enoshiro/basket/rings.html>, 2001.1.9)
- * パチンコポパイ, 1999, 「'98 秋田県ストリートバスケットボール大会」(<http://www.chokai.ne.jp/popeye/Event/>, 2001.1.9)
- * Putnam, Robert, D, 1993, *Making democracy work: civic traditions in modern Italy*, Princeton, DN.J.: Princeton University Press. (=2001, 河田潤一訳『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』NTT出版.)
- * サーフィンライフ, 1997, 「重油事故の裏側で」『月刊サーフィンライフ 4月号増刊』株式会社マリン企画, 119.
- * 沢木耕太郎, 1984, 『一瞬の夏』新潮社.
- * 多辺田政弘, 1990, 『コモンズの経済学』学陽書房.
- * 田尻町役場, 1998, 「総合体育館」(<http://www.tajiris.miyagi-ci.or.jp/tajiri/sport/html/soutai.html>, 2001.1.9)
- * タチカラ株式会社, 1999, 「BASKETBALL」『TACHIKARA THE BALL COLLECTION '99』:7-12.

- * ———, 1999, 「COMODITY」『TACHIKARA THE BALL COLLECTION '99』: 19-20.
- * 立木茂雄編著, 1997, 『ボランティアと市民社会——公共性は市民が紡ぎ出す』晃洋書房.
- * Whyte, William, Foote, 1914, *Street corner society: the social structure of an Italian slum*, Chicago: University of Chicago Press. (=2000, 奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣.)
- * 山岸俊男, 1999, 『安心社会から信頼社会へ——日本型システムの行方』NTT出版.

5 添付資料

- 添付資料 1 企画書『プロジェクト・ユース』
- 添付資料 2 関連施策
- 添付資料 3 2月24日「届け！希望の灯り」の報告
- 添付資料 4 中学生の遊び場に対する意識調査
- 添付資料 5 企画書『地域のネットワーク強化のために新たな都市のコモンズをつくる』
- 添付資料 6 フェニックスプラザ不許可の報告書
- 添付資料 7 社会調査の集計
- 添付資料 8 バスケットリング設置についてのお願い文
- 添付資料 9 宮本公園試験設置調査用紙
- 添付資料 10 中間報告書
- 添付資料 11 いっしょにバスケットやりませんか？ ポスター

企画書

『プロジェクト・ユース』

企画目的：地域のネットワーク強化の
ために新たな都市のコモンズをつくる

関西学院大学

立木ゼミ

山本 聡司

中山 裕平

中村 佳史

澤山 佳世子

久保田 桂子

現状と課題：阪神・淡路大震災の被害をうけた 神戸市に焦点をあてる。

震災後、多くの人たちが仮設住宅などに転居し住み慣れた土地を離れることを余儀なくされた。そして、震災から6年たった現在でも元の土地に戻ることが出来ず地域との交流、つまりネットワークづくりに甘さが見られると感じる。確かに、震災復興は目に見える部分で推進しているが、住民の「生活の充実」「こころの安心・ゆとり」は取り戻せないままである。これらを解決するためには、住民一人一人が互いに地域で一体となって支えあっていく必要がある。また、子どもたちを地域ぐるみで育てていく環境をつくることも必要である。地域のネットワークを強化することによって、市民一人一人が地域に関心をもち、地域活動が活性化する。更に、生活再建を推進することにもつながると考える。つまり、震災復興には地域のネットワーク強化が必要である。既存のネットワーク強化はもとより、今までになかった新たなネットワークの必要性が迫られている。また、そのためには「市民と行政の協働」は不可欠である。

阪神・淡路大震災の経験から、災害が起こったときの地域の助け合い、共同作業というものは何よりも重要で、欠かせないものだということも体験した。つまり、災害に強い街をつくるためにも、地域のネットワーク強化は必要であると考ええる。

次にこれら「地域のネットワーク強化」においては、「コモンズの可能性」について注目してみる必要がある。多辺田 政弘によるとコモンズは「商品化という形で私的所有や、私的管理に分割されない、また同時に、国や都道府県といった広域行政の公的管理に包括されない、地域住民の『共』的管理（自治）による地域空間とその利用関係（社会関係）」と定義されている。つまり、そこに集う者誰しもが、共に興味・関心を持ち、そしてそれぞれが責任を自覚した上で管理する事のできる空間がコモンズであり、それら地域内のコモンズを拠点に既存のネットワークの再生・復興、また新しいネットワークの創出が活性化されると考えられる。

そこで、ネットワークづくりのゲートとして青少年に焦点をあててみた。将来の社会を担っていく彼らのエネルギーを地域の活性化・ネットワークづくりに生かしたいと考えたためである。

基本方針：青少年と地域を結ぶ

青少年を地域と結ぶためには、彼ら一人一人に街づくりの主役は自分たちだという意識（「自分たちのこと」「自分たちの街」「自分たちの仲間」）をもってもらうことが大切である。何か問題が出てきた場合に、それを自分たちの問題として受け止めてボランティアなどにつなげていくといったことがある。実際、何年前かに重油流出事故が起こったとき、サーファーたちが連れ立ってボランティアに行ったという事実が報告されている。ここでは、海がコモンズとなり、それによって地域とサーファーのネットワークが形成された。

しかし、現在の神戸市にはこのようなコモンズがほとんどないと思われる。また、公園においての年齢層を考えたとき、小学生またはそれ以前の子どもたち・高齢者が大半に思え、彼ら青少年の姿はない。そこで、「彼らの地域での居場所の確保」「彼らのエネルギーを打ち込ませること」を市民と行政とが協働して形成する必要がある。

主な施策

スポーツに焦点をあてる。青少年が無料で、スポーツに打ち込める場所を提供することによって、地域とのつながりを持つきっかけになるのではないかと考える。そこで、ストリートバスケット（3 on 3）を提案する。手軽にでき、広大なスペースを必要としないために、街全体でとりくめるのではないかと考える。

具体的な場所の提供案として以下のものを挙げる。また、これらを無料で開放し、地域と密着した場所を条件とする。

- 学校の開放
- 高架下などのスペース
- 空き地
- 公園
- ファミリーレストランの駐車場の一部

*一年をかけてこのプロジェクトのきっかけをつくっていきたいと考えています。

関連施策

青少年の居場所づくりの推進

地域への愛着づくり事業

「青少年は地域社会からはぐくむ」という視点に立ち、地域の青少年育成団体を通して、異年齢・異世代交流による地域の文化共有物づくりや、地域の遊び場等となる共有空間づくりに青少年が参加することを促進する。

このような物心両面での共有物（コモンズ）づくりによって、青少年の居場所づくりを推進し、地域への愛着心を育てる。

- ・地域において青少年の育成活動を行っている青少年育成団体を対象とし、交流事業1事業あたり200千円（事業費：2,000千円）（例、地域の遊び場、伝説、名人等を探った冊子の作成など）、遊び場づくり1事業あたり300千円（事業費：3,000千円）（例、地域での手作りふるさとモニュメント、ストリートバスケット等）助成する。
- ・青少年の居場所づくりを推進するにあたり、中高生に年齢の近い学生NPO等と連携し、調査及び事業を実施する。（事業例）若者がエネルギーを発散できる場づくりについて、青少年のニーズを調査し、居場所の提供を行う。事業費は1,500千円とする。

市民一人ひとりの健康の増進と生活の充実

震災後、市民の生活が落ち着きを取り戻すにつれ、心のケアも含めた幅広いニーズが生じてきた。生活再建を推進するためには、市民一人ひとりが心の面を含めた幅広い健康を推進するとともに、生活を充実させていくことが必要である。そのためには一人ひとりがスポーツや健康づくりに取り組むことが求められる。

健康を維持・推進していくには、一人ひとりがスポーツに親しんだり、健康づくりに取り組むことが重要である。そのスポーツに仲間同士あるいは地域で自主的に取り組めば、より効果的である。なお、仲間同士、あるいは地域での自主的な健康づくり活動等を行うことは、住んでいる地域内の交流を深めることを通じて、地域活動の活性化へもつながっていくと考えられる。

健康推進を目的とした仲間づくりや地域活動を行えるように支援し、人々がスポーツを楽しむ健康づくりができるまちづくり（アスリートタウン構想）を進める。

健康・スポーツ都市づくりを進める

市民の健康づくりやスポーツに対する志向の高まりを踏まえて、本格復興に向けてまちに活力と魅力をもたらす取り組みとして、「神戸アスリートタウン構想」を推進し、健康づくりやスポーツを通じて、市民一人ひとりが豊かさや生活の充実感、地域での一体感などを感じることができるまちをめざす。

市民・地域・市との適切な役割分担のもとに、関係団体の協力も得ながら、仲間同士の健康の確保・増進運動の取り組みを推進して、これらを通じた市民相互のコミュニケーションの円滑化を促進し、市民主体の自律的な共生組織の形成に向けた支援を行う。また、すべての人が、それぞれの年齢・技術・価値観に応じて多様な健康・スポーツ活動を楽しむ環境づくりに取り組むとともに、市民・NPO・事業者・専門家などが有する活力や創造性・ノウハウの活用を図るため、それぞれの主体的な取り組みを支援し連携を強める。

- ・誰もが参加できる健康づくり運動を通じて、市民全体の地域のきずなやコミュニティづくりを支援する「健康コミュニティづくり支援事業の全学的展開」
- ・市民・NPOの立場からアスリートタウン構想を自主的に進める活動を行っている団体への支援と連携の強化

*上記施策の中から「青少年の居場所づくりの推進」事業に参画する

2月24日「届け！希望の灯り」の報告

(『くぐれ！未来へのHOOP』の企画でのアンケート結果について)

2001年2月24日(土)に神戸市の東遊園地において行われた震災復興事業の一つである「届け！希望の灯り」で、我々関西学院大学社会学部・立木ゼミ「プロジェクト★ユース」は『くぐれ！未来へのHOOP』と題する企画をさせて頂きました。我々は「都市におけるコモンズづくり」を卒業研究としており、具体的には「街中にストリートバスケのリングを設置する事によって青少年と地域のネットワークを強化する」という事を考えています。そして、今回の「届け！希望の灯り」の中で震災復興事業に参加させて頂くとともに、市民の生の声を直接聞く貴重な機会を与えて頂きました。今回の企画の内容についてはここでは省略させて頂き、その際に行ったアンケート結果についての報告します。

このアンケートでは以下の3項目に選択肢を答えてもらう質問と自由記述欄を用意しました。

I 「街中に、外で遊べる場所・気軽に無料でスポーツ出来る場所があると思うか？」

II 「東遊園地にリングを常設して欲しいと思うか？」

III 「街中に無料で出来るバスケットリングがあればいいか？」

そして、それぞれについての有効回答数は148人で各質問の回答の割合は以下のよう
な結果になりました。

- | | |
|-------------|--------|
| I、①「ない」 | ・・・25% |
| ②「少ない」 | ・・・66% |
| ③「ある」 | ・・・7% |
| 「無回答」 | ・・・2% |
| II、①「もちろん」 | ・・・84% |
| ②「どうでもいい」 | ・・・11% |
| ③「いない」 | ・・・1% |
| ④「その他」 | ・・・3% |
| 「無回答」 | ・・・1% |
| III、①「もちろん」 | ・・・91% |
| ②「どうでもいい」 | ・・・4% |
| ③「いない」 | ・・・1% |
| ④「その他」 | ・・・1% |
| 「無回答」 | ・・・3% |

(その他の意見には・近所ではないので無責任な事は言えない

・サッカーゴールの方が欲しい

・今はよく判らない 等)

以上のような結果を見ると明らかなように、街中に遊び場やスポーツする場がすくなくと多くの方が考えており、バスケットのリングに対しても90%もの人があればいいと思っっているようです。さらに、会場でもあった「東遊園地」という具体的な場所についても80%以上の方が常設に前向きな意見でした。

また、自由記述欄においては賛同の意見がほとんどを占めました。そしてその他、いくつかの問題点への指摘もなされていました。それらをまとめると以下のようになります。

- ・ 設置費用の問題
- ・ 管理の問題（ゴミや使用のルール、管理者について）
- ・ 設置費用の問題
- ・ そこにタムロする若者の問題

これらの問題についてはアンケート以前にも、我々の間で市民の皆さんに「懸念されるであろう問題」として認識していました。ただ、このように市民の声として表面化した今、更にこの問題を掘り下げる必要性を感じています。しかし基本的に我々はこのバスケットリングを公園等と同じコモンズとして位置付けており、必要以上の管理、ルール化は望むものではありません。そして、これらをコモンズとして位置付けている以上、これは利用する青少年のみのものではなく、地域住民を含めて共有の財産なのです。よって、問題解決においても利用するものだけに理解を求めるのではなく、双方が共に問題解決にあたる事によって、地域に根ざした青少年の居場所が出来ると我々は考えます。

今回のアンケートによって得るものは大きかったのですが、しかし我々が焦点を当てている中高生の意識調査があまり出来ていないという問題点もあります。これからも継続的にアンケートを実施し、更に掘り下げた意識調査を行っていきます。

関西学院大学社会学部立木ゼミ

プロジェクト★ユース

久保田桂子

澤山佳世子

中村佳史

中山裕平

山本聡司

中学生の遊び場に対する意識調査

私たちは、関西学院大学社会学部の4回生です。私たちは、震災復興におけるまちづくりの一環として、ストリートバスケットが気軽に出来る場所をつくるための事業をすすめています。これを私たちは卒論のテーマとしています。今回は是非、皆さんに放課後の過ごし方や、遊び場についてのご意見をお聞きし、事業の内容に取り入れたいと考えていますので、ご協力をお願いします。

*以下の質問について該当する内容に○をつけ、自由記述欄には思うことを記述してください。

性別 男・女 中学()年生

1. 休みがあればどこに行きますか？

自由記述 ()

2. 友達と何をして遊びますか？

自由記述 ()

3. 現在、公園を利用していますか？

1. はい

2. いいえ (▶「2.いいえ」を選んだ方は6.へとんで下さい)

4. 3で「1.はい」を選んだ人に質問します。

公園をどのように利用していますか？

自由記述 ()

5. 3で「1.はい」を選んだ人に質問します。

公園に対する要望はありますか？

自由記述 ()

▶ 8へとんで下さい

6. 3で「2.いいえ」を選んだ人に質問します。

いつ頃まで利用していましたか？

1. 小学校入学前

2. 小学校低学年

3. 小学校高学年

4. 利用したことがない

7. 3で「2.いいえ」を選んだ人に質問します。

なぜ利用しなくなったのですか？

自由記述 ()

8. あなたの地域で、無料で使える場所や遊具がありますか？

- 1.ある 2.少ない 3.ない

9. 8で「1.ある」「2.少ない」を選んだ人に質問します。

それは、どんな場所や遊具ですか？

(例、公園、バスケットリング・サッカーゴールなど)

自由記述 ()

10. あなたの地域で、無料で使えるどんな場所や遊具があればいいと思いますか？

複数回答可

(例、公園、バスケットリング・サッカーゴールなど)

自由記述 ()

11. あなたの地域で、無料で、ボールを使って遊んでいい場所がありますか？

- 1.ある 2.少ない 3.ない

12. 11で「1.ある」「2.少ない」を選んだ人に質問します。

それは、どんな場所で、何が出来るか具体的に書いてください。

自由記述 ()

13. あなたの地域で、無料で使えるバスケットリングがあれば行きますか？

- 1.行く 2.行かない

14. 13で「1.行く」と答えた人に質問します。

どのくらいの頻度で行くと思いますか？

- 1.時間があれば、ほとんど行く 2.時間があれば、ときどき行く
3.時間があれば、たまに行く

質問は以上です。御協力ありがとうございました。

企画書

『地域のネットワーク強化のために
新たな都市のコモンズをつくる』

関西学院大学

立木茂雄ゼミ
プロジェクト★ユース

山本 聡司

中山 裕平

中村 佳史

澤山 佳世子

久保田 桂子

現状と課題：阪神・淡路大震災の被害をうけた 神戸市に焦点をあてる。

震災後、多くの人たちが仮設住宅などに転居し住み慣れた土地を離れることを余儀なくされた。そして、震災から6年たった現在でも元の土地に戻ることが出来ず地域との交流、つまりネットワークが減少したと感じられる。確かに、震災復興は目に見える部分で推進しているが、住民の「生活の充実」「こころの安心・ゆとり」は取り戻せないままである。これらを解決するためには、住民一人一人が互いに地域で一体となって支えあっていく必要がある。また、子どもたちを地域ぐるみで育てていく環境をつくることも必要である。地域のネットワークを強化することによって、市民一人一人が地域に関心をもち、地域活動が活性化する。更に、生活再建を推進することにもつながると考える。つまり、震災復興には地域のネットワーク強化が必要である。既存のネットワーク強化はもとより、今までになかった新たなネットワークの必要性が迫られている。また、そのためには「市民と行政の協働」は不可欠である。

阪神・淡路大震災の経験から、災害が起こったときの地域の助け合い、共同作業というものは何よりも重要で、欠かせないものだということも体験した。つまり、災害に強い街をつくるためにも、地域のネットワーク強化は必要であると考えている。

次にこれら「地域のネットワーク強化」においては、「コモンズの可能性」について注目してみる必要がある。多辺田 政弘によるとコモンズは「商品化という形で私的所有や、私的管理に分割されない、また同時に、国や都道府県といった広域行政の公的管理に包括されない、地域住民の『共』的管理（自治）による地域空間とその利用関係（社会関係）」と定義されている。つまり、そこに集う者誰しもが、共に興味・関心を持ち、そしてそれぞれが責任を自覚した上で管理する事のできる空間がコモンズであり、それら地域内のコモンズを拠点に既存のネットワークの再生・復興、また新しいネットワークの創出が活性化されると考えられる。

そこで、ネットワークづくりのゲートとして青少年に焦点をあててみた。将来の社会を担っていく彼らのエネルギーを地域の活性化・ネットワークづくりに生かしたいと考えたためである。

企画の基本方針：青少年と地域を結ぶ

青少年を地域と結ぶためには、彼ら一人一人に街づくりの主役は自分たちだという意識（「自分たちのこと」「自分たちの街」「自分たちの仲間」）をもってもらうことが大切である。何か問題が出てきた場合に、それを自分たちの問題として受け止めてボランティアなどにつなげていくといったことがある。実際、何年か前に重油流出事故が起こったとき、サーファーたちが連れ立ってボランティアに行ったという事実が報告されている。ここでは、海がコモンズとなり、それによって地域とサーファーのネットワークが形成された。

しかし、現在の神戸市にはこのようなコモンズがほとんどないと思われる。また、公園における年齢層を考えたとき、小学生またはそれ以前の子どもたち・高齢者が大半に思え、彼ら青少年の姿はない。そこで、「彼らの地域での居場所の確保」「彼らのエネルギーを打ち込ませること」を市民と行政とが協働して形成する必要がある。

関連施策

青少年の居場所づくりの推進

地域への愛着づくり事業

「青少年は地域社会からはぐくむ」という視点に立ち、地域の青少年育成団体を通して、異年齢・異世代交流による地域の文化共有物づくりや、地域の遊び場等となる共有空間づくりに青少年が参加することを促進する。

このような物心両面での共有物（コモンズ）づくりによって、青少年の居場所づくりを推進し、地域への愛着心を育てる。

・地域において青少年の育成活動を行っている青少年育成団体を対象とし、交流事業1事業あたり200千円（事業費：2,000千円）（例、地域の遊び場、伝説、名人等を探った冊子の作成など）、遊び場づくり1事業あたり300千円（事業費：3,000千円）（例、地域での手作りふるさとモニュメント、ストリートバスケット等）助成する。

・青少年の居場所づくりを推進するにあたり、中高生に年齢の近い学生NPO等と連携し、調査及び事業を実施する。（事業例）若者がエネルギーを発散できる場づくりについて、青少年のニーズを調査し、居場所の提供を行う。事業費は1,500千円とする。

市民一人ひとりの健康の増進と生活の充実

震災後、市民の生活が落ち着きを取り戻すにつれ、心のケアも含めた幅広いニーズが発生してきた。生活再建を推進するためには、市民一人ひとりが心の面を含めた幅広い健康を推進するとともに、生活を充実させていくことが必要である。そのためには一人ひとりがスポーツや健康づくりに取り組むことが求められる。

健康を維持・推進していくには、一人ひとりがスポーツに親しんだり、健康づくりに取り組むことが重要である。そのスポーツに仲間同士あるいは地域で自主的に取り組めば、より効果的である。なお、仲間同士、あるいは地域での自主的な健康づくり活動等を行うことは、住んでいる地域内の交流を深めることを通じて、地域活動の活性化へもつながっていくと考えられる。

健康推進を目的とした仲間づくりや地域活動を行えるように支援し、人々がスポーツを楽しむ健康づくりができるまちづくり（アスリートタウン構想）を進める。

健康・スポーツ都市づくりを進める

市民の健康づくりやスポーツに対する志向の高まりを踏まえて、本格復興に向けてまちに活力と魅力をもたらす取り組みとして、「神戸アスリートタウン構想」を推進し、健康づくりやスポーツを通じて、市民一人ひとりが豊かさや生活の充実感、地域での一体感などを感じることを目指す。

市民・地域・市との適切な役割分担のもとに、関係団体の協力も得ながら、仲間同士の健康の確保・増進運動の取り組みを推進して、これらを通じた市民相互のコミュニケーションの円滑化を促進し、市民主体の自律的な共生組織の形成に向けた支援を行う。また、すべての人が、それぞれの年齢・技術・価値観に応じて多様な健康・スポーツ活動を楽しめる環境づくりに取り組むとともに、市民・NPO・事業者・専門家などが有する活力や創造性・ノウハウの活用を図るため、それぞれの主体的な取り組みを支援し連携を強める。

- ・誰もが参加できる健康づくり運動を通じて、市民全体の地域のきずなやコミュニティづくりを支援する「健康コミュニティづくり支援事業の全市的展開」
- ・市民・NPOの立場からアスリートタウン構想を自主的に進める活動を行っている団体への支援と連携の強化

*上記施策の中から「青少年の居場所づくりの推進」事業に参画する

企画の詳細

このプロジェクトの目標は、地域に新たなコモンズ（共有地・共有財産）をつくることにある。そこで今回はバスケットリングが神戸市各地に常設されることを考える。なぜならば、私たちは、そのコモンズとしてストリートバスケットに焦点をあてているためである。ストリートバスケットならば手軽にでき、広大なスペースを必要としないために、街全体で取り組めるのではないかと考えられるからだ。しかし、このプロジェクトを達成させるには神戸市民と行政機関の協力と理解が重要となるため、以下の方法を用いてこのプロジェクトに対する住民参加を呼びかける。

社会調査（意識調査・ニーズ調査）

◆ねらい

- ・中学生の「遊び場」に対する意識を調べる
- ・無料で使える遊び場、及び、バスケットリングへのニーズを探る

◆主な対象者

- ・神戸市民（主に中高生）

◆呼びかけ方法

- ・学校の先生方に協力していただき、学校に社会調査用紙を郵送
- ・生徒に記入していただいた後、返信用封筒にて返送していただく

◆取り入れる方法

- ・社会調査（郵送による）

◆プロジェクト★ユースの役割

- ・中高生の実体を把握する
- ・質問の回答者が質問内容でわからないところがあればそれに答える（一方通行にさせない）

◆まとめ方のフォーマット

- ・意見集計型
- ・表作成

試験設置

◆ねらい

- ・試験的にコモンズとしてのストリートバスケットリングを設置し、その利用に関しての実態を調査する。そして、実際にコモンズをつくった場合に想定される諸課題を明確にする為、利用者や近隣住民等からの意見を聞く。更には、特定の地域で新たにコモンズがつけられた場合、利用者と近隣住民の間にどのような関係の変化が現れるのかについて試験設置したストリートバスケットリングを通じて調査する。
- ・「stake holder」をつかむ（*「stake holder」…「わがこと」と思う人たち）
- ・生の声を聴く→ニーズ把握、課題の発見
- ・実際に使ってもらう→ニーズ・改善点・リング周辺の苦情などの、確認・整理

◆主な対象者

- ・神戸市民（主に中高生）

◆呼びかけ方法

- ・回覧板などを使い、リングの存在を知っていただく
- ・社会調査を実施した中学校へのお礼文を送付の際、試験設置情報を同封する

◆取り入れる方法

- ・社会調査
- ・インタビューを含む、対面でのコミュニケーション
- ・写真撮影

- ◆プロジェクト★ユースの役割
 - ・リングの管理
 - ・利用者の声を定期的に聴く
 - ・意見・苦情は余すところなく拾う
- ◆まとめ方のフォーマット
 - ・意見集計型
 - ・記録（表作成、写真など）
 - ・音声（テープにおとす）

ワークショップ（中高生・地域住民にむけて）

- ◆ねらい
 - ・「stake holder」をつかむ（*「stake holder」…「わがこと」と思う人たち）
 - ・中学生の意見を拾う→ニーズ・現状・要望の把握
 - ・地域住民の方々の声を聴く→多角的視点からのアプローチ、現状・課題の把握
 - ・ワークショップ後のアンケートにより、参加者の印象や評価を聴く
 - ・試験設置と平行して行い、その時すでにでてきている問題について解決策を考える
- ◆主な対象者
 - ・神戸市民（中高生、地域住民の方々）
 - ・市役所などの行政の方
- ◆呼びかけの方法
 - ・回覧板などを利用する
 - ・中高生については、社会調査をお願いした学校から選出し、参加をお願いする
- ◆取り入れる方法
 - ・KJ法
 - ・グループディスカッション
 - ・ディベート
 - ・ワークショップ後のアンケート（評価）
- ◆プロジェクト★ユースの役割
 - ・進行役をつとめる
 - ・話し合いがスムーズに進められるような雰囲気をつくる
- ◆まとめ方のフォーマット
 - ・意見集計型
 - ・グルーピング型

以上の成果を定期的に報告書にまとめ、HPに掲載する。更に行政や対象となった青少年にフィードバックして、それぞれのコモンズに対する意識の向上に努める。最終的にはアクションリサーチの論文にまとめ、行政や青少年にコモンズの重要性や必要性、そして意義などを理解してもらい、将来的に、行政の事業の一環として、神戸市内の各地域にコモンズとしてのストリートバスケット等の整備を進めていくように提案していく。

日程 (月)				
H12. 11~	<p>計画開始</p> <ul style="list-style-type: none"> 街中で若者がエネルギーを使える場所をつくりたい 神戸市震災復興事業においてられている、青少年の健全育成・居場所づくり に企画を考える 	<p>ミーティング</p> <ul style="list-style-type: none"> 企画案をねる 神戸市役所で、企画についての話が出来るように案を整理する 25日—神戸市役所訪問 企画について話をさせていただく (青少年課、体育保健課) 	<p>ミーティング</p> <ul style="list-style-type: none"> 「2. 24市民の集い」の参加方法について 13日—「2. 24市民の集い」会議に参加 @三宮センタープラザ 東館10F ブースをいただくことになる 予算は、3万円以内 	<p>H13. 2</p> <p>「2. 24市民の集い」の振り返り、社会調査の集計</p> <p>神戸市新規施策発表「青少年の居場所づくりの推進」</p> <p>上記に企画を検査する</p>
H13. 1	<p>事業スケジュール</p>	<p>ミーティング</p> <ul style="list-style-type: none"> 「2. 24市民の集い」にリソング仮設置を行う詳細について 「2. 24市民の集い」でシュートをうちに来てもらうためのポストアップ 	<p>ミーティング</p> <ul style="list-style-type: none"> 「2. 24市民の集い」にリソング仮設置を行う詳細について 「2. 24市民の集い」でシュートをうちに来てもらうためのポストアップ 	<p>H13. 3</p>
H13. 2	<p>住民参加のスケジュール</p>	<p>24日—「2. 24市民の集い」</p> <p>@東遊園地10:00~</p> <ul style="list-style-type: none"> リソング設置し、シュートを打っていた ポータルにサインし、記念写真を撮る 社会調査を実施—街中のリソング設置に対するニーズ調査、遊び場に対する意識調査 	<p>24日—「2. 24市民の集い」</p> <p>@東遊園地10:00~</p> <ul style="list-style-type: none"> リソング設置し、シュートを打っていた ポータルにサインし、記念写真を撮る 社会調査を実施—街中のリソング設置に対するニーズ調査、遊び場に対する意識調査 	

<p>H13. 4</p> <p>ミーティング</p> <ul style="list-style-type: none"> 神戸市新規施策に参画するための企画 <p>12日—神戸市役所青少年課訪問</p> <p>「新規施策詳細を伺う」</p> <ul style="list-style-type: none"> 予算—1500千円 対象者—NPO との連携(中高生に年齢の近い学生NPOと連携し、調査及び事業を実施する) 企画書出来次第、随時プレゼンテーション受付可能 <p>ミーティング</p> <p>社会調査作成—中学生の遊び場に対する意識調査企画書作成方法について</p>	<p>H13. 5</p> <p>ミーティング</p> <ul style="list-style-type: none"> 試験設置、場所 試験設置、時期 試験設置場所へ提出の企画書づくり <p>15日以後5月中—試験設置場へのプレゼンテーション実施予定</p> <p>*試験設置を6月中に行いたいため、5月中にプレゼンテーションを行いたいと考える</p> <p>5月中—試験設置場との交渉完了次第、市役所にプレゼンテーション</p> <p>*試験設置を6月中に行いたいため、試験設置決定次第、予算についての申請を行う必要がある。</p>	<p>H13. 6</p> <p>ミーティング</p> <p>「試験設置の具体的な案について」</p> <ul style="list-style-type: none"> リンク選択(スタンプインク or 壁に打ち込みなど) 周りに、ボールがでるのをさけるための方法について(ネットをはるなど) ボールの管理について <p>末日—吾妻小学校でのイベントの詳細を調べるため、関係機関へ連絡</p> <p>1日試験設置と社会調査が行えるかを調べる</p>	<p>H13. 7</p> <p>ミーティング</p> <ul style="list-style-type: none"> 常設可能な場所を探すワークショップ実施についての内容を煮詰める 中旬—神戸市役所訪問 中間報告 常設可能な場所について <p>試験設置場所の機動訪問</p> <ul style="list-style-type: none"> 中間報告 課題の発見 <p>試験設置場所での社会調査(別紙参照) 7~10月実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 平日・祝祭日・夏休みなど、期間設定を変えて行うためこの時期をとる 3ヶ月の間、使用してくれている人と直接、接する <p>7月中旬—ワークショップ実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象者—社会調査を実施した中学校の中から、参加中学生を抽出 実施場所—対象中学校で実施 内容—遊び場についてなど(別紙参照) 	<p>H13. 8</p> <p>ミーティング</p> <ul style="list-style-type: none"> 試験設置使用状況について ワークショップ実施についての内容を煮詰める 吾妻小学校でのイベント参加のための企画 <p>吾妻小学校でのイベント実施代表者を訪問</p> <ul style="list-style-type: none"> イベントの企画について話をすすめる <p>試験設置場所での社会調査</p> <ul style="list-style-type: none"> 特に、夏休みでの使用状況を調査 <p>8月中旬—ワークショップ実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象者—実際に、遊び場がある地域の住民(保護者など) 実施場所—その地域内の場所を借りて実施 内容—大人の視点から、遊び場に対しての現状と課題をさぐる。また、それ以上に必要性についてでも理解を深めよう
---	---	---	--	--

<p>H13. 9</p> <p><u>ミーティング</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 吾妻小学校でのイベントについて最終打ち合わせ 試験設置場所についての中間報告会 現段階での調査結果をまとめる (中間報告として) <p><u>中旬一神戸市役所訪問</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 中間報告書をまとめ、常設可能な場所に対してのプレゼンテーションを行う 	<p>H13. 10</p> <p><u>ミーティング</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 試験設置について 吾妻小学校でのイベントの振り返り・集計・分析 <p><u>試験設置場所の機運訪問</u></p> <ul style="list-style-type: none"> リンダ使用状況についての話をする 	<p>H13. 11</p> <p><u>ミーティング</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 全ての調査結果をまとめて報告書を作成 <p><u>市役所との最終報告会日程を決める</u></p>	<p>H13. 12</p> <p><u>前半一神戸市役所訪問</u></p> <p>「報告会」実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会調査、ワークショップ、試験設置などで得た調査結果を集計し、分析したものを元に、バスケットリンダを地域に常設していただくよう要望する <p><u>卒業論文にまとめる</u></p>	
<p><u>試験設置場所での社会調査</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 3ヶ月目で、少し認知度が出てきた状態の様子を調査する <p><u>吾妻小学校でのイベント実施</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 一日リンダ設置と社会調査を行い、事業を多くの人に知ってもらう 	<p><u>9月中旬一ワークショップ実施</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 対象者一3ヶ月の調査の中で、使用してくれていた人に呼びかけ集める 実施場所一試験設置場所の近隣で実施 内容一実際に使用してみるの生の声をひろう。課題・問題をひろう 	<p><u>住民への連絡文章送付</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 社会調査・ワークショップなどに参加いただいた住民の方を中心に事業の報告文を送付 (11月～12月) 	<p><u>住民への連絡文章送付</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 社会調査・ワークショップなどに参加いただいた住民の方を中心に事業の報告文を送付 	<p>尚、住民に対しては、私たちの事業内容・進行状態を知っていただくため、ホームページを作成し、公開する</p>

＜阪神・淡路大震災復興支援館の駐車場での試験設置にまつわる「プロジェクト★ユースの企画・提案の過程」、並びに「不許可の結果に至る過程」、及び「プロジェクト★ユースの解釈」＞

我々関西学院大学・立木茂雄ゼミ・プロジェクト★ユース（以下、P★Y）は卒業研究企画『地域のネットワーク強化のために新たな都市のコモンズをつくる』の一環として、阪神・淡路大震災復興支援館（以下、フェニックスプラザ）の駐車場においてバスケットリングの試験設置を企画し、担当のT氏を通じての提案を行った。これらフェニックスプラザにおける、「企画・提案の一連の過程」と「不許可の結果に至る過程」、「P★Yの解釈」を以下の順で報告する。

- ①提案内容の説明（2001/5/15・企画書提出、並びに2001/5/22・電話での補足説明より）
- ②フェニックスプラザの回答（2001/5/24・電話での内容より）
- ③企画の一部を変更しての提案内容の説明（2001/5/24・電話での内容より）
- ④再提案に対するフェニックスプラザの回答（2001/5/24・電話での内容より）
- ⑤「不許可決定」の詳細確認、及び訂正（2001/6/4・T氏との協議より）
- ⑥以上の経過に対するP★Yの解釈（2001/6/4現在）

①提案内容の説明（2001/5/15・企画書提出、並びに2001/5/22・T氏との電話での補足説明より）

全体的な企画内容、並びに試験設置に至る過程についてはP★Y企画書『地域のネットワーク強化のために新たな都市のコモンズをつくる』を前提としている。ここではフェニックスプラザにおける試験設置の企画詳細を説明する。

- フェニックスプラザの駐車場は、そこへ至る道路がアーケードであり、ほとんど利用されていないとP★Yが独自に判断し、P★Yの企画に駐車場の有効利用を盛り込む。
- バスケットリングはフェニックスプラザの壁面への設置、地面への埋め込み設置、簡易リングの設置のいずれかを予定。
- 期間は約3ヶ月を予定。（特定の地域のコモンズ〔共有財産〕として定着するまでの時間を考慮）
- 試験設置に関わる費用、並びに企画全体に関する予算は「青少年の居場所づくり推進（地域への愛着づくり事業）」の助成金を予定している。
- 近隣住民への企画の説明、並びに同意獲得はP★Yが行う。尚、その際「苦情受付」もP★Yで行う事の説明もする。

<注…この際、近隣住民の十分な同意が獲得出来なかった場合は、フェニックスプラザにおける試験設置の企画自体を断念する。>

- バスケットリング利用の際、ボールが道路へ飛び出し、通行人への被害も考慮し、道路側に防護ネット（高さ2~3m程度で、バスケットリングを利用する時に設置出来る簡易の物とする。）を準備する。
- 利用実態、並びに諸課題を利用者及び近隣住民から聞き取り調査を行う。P★Yの調査は週に数日（平日、週末休日それぞれを満遍なく）行う予定。
- 試験設置におけるP★Yの3ヶ月間の24時間管理はしない。よって、バスケットリング、並びに防護ネットは夜間もフェニックスプラザの駐車場に設置したままとする。

②フェニックスプラザの回答 (2001/5/24・T氏との電話での内容より)

上記のようなP★Yの企画・提案に対するフェニックスプラザ、並びにその管理者（兵庫県の外郭団体）の結論としては、「P★Yの企画内容で、フェニックスプラザの駐車場を使用する事は許可出来ない。」という事である。

- フェニックスプラザの壁面は、風力加重のみを想定して設計しているので、バスケットリングの設置は強度上不可能である。
- フェニックスプラザ、及びその管理者は駐車場を「5台分の駐車スペース」として所有しており、事実、駐車場として使用している。故に、その本来の目的が阻害される形での長期にわたる占有使用は許可出来ない。
- 駐車場を使用している際、バスケットリングが利用されているならば、駐車車両の安全を保障出来ない。
- 駐車場の使用に関しては、駐車場に至る道路がアーケードであるという事情から、使用が事前にわかっている場合もあるが、時としては緊急性を有して使用される場合もある。

③企画の一部を変更しての提案内容の説明 (2001/5/24・T氏との電話での内容より)

P★Yは上記のような不許可の回答を踏まえた上で、試験設置の企画に一部変更を加えての再度提案を行う。

- 駐車車両、並びに近隣住民、通行人への危険がある場合はバスケットリングを利用出来ない旨の注意書きを設置する。
- 駐車車両がある場合の利用制限を行う。（具体的には、フェニックスプラザに駐車場使用要請があった場合、その都度P★Y、並びにその協力者によってバスケットリングのボードからリングのみの取り外しを行う。3ヶ月という限られた期間であれば事前にわかる使用要請は勿論、緊急性を有する使用要請にも対応出来る。）

<注…「駐車場に至る道路がアーケードであり、通行車両は通行許可証が必要である。」という事情から駐車場使用に関しては、必ずフェニックスプラザに連絡が入る。>

④再提案に対するフェニックスプラザの回答 (2001/5/24・T氏との電話での内容より)

P★Yの再提案を踏まえた上でのT氏の回答(すなわちフェニックスプラザ、及びその管理者の回答)は以下の通り。

- 注意書きの効力は信頼できない。
- フェニックスプラザに駐車場使用要請（特に緊急性を有している場合）があった場合、その都度P★Yに対して連絡をいれるつもりはない。

<注…後にP★Yの誤解である事が判明。詳細は⑥にて。>

- 駐車場が本来の目的以外で使用される事は許可出来ない。

⑤「不許可決定」の詳細確認、及び訂正 (2001/6/4・T氏との協議より)

不許可決定へのP★Yの理解をT氏に伝えるが、いくつかの食い違いや誤解が存在した。それらについての細かい説明を受け、共通理解をつくる。

- 論点の整理。不許可の基本的な理由は「フェニックスプラザの壁面強度の問題」と「駐車場を管理

する上での根本的な意味付け」である。

- 「フェニックスプラザの壁面強度の問題」とは、バスケットリングの取り付けのみならず、風力加重以外の衝撃（バスケットボール等）には設計主が強度上の責任を持ってないという事を示す。
- 「駐車場を管理する上での根本的な意味付け」とは、フェニックスプラザ開設当初から駐車場は「5台分の駐車スペース」として管理されている事を示す。
- フェニックスプラザとしては、壁面の強度上の問題は言うまでも無く、「5台分の駐車スペース」という本来の目的の変更を行う事は出来ない
- 「歩行者への危険」やバスケットリングの管理状況、近隣住民の理解等は第二次的な問題（第一次的な基本的理由を抜きにすると議論の余地がある問題）である。

⑥以上の経過に対するP★Yとしての解釈（2001/6/4現在）

不許可決定の詳細を確認するまでは、この決定はフェニックスプラザの「P★Yの企画全体に対する協力の拒否」であると我々は解釈をしていた。これは「電話をするか否か？」の一点を巡っての誤解であったが、それ以前にこれは「もし許可された場合」を想定した話である。

最終的な確認作業を終えて、この過程を総括する。

我々の企画・提案は公の施設としてのフェニックスプラザで規定されている駐車場の意味付けを変更し、試験設置企画を実施するというものであった。しかし、我々は企画の趣旨に対するフェニックスプラザの同意を得る事が出来たものの、「駐車場を管理する上での根本的な意味付け」の変更に至る事が出来なかった。

我々の企画・提案はフェニックスプラザと同じ「震災復興」という共通の最終目標を持っていたが、行政（ここでは主に兵庫県）の壁が大きく、既成の制約というものは変わらなかった。我々の企画の拠所である「市民協働」は今回、目に見える形での結果とならなかったが、このような活動の積み重ねによって、いずれ行政全体で「市民協働」が本当の意味での機能を発揮出来るようになればと願って止まない。

最後に、突然の企画・提案にも関わらず、我々の企画を貴重な時間を割いて検討して頂いた阪神・淡路大震災復興支援館様、並びに我々の数々の失礼・無礼な言動にも関わらず最後まで担当して頂いたT様に深謝を申し上げます。

=====
関西学院大学 立木茂雄ゼミ

プロジェクト★ユース

- ・山本 聡司
- ・中山 裕平
- ・中村 佳史
- ・澤山 佳世子
- ・久保田 桂子

(E-mail:project_youth5@hotmail.com)

=====

社会調査の集計

Q1. 休みがあれば何処に行きますか？

	繁華街	ゲームセンター	友人宅	公園	学校	行かない(自宅)	カラオケ	ゲームセンター	映画	その他
♂	19	9	33	38	11	32	11	5	6	43
♀	56	49	21	18	1	27	0	2	0	18
不明	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

Q2. 友達と何をして遊びますか？

	スポーツ (球技を含む)	買い物	ゲーム	おしゃべり	カラオケ	マイクラ	その他
♂	102	5	85	4	15	20	19
♀	41	80	16	47	0	0	22
不明	0	1	0	0	0	0	0

Q3. 現在、公園を利用していますか

	はい	いいえ
♂	99	70
♀	84	85
不明	0	1

Q4. 公園をどのように利用していますか？(Q3. で「はい」を選んだ人に質問します。)

	スポーツ	おしゃべり	待ち合わせ	飲食	遊具で遊ぶ	その他
♂	73	3	3	5	9	14
♀	33	26	5	5	9	19
不明						

Q5. 公園に対する要望はありますか？(Q3. で「はい」を選んだ人に質問します。)

	カラオケの設置	広くて欲しい	衛生面の改善 (トイレ、ゴミ箱等)	特になし	その他
♂	40	23	6	24	20
♀	28	9	15	17	15
不明					

Q11. あなたの地域で、無料で、ボールを使って遊んでいる場所がありますか？

	ある	少ない	ない
♂	95	40	32
♀	76	50	42
不明	0	0	1

Q12. それは、どんな場所ですか、具体的に書いてください。
(Q11. で「ある」「少ない」を選んだ人に質問します。)

Q11. で「ある」「少ない」を選んだ人に質問します。

	公園	学校	公園(グラウンド)	児童館	その他
♂	68	19	21		7
♀	71	16	14	3	9
不明					

Q12. そこでは何が出来るか、具体的に書いてください。

(Q11. で「ある」「少ない」を選んだ人に質問します。)

	バスケットボール	サッカー	ボール	野球	ソフトボール	バレーボール	球技全般	その他
♂	53		42	49	2	2	5	11
♀	42		30	35	13	8	4	13
不明								

Q13. あなたの地域で、無料で使えるバスケットリングがあれば行きますか？

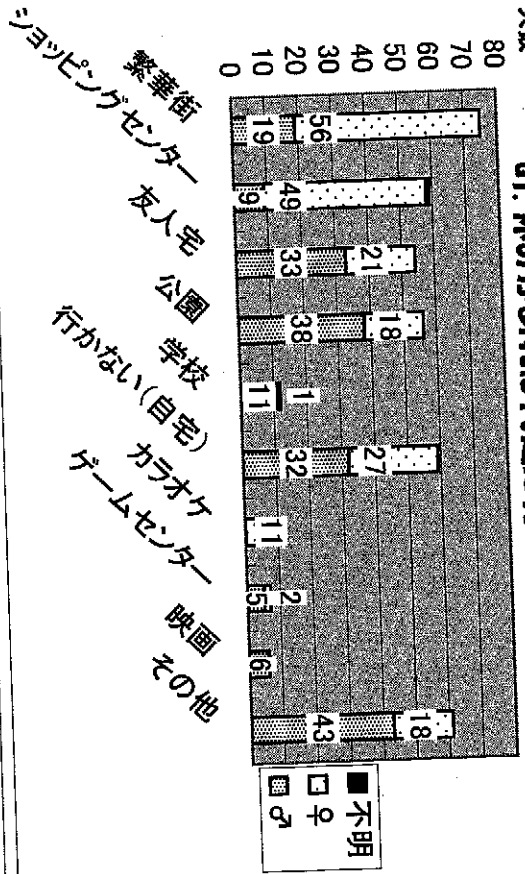
	行く	行かない
♂	147	22
♀	158	12
不明	1	0

Q14. どのくらいの頻度で行くと思いますか？(Q13. で「行く」と答えた人に質問します。)

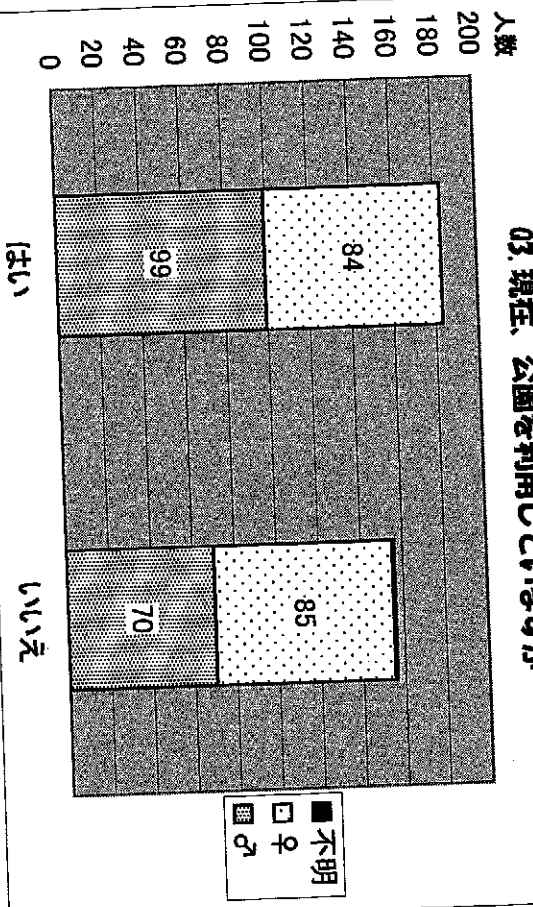
	時間があれば、ほとんど行く	時間があれば、ときどき行く	時間があれば、たまに行く
♂	46	67	34
♀	43	84	31
不明	0	0	1

人数

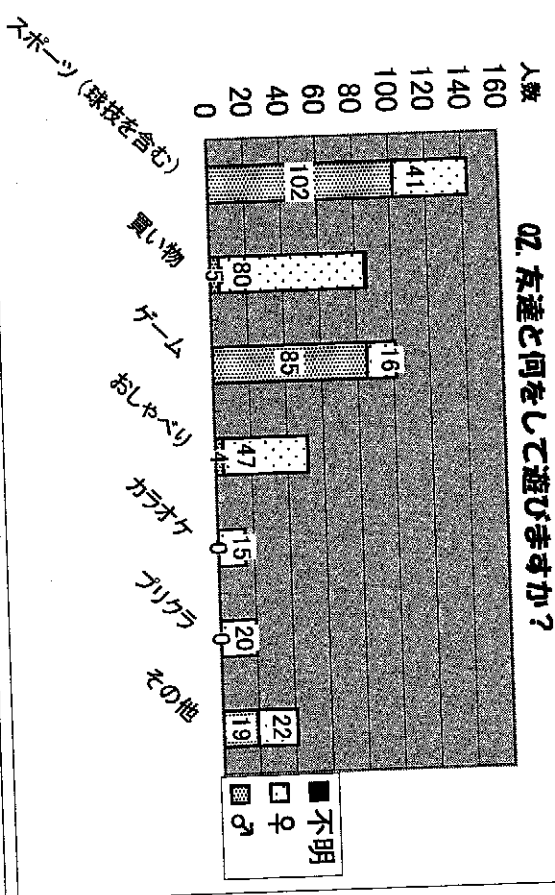
01. 休みがあれば何処に行きますか？



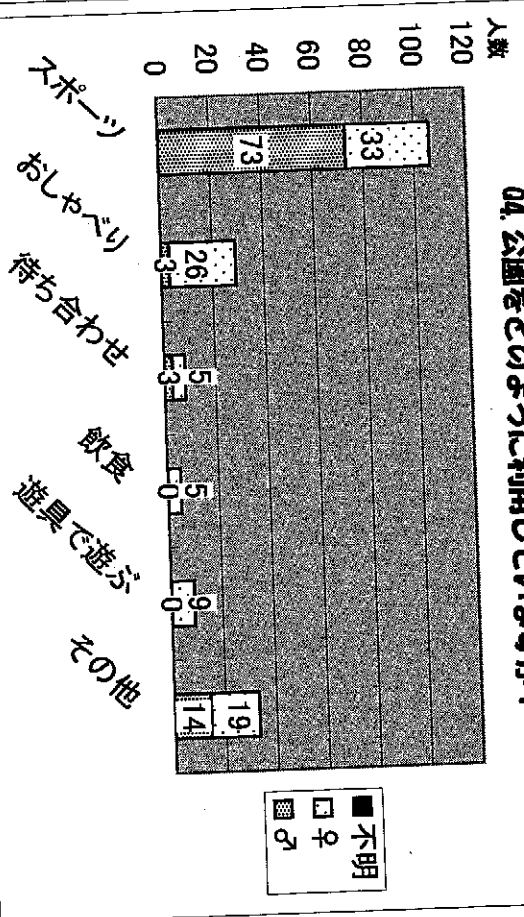
03. 現在、公園を利用していますか



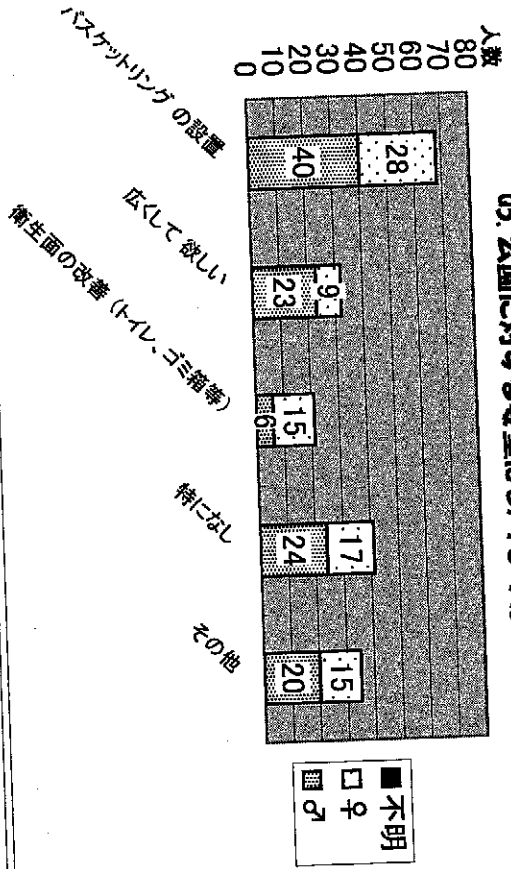
02. 友達と何をして遊びますか？



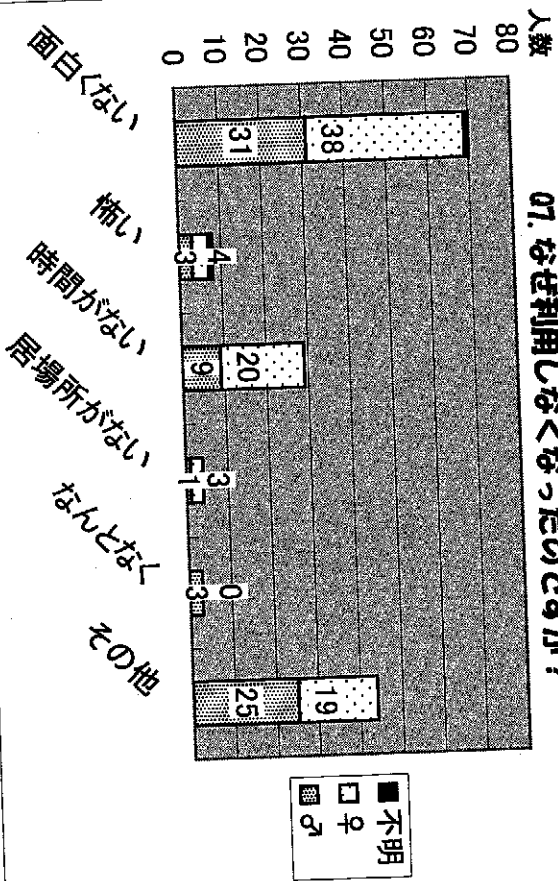
04. 公園をどのように利用していますか？



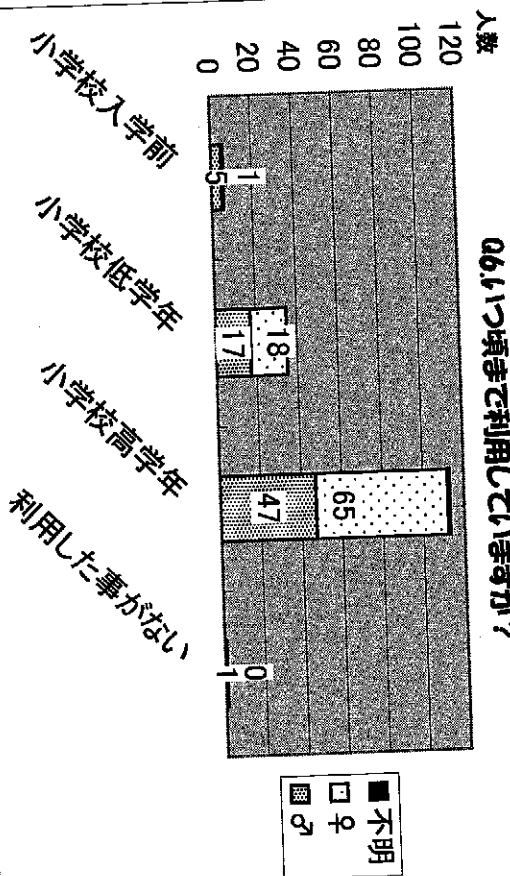
05. 公園に対する要望はありますか？



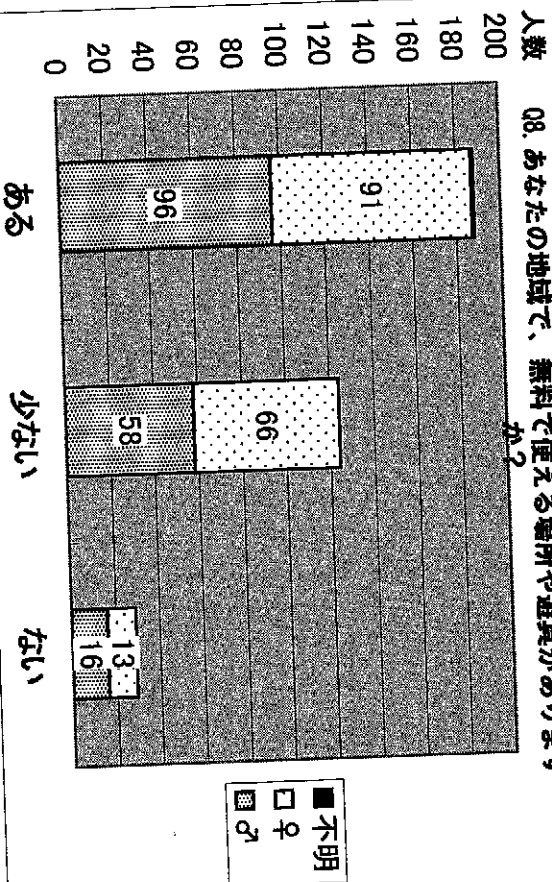
07. なぜ利用しなくなったのですか？



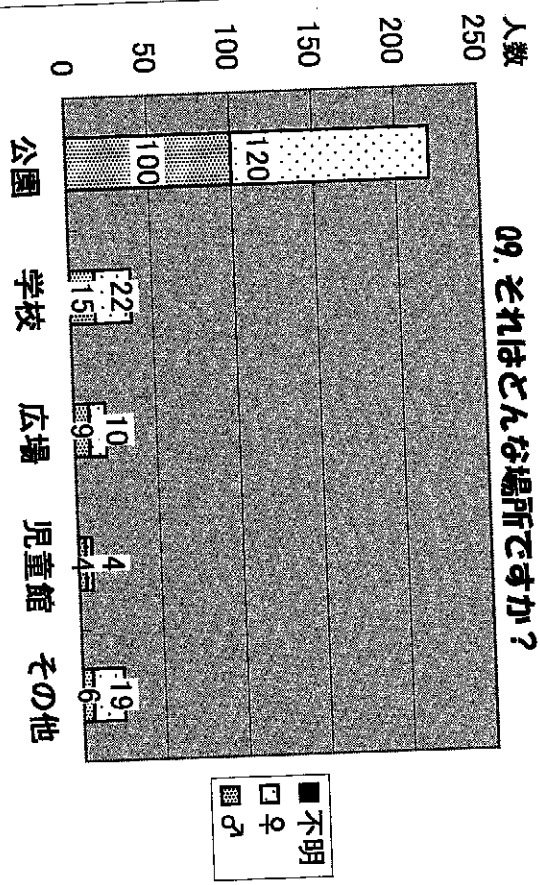
06. いつ頃まで利用していただけますか？



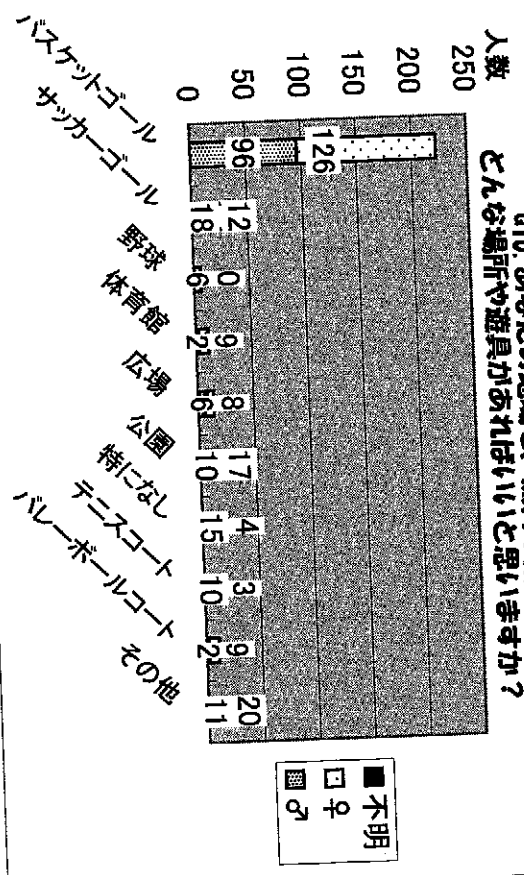
08. あなたの地域で、無料で使える場所や遊具がありますか？



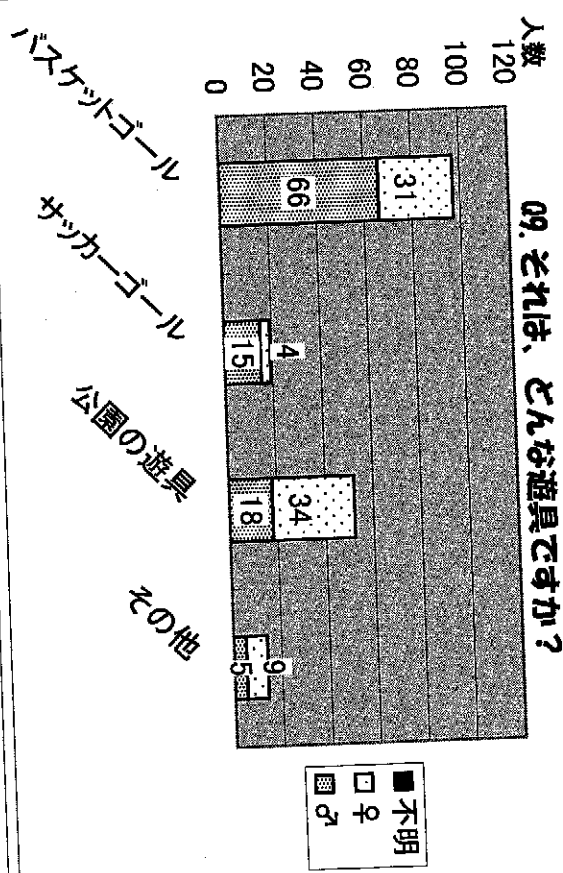
09. それはどんな場所ですか？



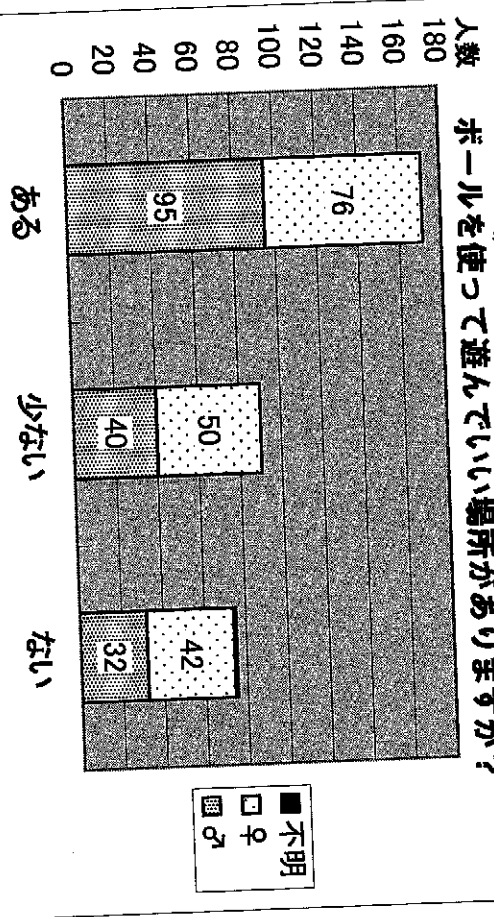
010. あなたの地域で、無料で使える
どんな場所や遊具があればいいと思いますか？



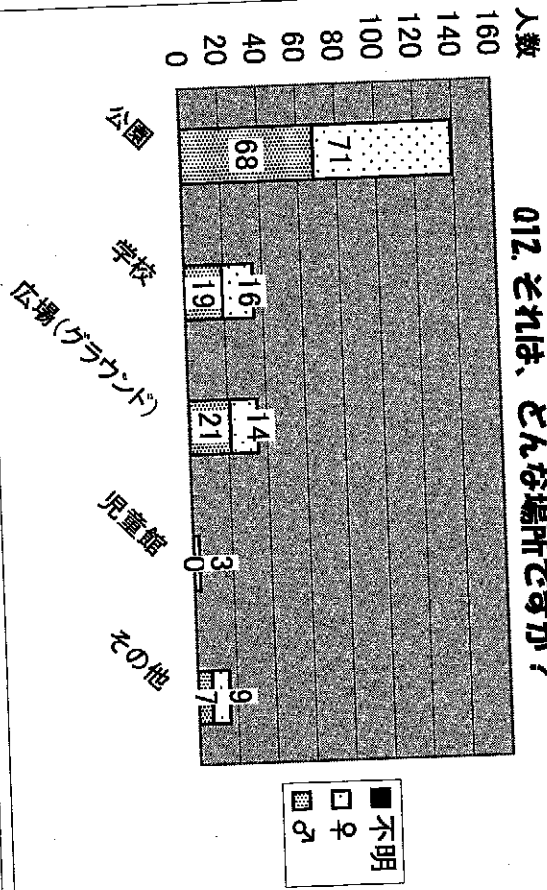
09. それは、どんな遊具ですか？



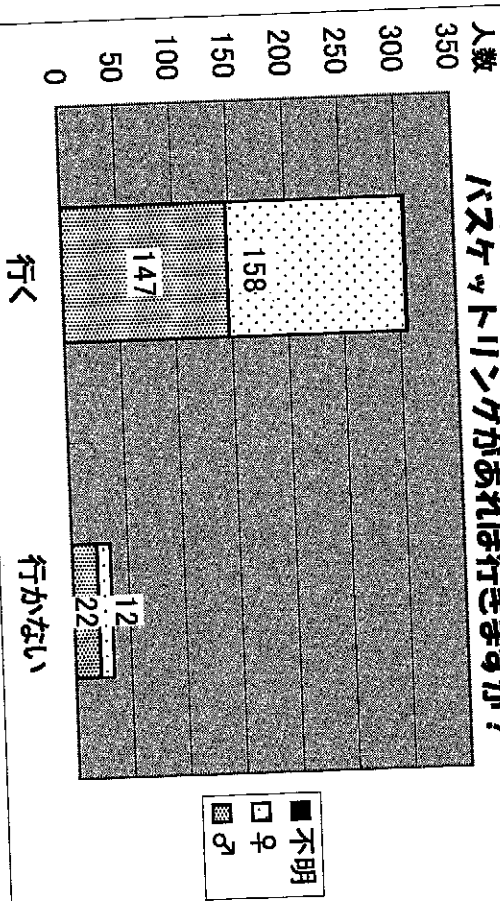
011. あなたの地域で、無料で、
ボールを使って遊んでいい場所がありますか？



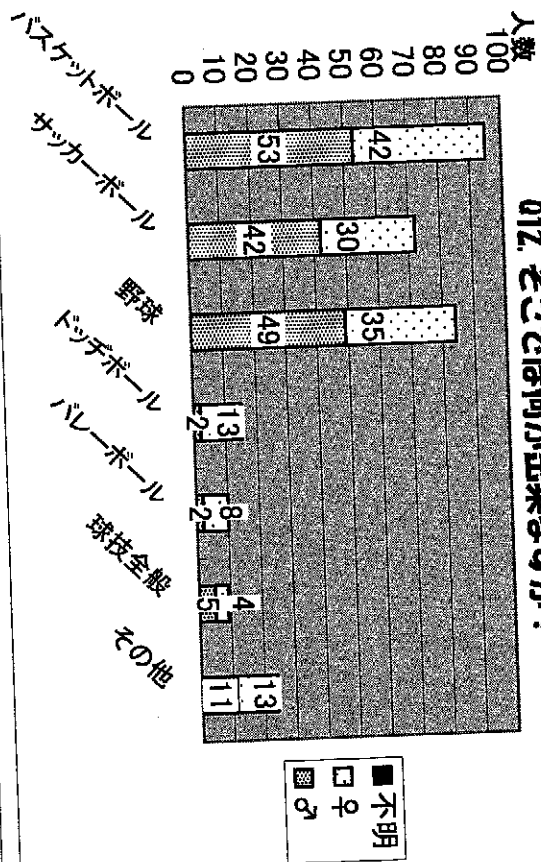
Q12. それは、どんな場所ですか？



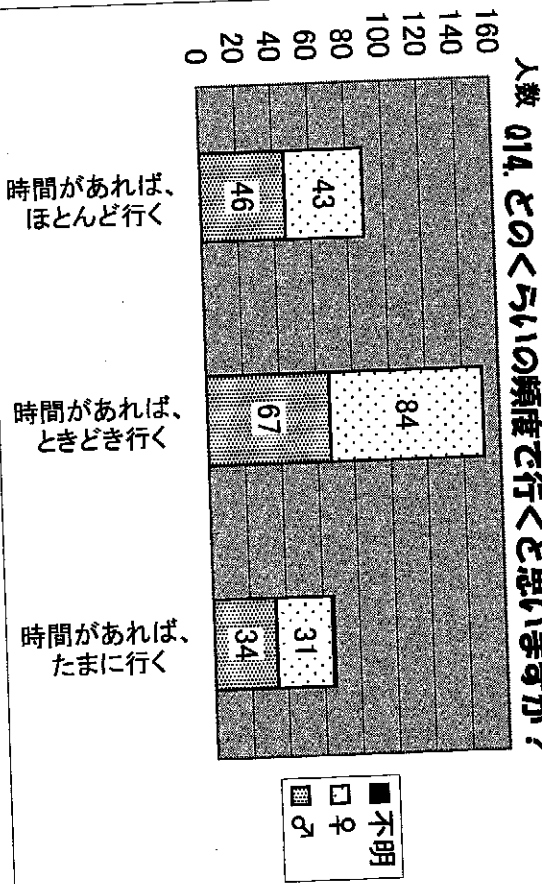
Q13. あなたの地域で、無料で使えるバスケットリングがあれば行きますか？



Q12. そこでは何か出来ますか？



Q14. どのくらいの頻度で行くと思いますか？



バスケットリング設置についてのお願い

私たちは、関西学院大学 社会学部4回生 立木茂雄ゼミのプロジェクト★ユースです。今回、私たちは卒業研究で「コモンズの可能性」に注目しています。震災から7年、新たなまちづくりが必要とされている神戸市で、青少年が「まちづくりの主役は自分たちだ」という意識を持つことが大切です。現在、公園には小学生以下やおじいちゃん、おばあちゃんの姿はよく見かけますが、中高生や大学生の姿はあまり見かけません。しかし、大学生以上になるとお小遣いを使い有料施設を利用できますが、有料施設を利用するだけのお小遣いもなく、公園なども利用しにくい状態にある中高生には居場所がないように思えてなりません。そこで、私たちは青少年と地域を結び付け、地域の中に青少年の居場所をつくり、彼らが「自分たちのこと」「自分たちのまち」「自分たちの仲間」と思えるコモンズ（共有物）を作ることを目指しています。私たちはそのコモンズとして、少しのスペースで気軽にできるストリートバスケットに注目し、バスケットリングを公園に設置することを企画しています。この企画を通して青少年のエネルギーをまちづくりにいかしたいです。

公園に期間を決めバスケットリングを試験的に設置し、その利用についての調査しようと思います。バスケットリングを設置する場合に想定される諸課題を明確にするため利用者や近隣住民の方々に意見を聞き、さらに利用者と近隣住民の方々の間にどのような関係の変化が見られるかを調査します。具体的にインタビューを含む対面でのコミュニケーション、社会調査、ワークショップ（集会のようなもの）などを行い生のニーズ、苦情、改善点を拾います。

以上の成果を定期的に報告書にまとめホームページに掲載します。更に行政や対象となった青少年にフィードバックしてそれぞれのコモンズに対する意識向上に努め、最終的に論文にまとめ、将来的に行政の事業の一環として神戸市内にバスケットリング等の整備を進めていくように提案していきます。

私達のプロジェクトを行うに当たり、誠に勝手ながら付近の住民の方々にご協力をお願いしたいと思います。私達が今回お願いしたいことは、まずバスケットリングの試験設置場所の提供です。主に公園に設置したいと考えていますが、付近の住民の方々には何らかの御迷惑をおかけすることが予測されます。そのため調査を行う前に御理解を頂きたいと思えます。

私達は青少年に対し、この調査期間の間に起こりうる問題を自分達で直視し、解決していく意志を持ってもらいたいと考えています。そしてまた、私達は試験設置を通じてどのような問題が起こるのか、またその解決方法をアクションリサーチという方法を用いて調査しようと思っています。

この調査において私達は単なる傍観者ではなく、青少年とふれ合いながら彼等と一緒になつてどうすればバスケットリングをより良い状態で使用できるかを考えていきます。ですから、問題が起きた場合私達が間に入り地域の方々や行政の方々そして青少年達と一緒に解決に全力を注いでいきます。

しかし、万一目に余る状態に陥った場合、試験設置期間を3ヶ月と予定していますが、その時点で即座に中止しリングも即刻撤去することを約束します。

次に管理ついてですが、これは基本的に私達が責任を持って管理させていただきます。しかし、実際の問題として私達が常にリングの近くに待機し続けることは困難を極めます。そこで付近の住民の方々にも管理をお願いしたいと思います。管理といってもリングが破損していたり、リングがあることで何か不都合が生じた等がありましたらそれを私達に連絡していただくだけで結構ですので、お願いします。

皆様の御理解をお願いします。

リングの試験設置について

時期

- 「7月中」にはリング設置を完了させたいです。
 - ⇒ 利用者の大半を占めるであろう小・中学生が「夏休みである期間」と「通常授業の期間」、両方について利用調査等を行いたいため。

設置期間

- 最低でも「3ヶ月程度」の期間を考えています。
 - ⇒ 自分達が現地（リングを試験設置させていただいた場所）に「毎日」顔を出すことは難しく、この設置期間が短期間だと訪問回数も限られてしまい、「調査」にならないため。
 - ⇒ 「リングがそこにある」という認識が普及する期間を見込んで。
 - ⇒ リング利用者（主に青少年）との関係を築くのに必要な時間を考慮する。
 - ※ ただし、やむをえずリングを取り外さなければならない事態が起こった場合は、即座にリングを撤去することを考えています。

リング

- 「埋め込み式」！？（要相談です）
 - ⇒ 安全性から見て（転倒可能性・強度など）

調査内容

- 利用状況（利用度・年齢層・性別・人数など）
- 生の声（意見・要望・苦情など）
 - ⇒ リングの利用者だけに限らず、リングを取り巻く地域の方々も含めて。

調査形式

- インタビュー
- 社会調査（簡単なアンケートなど）
- 対面的なコミュニケーション（インタビューのような形式ばったものではなく、気軽に）
- 実際に自分達もリングを使用し、子どもたちと戯れる。
 - ⇒ “Stake holder”（「わがこと」と思う人）になっていってもらおう。

調査ペース

- 最低週1回はメンバー全員で現地を訪れる。
 - ⇒ 社会調査などを行う予定。
- 週2、3回のペースでメンバーが現地を訪問し、一緒にバスケットをして交流をつくったり、インタビューを行ったりする。
- ◎リング設置後1ヶ月程度で、皆様からの「リング設置に関するご意見・質問・苦情等」を、こちらがお伺いする機会を設けていただければ幸いです。

ボール

- 基本的には各自持参で。
 - ※ ただし、ボール管理に関して協力していただける方がいらっしゃる、あるいは、協力していただける場所がある、ということになった場合は、喜んでボールの提供をさせていただきます。

月 日 () 天気 () 時間 () 調査者 ()

利用人数 女 () 人 ・ 年齢 () 歳	利用者について
男 () 人 ・ 年齢 () 歳	

どこから来ましたか？通っている学校はどこ？

リングがある以前からこの公園を利用していましたか？ 普段はどんなところで遊びますか？

どのようにしてここを知りましたか？

利用時間帯はいつが多いですか？またどのくらいのペース（頻度）でここを利用していますか？

バスケットボール部に所属していますか？バスケ経験はありますか？

ボールはどうしましたか？前から持っていた？購入した？

このリングを利用するにあたって喧嘩や問題が生じたことはありますか？
例えば：2つのグループで利用したい時間帯が重なった時などはどうしているのか？

これからもあった方がいいと思いますか？

困ったことや要望はありますか？

地域の方（散歩している方などへの質問）

リングがあることを知っていましたか？どうやって知りましたか？

このリングを置いて問題や困ったことはありますか？もしくは、聞いたことはありますか？

感想、その他

中間報告書

～宮本公園におけるバスケットリング利用の調査報告～

プロジェクト★ユース 2001/11/1

- 利用時間帯**
- ① 20時～22時
 - ② 17時～20時
 - ③ 土・日・祝の昼

- 利用者年齢層**
- ① 高校生以上
 - ② 中学生（目撃者談による）

リング利用者の声

- ・ 電灯が明るいので夜でもできてよい。
- ・ ボールが出ても拾いにいける範囲なので、ネットは必要ない。（ネットがあれば景観が損なわれるのでないほうが良い）
- ・ プロジェクト★ユースの活動にすごい共感できる。こういう活動をもっと広めていってほしい。
- ・ 「神社」と「バスケットボールリング」という mismatch が最高。
- ・ リングが地域の人に受け入れてもらえるように自分も良い公園作りに協力する。
- ・ 学校開放でもリングを利用できることは知っているが、池田の殺傷事件後、視線などが痛くて、19歳の自分が小学校に入りにくい。
- ・ 学校開放では利用可能時間帯が限られている。公園のリングは好きな時に利用できる。
- ・ リング使用でこれまでトラブルはない。
- ・ 先にリングの利用者がいても、一緒になってバスケットをするなど、結構「つながり」ができています。
- ・ ボールが柵の外に出たとしても、それが下の道路まで転がっていくことはないので、大丈夫。
- ・ ゴミなどがあればそれは拾って帰るようにしている。
- ・ リングの設置前と後で、特に大きく変わった点は今のところない。トラブルもない。
- ・ リングがあればあるで、子どもたちが遊ぶのでそれでいい。
- ・ バスケットをする人と、サッカーをする人で場所の取り合いになったことはない。自然に譲り合う。
- ・ 他の利用者とは出くわしたことがある。ボールを貸してあげたり、話をしたり、一緒にバスケットをしたりした。
- ・ 孫が来たときにつれてきており、試験設置とは言わず、継続しておいてほしいので毎日でも利用にこようかと思う。

リング利用者からの要望

- ・ リングをもう少し高くしてほしい。
- ・ 『試験設置』とは言わずに継続でおいてほしい。

→この要望が一番多いです。お話を伺った方全員からこの要望がでています。

バスケットリング利用者以外の地域の方々の声

<空手教室の指導者の方> — 週3日ぐらいで17時から21時ごろに宮本公園のリングのある場所で空手練習の指導をされている先生です。

- ・ 騒音も含め、空手の練習をするのにバスケが邪魔になっているということはない。
- ・ リング利用者のマナーも良い。
- ・ 利用が増え、場所の問題などができれば何曜日と何曜日は何が使うなどのルールをつくればよい。
- ・ 空手の練習時間内で1～3人は毎回利用している様子を見る。

<学校開放の管理をしている方>

- ・ 小学校で学校開放をしているのだからもっと利用してほしい。公園にリングができたらそっちに流れてしまわないか少し心配。

→学校開放は10時～12時、14時～16時の4時間と時間制限がある。それ以外の利用には公園のリングが適している。また、高校生以上になると小学校に入っていくと、不審者ではないかという目で見られるなどの心配があり、なかなか利用しづらいという意見もある為、小学生以上には公園のリングが有効であるといえる。

- ・ 夜の公園の利用で問題がおきないか少し心配。

<公園横の喫茶店の方>

- ・ たまに公園の様子を伺うと中高生ぐらいの男の子が、4、5人でボールを持ってきて利用している。
- ・ 特に悪いと思われる行動はないが、ダンクしてぶら下がったりしているのが少し危ないかと思うこともある。
- ・ 子供が健康的に遊んでいる姿が最近見られないし、すごくいいことだと思う。

<公園を利用している地域の方>

- ・ このあたりの小学生は自転車で走り回って遊んでいることが多いので、小学生の利用はなかなかないと思う。
- ・ 初めてリングがあるのを見たけど、かなり良い。ボールがないから遊べないけど、持っていれば利用する。
- ・ リングが2つだと邪魔になったかもしれないが、1つだし特に邪魔にもならない。野球と違ってボールも飛んでこないのが良い。
- ・ バスケを指導できる人がいればもっとよくなると思う。
- ・ 若者がごみを拾っているのを見かけたことがある。

私たちの意見

リングの試験的設置を始めて、当初考えていた騒音、ゴミなどの苦情、リング利用者が重なったときに起こるトラブルなど問題はまだ見られない。また利用者同士や私たちを通してのコミュニケーションによるつながり、利用者が宮本公園を利用しているという意識、つまり地域への意識が強まったように思える。実際、私たちがゴミなどを拾うところを見て、ゴミを持ち帰る利用者もいた。リングを利用することによりリングを自分たちのものだという意識ができてくると考えられる。

いっしょにバスケットやりませんか？

日時

11月18日(日) 13:30~15:30

and

同日 18:00~21:00

★上記の時間帯なら、いつ来てくださってもけっこうです。

ボールも用意しています！

※ 当日が雨天の場合は…11月23日(祝)
13:30~15:30 and 18:00~21:00 に延期！

場所

宮本公園 福祉センター前ひろば
(ココ)

バスケットリングに対する意見を聴かせてください

By

プロジェクト★ユース (バスケットリング設置責任者)